

ワールドトリガーのヒロインたちが色々な目に遭うお話

名無犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿作品です。

名前の通りのエロ連作。

いろいろな作品のヒロインが作者の妄想のままにいろいろな目に遭います。エロエロな目にも遭います。

設定のエロ悪用とか目指して書くので、原作にそぐわない設定の解釈が多々あります。

基本的には気分が向いたときに書いていくつもりなので、更新頻度などにはお目つぶりをお願いします。

できれば皆様の右手のお供にさせていただければという程度のエロを目指していきま
す。

なお、作者のストライクゾーン非常に広いです、熟女からロリまでは余裕で行けるス
トライクゾーンなので、嗜好狭めな方には許容しかねる年齢層のヒロインがひどい目に
合うこともあることはご了承ください。

なお、竿役は基本的には作中人物よりオリジナルで行きたいと思いますが、作中人物
に竿役を果たせる人物がいた場合はその限りではないかもしれないのでその辺はご留
意ください。

目次

雨取千佳の場合							
雨取千佳の場合	その1						1
雨取千佳の場合	その2						28
雨取千佳の場合	その3						54
雨取千佳の場合	その4						92
雨取千佳の場合	その5						127
雨取千佳の場合	その6						158
雨取千佳の場合	その7						180
雨取千佳の場合	その8						216

雨取千佳の場合

雨取千佳の場合 その1

とある近界のとある国に、ひとつの黒トリガーが生まれた。黒トリガーの生成は、その性質上悲劇的なものになりがちだが、その黒トリガーは、悲劇的な喜劇の元に生み出されたものだった。

その国には、ある一人の、トリオン研究に生涯を費やした科学者がいた。その科学者は、生涯を費やしたので異性を知る機会がなかった。そして今際の際に思ったのだ。

「我が生涯の傑作は、エロい事に特化しよう」と。

天才と何とかは紙一重とはよく言ったものである。

そういう経緯があつて、彼は黒トリガーの制作に己のすべてを込めた。込められるだけの才能があつてしまった。天は確実に与えるべき才能を間違えてはいたが、彼の作り出したトリガーは、単なる煩惱の塊と云うには異常な性能を誇ることになる。

その能力とは、近界に及ぶ次元干渉である。

通常、界を渡る際には莫大なトリオンを用いて建造された遠征艇を使用しなければならぬが、そのトリガーは近界を形成するトリオンと使用者のトリオンを同調させ、単

身での遠征を可能とするとしてもない代物であった。

工口目的に作られたとはとても考えられないそれは、科学者が黒トリガーとなつた後にも長らく使用者が現れなかつた。

というのも、単に適合しただけでは界渡りの際に生存できるか不明な上、使用すると確実に別の界へ行つてしまう仕様上、誰にも使わせることができなかつたからである。

その上、どの程度の距離を渡れるのかも分からない。使いこなせさえすれば諜報においてまさに無類のそれは、しかしして無用の長物に成り果てていた。個人以上の組織的運用には、あまりにも信頼という要素の重さが大きすぎたのである。

しかしある時、一人の適合者がそれを持ち出し、起動させた。類稀なトリオン資質を持ち、なおかつ類稀な煩惱を持つ、そんな一人の手によつて、起動させられてしまったのである。

(うおおおお、なんだこれ)

トリガーを使用した瞬間、彼は近界の星の海を浮遊していた。足元に見える星は、おそらく彼の故郷たる国だろう。その偉容を目にしたとき、彼は起動の成功を悟り、同時に、故郷との決別を悟つた。

(これは駄目だ。戻つたら確実に殺される)

なにせ、実証されてしまった。このトリガーは危険だ。単身での所謂遠征を可能とするくせに、自由度が異様に高い。トリオンはゴリゴリ食われているから並のトリガー使いにはそもそも使えないだろうが、使える人間が存在するその事実だけでもうマズい。実際この星星の大海の中、「浮遊している・できている」という時点で頭がおかしいと言える性能だったのに、彼にはそれ以上のポテンシャルを秘めていることが理解できてしまった。

そのポテンシャルを活かすべく、彼は飛んだ。

向かう先はある小さな星。ミデンと呼ばれる、ある一人の少女がいる星だった。

それが起動した瞬間、雨取 千佳はその日も玉狛支部にて訓練に精を出していた。

彼女のトリオン量はモンスターと称されるレベルであるのだが、それ故に、その日常が変えられることになる。

「ふう……今日はもうちよつとだけ撃ったら終わろうかな」

師匠の支持どおり、いつも通りに訓練をしている。そのはずだった。

訓練の終わりが見えてきた頃、千佳は不意に、身体に異変を感じた。

身体の表面、服の内側を何かが這うような感触に襲われたのである。まず下腹部のあたりを感じたそれは、次第に千佳の身体の各部に発生した。千佳は思わぬ感触に戸惑い

を覚える。

「トリオン体なのに、おかしいな……ひうつ」

這い回る感触に足の裏をくすぐられ、思わず声上がる。千佳は足元を含めあたりを見渡すが、やはり周囲に誰がいるわけでもなければ、感触が消えるわけでもない。

カメレオンを使っている何者かがいたとして、服の内側に感触を覚えるのはおかしいし、何より意味がない。

「う、宇佐美さんも今はいないし……」

オペレーターの宇佐美は、今日は別件で外しているし、得体のしれない状況の中で一人という現状がさらに千佳の混乱を煽る。

這い回る感触は、次第にある点を定めてきていることに千佳はこの時まだ気づいていなかった。

「ん、なんだこり」

ミデンへと飛んだはずの男は困惑する。何かに引つ張られるような感覚がしたあと、そこまで広くはない空間へと引きずり込まれた。おそらくは何かしら空間に手を加えた圧縮された次元にいることは分かるが、ここが一体どこなのかと辺りを見回す。

「お、何これ。女の子？」

すると、空間の中心あたりと思しき場所に、一人の少女が横たわっていた。年の頃は10代前半に見える、幼さを残した少女は、何を隠そう雨取 千佳の生身の身体そのものであった。

「……、もしかしてトリガーの中か？」

トリオン体形成時に生身の肉体を保存する空間。トリガーに含まれた機能であり、同時に独立したその空間への干渉はできないはずのそれを、男は突破していた。のみならず、状況を正しく把握し、また煩惱のままに狭く理解していた。

即ち、目の前にあるのは意識のない女体である、と。

前人未到の事を成したとか、トリオン体によるトリガー使用者の保護の絶対性が崩れたとか、そういうのは男にとって些細な問題だった。

目の前にあるのが、まさに自分が自由にできるあどけない少女である。そのことのみが重要であった。

もともと、界を渡ることができるなら覗きがバレても確実に逃走できるという、目的と手段をどこか履き違えたような考えに基づいて黒トリガーを強奪したような男である。強奪できてしまう能力があったということが無能とは言えないどころか有能な男なのだが、それを貶めて余り有る性欲故に異性から警戒されてばかりいた彼の前に置かれた据え膳に、手を伸ばさない理由はなかった。

「はへい」

生唾を飲み込むと、彼は千佳の身体の足元に移動する。現在、千佳の意識はトリオン体にあるため、不埒者が近づいても反応などもちろん無い。浅く上下する平たい胸を見るに、生命活動自体は行っているようだ。

男は試しに足に触れてみる。温かさを感じた。なるほど、トリガーに格納されているときでも身体は普通に生命活動を行っているらしい。トリオン体が生身と繋がっていることから、ある意味当たり前ではあるが、排泄などの関係を考えると、長期間トリオン体に換装している場合もしかすると健康に被害があるかもしれない。まあ、そもそも日常をトリオン体で過ごす意味もないかと彼は独りごちつつ、人形然としつつも確かな人間の女を弄ぶべく、千佳のチエツクのミニスカートに手を伸ばした。

裾を摘んで持ち上げて脚の付け根を覗き込んでみれば、そこには飾り気のない無地の白い布が見える。彼女の秘所を覆うそれを目にして、男の鼻息が荒くなった。

興奮をなんとか抑えて、男はスカートをひとまず離すと、続いてパーカーとシャツの裾から千佳の下腹部に手を差し込んだ。そのまま何度か千佳のすべすべしたお腹を撫でると手を下に向け、パンティのゴムに人差し指を差し込んでスカートのウエストごと持ち上げて隙間を開ける。

覗き込んでみると、千佳のそこに発毛の兆しはなかった。ロリコンのケもある男の興

奮がいや増す。まだ秘所そのものを挿んではないが、その焦らしが男にとってはカンフル剤だ。

荒い息もそのまま、ゆっくりと千佳のパーカーのジツパーに手を伸ばし、震える手で少しずつ、少しずつ引き下ろしていく。終点にたどり着けばジツパーは基部から外れ、はだけたパーカーの奥の、下着同様飾り気のない、しかし千佳によく似合う素朴なシャツが露わになる。

浅く上下する胸元は、千佳の小柄な体格のまま、まだ女性としての成熟からは程遠いが、それでも男にはない微かな膨らみを持っていた。

いまずぐその慎ましやかな双丘に手を伸ばしたくなる衝動が男を襲ったが、ぐつとこらえて男は千佳の頬に手を伸ばした。瑞々しく手に吸い付くような柔らかい頬だった。少女の無垢性に触れたような気がして、そして同時にそれを己が踏みにじれる喜びを感じて、男の股間に血液が集中する。

と、そこで、男はある変化に気づいた。

「ん？ 反応、してるのか？」

男が頬に触れ、その手が唇にわずか触れたとき、千佳の口の端がほんの少し震えた気がしたのだ。

だが、意識はトリオン体にあるはずの少女の身体が、何故いまここでの刺激に反応を

見せるのだろうか。

「まさか、こいつか？」

男は己の黒トリガーを取り出し、起動状態であることを確認する。このトリガーの特性は、基底となる部分を要約してしまえば「周囲のトリオンと自己のトリオンを同調させる」というものだ。この空間はトリオンで構成された疑似空間であり、そこを己のトリオンと同調させてしまえば、そのトリオン構成のもととなったトリオンを己が掌握するに等しい。その能力があればこそ、界を強引に渡るのではなく、すり抜けるとうべき方法でこの黒トリガーによる界渡りが可能となっている。

その能力でこの場の起点であろう少女のトリオンと同調しているのであれば、この場で生身に起きる刺激がトリオンを通じていま活動している少女の元へ届いている可能性はある。

その考えに至り、男はとても下品な笑みを浮かべた。この場では想像するしかないが、もしそうだった場合は、この無垢な少女は何も知らないまま、己の与える刺激に身を悶えさせるのだ。それは、事を終えても少女自身に汚された自覚のないままであるより、よほど男の嗜好に適っていた。

ものは試しと、男は少女の靴と靴下を抜き取り、足裏をくすぐってみる。表情は眠ったままだが、足を締めようとするような反応がかすかに帰ってきた。

己の予想があながち間違いでない可能性が出てきた男は、元々漲っていたヤル気をさらに滾らせて、千佳を本格的に弄り倒すことにした。

「……………うひゃあっ!? ……ふあっ、んふっ……………」

這い回りは数分経つても取まることなく、むしろ激しさを増して千佳の身を苛んでいた。

千佳はまさか今まさに自分の本来の肉体が一人の男によつて弄ばれていることなど知る由もなく、襲い来るくすぐったさに身悶えるばかりだった。

そう、くすぐりたいのだ。特に痛みを与えてくるわけでも、これといった異常があるわけでもなく、ひたすらにまさぐられてるのはくすぐりたいやら不快やらで、無論まだまだ未成熟な少女である千佳が快感を得るわけもない。

「うう……………だ、誰なんですひゃっ!? ひいっ! や、やめてえ……………」

だが、数分もこれが続けば、自分を苛んでいる感触が何者かの手であることくらいは認識できる。つまり、いま自分は得体のしれないナニカに身体を触られているということであり、それは年頃の少女である千佳には普通に極めて不快だった。彼女の持つサイドエフェクトの影響もあり、自分を害そうとする存在には極めて敏感であるはずの千佳にとつて、気づいたときには既に接近を許していたこと自体が恐怖とも言えた。

自分がこんなことをされる原因がわからない。

自分にこんなことをする意味がわからない。

世の中には、痴漢というものがいるが、それは自分みたいになちんちくりんには無縁の存在であるはずだった。それでも、これが普通の痴漢であるなら千佳は逃げるなりできたはずなのだ。

それができない。這い回る感触は走ろうと跳ぼうと転がろうと離れてくれない。

未知の感覚と未見の恐怖、未開の不安に千佳は必死に耐える。

そもそもが、身動き一つ取れない生身の自分に与えられる刺激が現況であることなど、わかるはずもなかった。

その刺激が、千佳自身もまだ知らない感覚を教えてくるのは、そう遠くない先のお話。

「ははっ、これ愉しいなあ」

千佳の身体を好き放題し始めてから、男は終始ご満悦だった。徐々に同調が彼女のトリオンを通じてトリオン体にまで深まっているのか、段々と千佳の体温が上がっている。息も少し荒くなっており、上気した頬はピンク色に染まっていた。

だが、それは決して快感によるものでないことは、寄せられた眉を見ればわかった。

そこで男は次の段階へと進むことにした。

「よいせつ、うわ軽いなこの子」

男は千佳の身体を持ち上げると、パーカーを脱がし始める。パーカーを横に無造作に放り投げ、ごくりと喉を鳴らしてから、男の怪しい手付きは千佳のシャツの裾へ向かう。下から捲りあげるように少しずつ少しずつ上へとシャツを持ち上げれば、千佳の可愛らしいおへそが顔を出した。

男の息遣いはもはや変質者のそれであり、行いもまさしくその通りであった。躊躇いなく男はその臍のくぼみに指を這わせる。千佳の身体が逃げるように身をよじる。トリオン体ではない生身の反応も、徐々に大きくなりつつあった。

少しの間千佳のおへそを堪能して、男は目的を再開する。千佳のささやかな膨らみの手前までシャツが持ち上がると、パンティと同じ色の白い布地が見えた。

「へえ、一応ブラはしてるんだなあ」

その下と同じく飾り気のないシンプルな、ランジェリーというよりは肌着といえるそれは、まだ双丘に手を付けることなく、自ら焦らしに焦らした男の劣情を煽るには充分すぎた。首元まで一気にシャツをまくりあげると、男が突然シャツから手を離して硬直する。

「あつぶねえ、ちよつと出そうになった」

千佳の身体は、男のストライクゾーンから見れば十二分に許容範囲どころか、絶好球

に近いものではあつたが、それよりも行為自体に興奮が高まりすぎて男は果てかけた。あまりに情けない自体を間一髪で回避した男は、改めて生唾を飲み込むと千佳のやや戻つたシャツを

再び捲り上げる。

「おお……」

男は千佳のブラをまじまじと見つめて嘆息した。少女特有の、禁忌感。まだ「そういう対象」であつてはいけないうハズの年端も行かない少女を汚す前段階における、聖域の終わりの一步手前の、何とも言えぬ征服欲のようなものが男を高揚させていた。

男はそのまま千佳の上半身を抱きかかえるように自分に凭れさせると、万歳の体制にしてシャツを剥ぎ取つた。ささやかな膨らみが身体に当たつて、男にたしかなまんぞくを与える。

再び横たえると、先程は人差し指だけで持ち上げたスカートのウエスト部分をしっかりと掴む。今度はスカートだけに手をかけて、千佳の小ぶりなお尻を持ち上げると、シャツと同じようにゆっくりと下ろし始める。

徐々に徐々に、千佳の女の子の部分を守る最後の砦が姿を現していくにつれ、男の興奮も天井知らずで高まっていく。

ウエストのゴム部分が見え、フロントに施されたりボンは少女らしさをかきたて、同

時に男の情欲をかきたてる。やはり飾り気のない布地が秘所を覆うクロツチの部分まで暴き出されると、男はそこから先は些事であると言わんがばかりに一息にスカートを抜き取った。

そこには、下着姿となった千佳の姿。おそらく異性としては家族以外には初めて晒されたであろう姿は、先程までの男のいたずらによつてほんのり上気した肌に、無垢な白さを誇る両の下着が秘部を隠すことで、あどけなさどエロスが両立したものであった。少なくとも男にとつてはどんな芸術品よりも価値あるものだ。自分がそうさせた姿であるという事実がさらにそれを跳ね上げていた。

「ひっ!?!」

千佳は唐突に、今まで脇の下や膝裏といったくすぐったい部分ばかりを這い回っていた感触が、己の胸元にあてがわれたことを感じ、女としての本能から身をすくめた。

今まではいたずらではあつても、それが破廉恥さとしては薄いものであつたから耐えられていた。だが、いかに未成年とはいえ胸部に感触を感じては、千佳とて少女である。何よりも恥ずかしいことに違いはない。

ただ、千佳の恥ずかしさの上限などは、この先あつという間に更新され続けるのだが。感触は、正中線をなぞるかのようにな下に移動し、まさかという思いを千佳に抱かせた

が、幸いにも腰上で離れた。少女たる部分に長居されなかつたこと、さらに秘すべき部分には到達されなかつた事実に一瞬ホツとするが、次の瞬間には、脇の下に自分のとは違う二の腕の感触を感じて身のこわばりはもとに戻る。

かつて父親に抱きあげられるときに感じた安堵などはなく、怖気の走るそれはしかし抱き上げられる感触を伝えてこない。

このとき千佳に与えられてるのは、あくまで「触れられた感覚」だけであつた。自分の身体から衣服が剥ぎ取られ始めたなどとは全く思つていない。千佳に伝わっているのは自分の二の腕の先に向かつて移動する擦れるような感触だけだ。

その感覚が治まると僅かな間があり、事ここに至つて、千佳は訓練空間から離脱すればという考えに至るが、次の瞬間、腰上に来た今までとは違う細いものに触られた感触を与えられて頭が真っ白になる。その細い感触はうねるように千佳の肌を上へ上へと這い上がってくる。それは、男が千佳のシャツを脱がそうとする感覚。もし温感をも与えられていたなら、そこから千佳の実体に何が起こっているか察することができたかもしれない。

やがて胸元になにか置かれたような感触。それからややあつて首元と脇下に一瞬締められたような感が襲つたかと思えば、頭部全体と両腕を擦過するように何かを通り過ぎた。

ここでももし、千佳のトリオン体が本体に従って両腕を挙げさせられていたなら、日常の動作だと千佳は気づいたかもしれない。

しかし、やはり見えないということと、それを受動的に行われているという事実が、千佳から理解の機会を奪い去り、ただただ困惑を与えていた。

いままではイタズラの範疇で済んでいたものが、急に暴力的になったかのように千佳には感じられたのだ。

ボードーの戦いは基本的には一撃必殺だ。相手のトリオン体を機能停止に追いやるための戦いであり、そのために訓練している。また、千佳は狙撃手という立場上、継続的な攻撃にさらされる機会というものはないに等しい。千佳にとつて何もかもがわけのわからない状況は、年齢に不釣り合いな胆力を持つ少女からさえ冷静さを奪う。

さらには、次に行われることに関しては、今までと異なり容易に察するに足る行為である。

少しだけ、這い回る感覚が途切れた。今までよりも少々長いその間に千佳が訝しげになる頃、それはやってきた。

腰の両脇。そこに少し硬質な触感がしたかと思うと、その触感の移動に合わせて腰から下に向けて輪っかのような柔らかい何かが擦れていく感触。

(わたし、何をされてるの!?)

だが、視覚から見えるのはボーダーの戦闘服であり、常と変わらぬトリオン体。困惑が混乱に達し、しかしながら千佳はそこで今日の自分の「本来の服装」に思い至る。

そこで、千佳は気づいた。

（す、スカート！ 誰かが、私のスカートを脱がしてる!!?）

混乱を驚愕が埋め尽くす。しかし、与えられてる感触はよくよく思い返せば衣服を脱ぐときのそれとしか思えなくなっていた。足からスカートが抜ける感触の後、それは止まったが、もし、もしも、と千佳の想像が真実に爪をかけた。

（もしわたしの身体の近くに誰かがいたとしたら、私は今、きつと下着姿で……）

思い至った途端、顔から火が出るような羞恥心とおぞまじさが襲う。その「誰か」は明確に、千佳に対していやらしい行為をしている。動けない本体の千佳に。

（そ、そうだ。緊急脱出を……）

そのおぞまじさが、千佳の脳裏に天啓を与えたのか、千佳はようやくその手段に思い至った。ベイルアウト——トリオン体を放棄し拠点に帰投する緊急脱出装置に。

「べ、ベイルアウト！」

しかし、

「……え？ ……な、なんで?!」

常なら起こるはずのトリオン体崩壊の爆発はおろか、そこには何も起こらず何も変わ

らない戦闘服姿の千佳がいるだけ。混乱が極致に達する千佳だが、現実の身体を好き勝手している男がこのまま何もせずに終わるわけもなく、

「ひいん!」

千佳は、胸をなでられる感触に悲鳴を上げた。

「さて、いつまでも見てくれだけ堪能していても仕方ないな」

千佳の下着姿に感動すら覚えていた男が再起動する。向かう先は千佳の上半身。そこにある慎ましやかな双丘に、男は無遠慮に自分の両の手のひらを押し当てようとした。

その瞬間、

「……………るアウト……………」

微かに、千佳から声が発されて男の動きが止まる。

「まさか……………」

そういうえば、と、男の中の知識が呼び起こされた。玄界——ミデンと呼ばれる国で使用されるトリガーには、使用者の危機または任意に強制帰還される機能があるということに。

「いまのがそのキーワードだったりするのか……………」

訝しんで少し待つが、しかし何も起こらない。目の前の眠り姫はあの一言以降やはり眠り姫のままだ。

機能不全かと警戒を深めるが、この性欲以外は比較的聡明な、黒トリガーの元となった科学者に通じるところのある男は、ある可能性に考えが及んだ。

「トリオンの同調が進んだことで、トリガーが持ち主を認識できなくなっているのか？」
男の考えは当たっていた。ペイルアウト、この緊急脱出機能は、トリオン体を破棄して設定された拠点の座標へと本体を現出させる機能だが、同調が進みトリオン体及び本体が保護されたこの空間のトリオンの質が変化した結果、その変質の差異がトリガーにトリオン体と本体が「別のものである」という異常として誤認され、バグを起こしていた。

千佳の本体が言葉を発したのは、同調がトリオン体に及びそれが深まった結果だが、そこまでの同調を許して変質が進んでしまったことで、脱出の機会は失われてしまっていたのだ。

「やれやれ、据え膳を取り上げられるかと思つて焦つたじゃないか。とはいえ、ここで今更緊急手段を取ろうとしたことは、もしかして自分の状況に気づいたかな」

むしろ都合だと、男は思う。つまりこの娘は、今から何をされるのか察しつつも、状況は全くわからないのだ。ならば、ここからは少女の未だ知らぬ快樂を与えてさらに自

分好みに、無垢なままに開発ができるのではないかという歪んだ欲望が鎌首をもたげた。

そしてとうとう男の手のひらがささやかな双丘に触れる。

柔らかい中にやや芯のあるような、この年頃特有の感触を手のひらに感じ、やわやわと動かしてそれを堪能する。

「素晴らし〜」

ふにふに。むにむに。

慎ましいながらも己の手に応じて形をわずかに変える女の子の部分に、男の股間の熱が上があった。

手のひらにはブラに阻まれて僅かではあるが、小さな突起の感触もある。千佳の胸相応に小さなそれを、ブラ越しにこねると、

「……ひ、ひぁ……」

千佳の身体が再び声を発した。もう少し同調が進んだら、もしかするとトリオン体からこちらに意識の主体が移る可能性もあったし、男はそれを望んでもう一步を踏み込むことにした。

ホックなどもないスポーツタイプのブラをシャツ同様に捲り上げ、とうとう千佳の双丘は阻むものなく男の目に曝される。小さな丘の上に小さなさくらんぼが乗っている

ようなそこは、男を視覚的に満足させるに足る光景だった。

「ふあ……や、やあ……」

両の胸を無遠慮にこね回されて、千佳は拒絶の声を上げるが、その声は困惑と絶望のせいか酷く弱々しい。ペイルアウトが出来なければ、千佳に逃げる手段は残されていない。誰か戻ってきて異変に気づくなり、彼女の師のように訓練空間に入ってくるなりして貰えれば、という一縷の望みに賭けるしかなく、千佳は明らかに性的な部分をむき出しにした男のイタズラ——いまとなつては愛撫——を受け続けていた。

手付きは優しく、先程のような乱暴さは無いが、もはや千佳には下着姿に剥かれていやらしいことをされているという認識しかなく（实际的を射ているが）、拒否感と気持ち悪さ、未発達の胸を弄り回されるほんの少しの痛みとくすぐったさに耐え続ける。

どれだけそうしていたか。長いような短いようなその時間は、唐突に終わりを迎えた。ただし、さらなる絶望に千佳を突き落とす続きを持って。

千佳の胸の中心にその上の何かを鷲掴みにするような感触。間違はなく、この感触の主は千佳のブラを剥ぎ取る気だと直感的に理解した千佳は、届かぬと知りながら身をよじり振り切るように走り出す。しかし、どれだけトリオン体を動かそうとも、本体から

伝わる感触は離れてくれない。

千佳は千佳自身の認識の中では走りながら、ブラを剥ぎ取られる触感を味わうことになった。

「い、いやあああああ……!」

思わず叫んだ叫びもか細いものだった。母親にブラジャーを与えられてからは父親にも見せたことのないおっぱいが、顔も知らない誰かの手で暴かれ、しかもそれをきつと見られている。普通の痴漢のほうが何倍もマシであった。

暫くの間さえ、先刻ほどには千佳の心の波を風がせてはくれない。いまこの間は見られている間だ。品定めだろうか、それとも別のなにかなのだろうか。自分のような子供の、なんの面白みもないおっぱいを見て喜ぶような変態が、自分の動かぬ身体を好きにしている事実がより浮き彫りになって千佳の心まで苛む間だ。

少しして、おそらく指である何かと、手ではない何かがおっぱいの先端のさくらんぼの乳首に触れた。と思うやいなや、左の乳首を中心に細い何か乳首をこね回す。右の乳首もまた同じく、しかし種類の違う刺激が襲い始めた。

!??!?!?!?!
千佳の心はもはや自分でも何を考えているかわからないほどに混乱していた。右は分かる。多分指だ。二本の、おそらく人差し指と親指が右の乳首をこね、引張り、弾く。

「んあつ!! や、やめつ、ふあう!!」

ジンジンとした痛みが右の乳首を責め立てる。いや、痛みだけではない。こそばゆさとも何か違う、そんな感覚を思わず何なのか探ろうとするが、

「んにい!?!」

左の乳首に与えられた別の刺激がそれを妨げる。指よりも弱く弾かれ、更に入念にねちつこくこねられ、そしてときに引つ張るも、指とは違い乳首すべてが包まれるような……

(こ、これえ……お口だ……誰かが、わた、わたしのおっぱい……す、吸ってる!?!?)

「うあつ……やめつ……す、すわないでえ……出ないよお……おっぱ、おっぱいひい!!」

両の刺激が、ときに入れ替わり、ときに片方ばかり、かと思えば両方ともというように、千佳の未熟な乳首を責め立てる。激しいかと思えば優しく、優しいかと思えばねちつこく、ねちつこいかと思えば激しく。千佳はその執拗な責めに翻弄されるばかりで、もう考えも上手くまとまらない。

はじめの数分間は、主には間違はなく痛痒さだった。それを感じながらも翻弄されるうちに、その中に瞬間瞬間で背筋が震えるような、でも寒気とはまた違う何かの感覚に襲われるようになる。

（なんつ、なんなの、これえっ！ 修くん、ユーマくん、助けてえっ）

ぺろぺろっ、じゅるっ、ちゅう、くりくり、ピンッ

「んはあっ……ひいっ……うううう、んああ……ひやうっ!？」

責め方が変わるたびに千佳の声も変わっていく。

（おかしいつ、わたしの身体っ、どんどんわたしのものじゃないみたいになつてく！ 怖いよ、兄さんっ、お母さん、お父さん！）

その感覚は間違いではなかった。膨大なトリオンを持つ千佳だからなのか、同調の深度が深まるほどにより鋭敏な感覚が身体を支配していく。与えられる刺激も、当初とは比べ物にならないほど真に迫ったもの。舌の湿った感じや指にある爪の硬さと肌の柔らかさの違いさえ感じるほどに。

男による乳首攻めは、既に何分経ったかさえ千佳にはわからない。ただ、舐められるたびに、吸われるたびに、弾かれるたびに、不思議な感覚の頻度が段々と上がっていく。「んうううう……きやはっ!？ んやつ、いや、いやいやいや、気持ち、っ、悪い!？」
得体のしれなさが、まだ湧き上がる感覚の正体を千佳に知らせないまま、しかし千佳の反応の昂ぶりは止まらない。男の責めもまた。

くにくにくにくに、ちゅるるっ、ぴいんっ、れろれろ

「ふやあああああ……くう……んはあっ!？ ……あはあん♡……っ!？」

そしてついに、千佳の口から、一言だけだが、有り得べからざる声が零れた。

少女の口からは普段出たこともないような甘い声。そしてそれを出したのが自分だということが一瞬理解できず、千佳は固まった。

(な、なに今の声!?! わたし? わたしが出したの!?!)

初めて漏れた自分の「女」としての声はしかし、千佳にその自覚がないことで彼女の思考までも固めてしまった。それは、我慢を続けていた彼女にできてしまった、明確な隙だった。

「……………やあ……………う、んは……………あはあ♡……………んう?」

トリオン体の千佳のそれよりは弱い反応だったが、男は千佳の声にとうとう艶が混じったことを耳聴く拾った。

己の情熱的(あくまでも男にとっては)な胸への愛撫で、少女の性感が開発され始めた。

(もう、辛抱堪らんっ!)

男は胸から口を離すと、更に上へと狙いを定めた。向かう先は千佳の小さな、しかしふつくらとした瑞々しさを持つ唇であり、そこに男は躊躇なく自らのそれを重ね合わせ

る。

男にとっては幸せの、千佳にとっては絶望極まるファーストキス。

(うっほ、味なんてないはずなのに甘いような気がする。ちっちゃいのにすげえ柔らかい。おっぱいもそうだけど、この子俺の好みすぎるだろ)

押し当てるようなそれはすぐに啄むように千佳の胸とはまた異なる弾力を愉しむ動きに代わり、堪能し始める。

唇を僅か離しては舐めてみたり、吸い付いてみたりと、あらゆるキスを千佳で実験するような扱い。次第に男の唇が触れ合う程度が増していき、男の舌が千佳の唇を割り開いて口内に侵入し始める。

(ベロチューの前に、まずはお口チェックってな)

そのまま舌は千佳の歯や歯茎を舐る。口内への蹂躪は止まることなく続くのは勿論のこと、次第に男は千佳の小さな身体を抱きしめて己と密着させる。

千佳の右手を開かせて互いの手のひらを重ね合わせる。指をそのまま閉じ、左手は己の胸に当てるように。そして空いた手で千佳の身体をさらに己に押し当てれば、

(ほおら、まるで恋人同士だ)

と、男が内心で思うような体勢が出来上がっていた。千佳の小さな身体は男にすっぽりと包まれるように抱かれ、更には男の舌が千佳の歯の間に割り入って顎がほんの少し

開かれてしまう。

(では改めていただきませう)

そこから侵入した男の舌は、千佳の可憐なそれを容赦なく舐めとり始めた。

(うまつ、唾液うまつ)

変態以外の何者でもない喝采を心中で上げつつ、男の舌の動きは加速と減速を巧みに使い分け、千佳の感覚に緩急を与える。舌のみならず上下の歯の裏側も満遍なく撫ぞり上げ、上顎と軟口蓋との境の敏感な部分を舌先で突付くように弄る。

「んんお……じゆる……いふっ」

その度に千佳の身体が微かに悶えるように震える。唾液が交換され、意識はトリオン体にある千佳の身体が反射として咽る。

「ん、んにう……」

(!?)

その時だった。その咽る感覚を嫌ったのか、千佳の舌が、初めて千佳の方から男の方に絡んだ。

その感覚に男は驚き、同時に興奮する。

(そうかそうか、君もその気になってきたんだな！)

身勝手なことを思いつつ、昂ぶった気持ちのままに千佳の最後の下着——パンティの

上から、遂に男の指が彼女の聖域に触れた。

しかし、布越しに触れる陰唇の感触よりも先に彼に伝わったのは、
くちっ

(んっ? ……まさかこれって)

やや湿り気を帯びたクロツチの持つ水気だった。

雨取千佳の場合 その2

「んなあつ!? な、何これえ……」

千佳は口元に息遣いのようなものを感じたかと思うと、次の瞬間には唇に圧を掛けられた感触を得る。

とうとう息遣いという微妙な感触までも伝えるようになった同調の度合いながら、その寸前に自分が（自覚のない）喘ぎ声を出してしまった混乱がまだ治まっていないため、自分のファーストキスが今まさに奪われたことに即座に思い至ることが出来ない。

しかし、押し当てられた何かが唇を啄み出したことで、さしもの混乱中の千佳もそれがなんの感触であるかを理解した。

（ああ……わたし、ファーストキスを今奪われているんだ……）

男に体を弄られだしてからこつち、一番の絶望が千佳を襲う。千佳とて女の子、人並みに初キスへの憧れや理想は持ち合わせていた。それがまさか顔も分からぬ、自分に今変態的行為を働いている人間によるものとは、当然思いも望みもしていなかった。

「あつ……やだ……あ」

先程まで乳首にあった感触が唇を舐り、何者かがその形をなぞるように千佳を穢して

いることが分かる。

言葉を発せるにも関わらず唇へは常に感触が襲う違和感は、嫌悪感をいや増すものだ。

それなのに悪戯の手は止まらない。乳首にされたのと同じく啄まれ、舐られ、吸われるごとに、千佳を気持ち悪さが苛んで嘔吐感さえ覚えさせる。

「うえっ……なんっ、なんでっこんなもの……」

口が開いてないのに唇の間に何物かが挟まったような感覚の後、千佳の口内を見えない舌が舐め取りだした。

「おえう……んにあ……」

歯を、歯茎を、唇の裏を満遍なく蹂躪されて、千佳の嘔吐きがいよいよ本格的になり、実際は感触だけしかないのに言葉を発する気が失せていく。代わりに口から漏れ出すのは、まるで本当に強引に口内を舐められているかのような音になっていく。

それに加えて、右の掌が他人の掌に包まれるように、指の間に指が入り込む、少女漫画で抱き合う恋人たちが手を絡ませあつたときの感覚ってこんな感じかな、と場違いにも想起させる感触があった。それと共に、自身の背中に圧を与えられ、胸から何か堅く、それでいてどこか弾力あるものに押し付けられるような感触から間もなく、後ろの圧がさらに強くなる。

これは、抱きしめられていると千佳でも分かる感觸の動きだったが、その間も口内への蹂躪は変わらないにも関わらず、なにか大きなものに包まれるようなあつてはならない安心感のような錯覚を彼女に与えてしまう。

(あ、強い……けど、優し……い?)

油断だった。隙を攻められ、守勢にまわることも出来ない状況で、安堵を錯覚させられ、千佳の感觸がおかしくなっていた。

そして舌は、その油断を好機とでも言うように更なる進撃を開始する。

「んむあうっ!?!」

素っ頓狂な声上がる。固く閉じられていた歯と歯の間に、先程唇にそうされたと同じ感觸。噛み合わせているのに、顎が割り開かれ舌が舌に絡め取られる最悪の嫌悪感が、千佳の油断を一気に攻めたてんと暴れまわる。

(いやいやいやいやいやあ! ふあ……やめてえ……優しいのと激しいの順番にしないでえ……)

「んっふー……むううん! ふうん♡」

上に下に、左に右に、自分の舌がそうなるように千佳の心も翻弄される。先程までは気持ち悪いばかりだった与えられ続ける感觸が、乳首にされた時同様に不思議なあの感覺を与え始めているような気にさえなってくる。

のみならず、舌が千佳の上口蓋をなぞる感覚に、久々のくすぐったさが与えられて、口を閉じながらも漏れ出てしまった息には先刻ほどと同様の艶があった。

(ま、またあ……わたしの、変な音お……)

あの自分が出したとは思えない音が、先程と同じような感覚とともに漏れ出てしまったことで、千佳の中で感触と自分の異常とがリンクされる。あの感覚が来てしまうから、変な音を出してしまおう自分がある、という事実が、自覚となつて押し寄せる。

そんな千佳を狙い澄ますように、何者かの舌は千佳の敏感な上口蓋と軟口蓋の間を突付くように動く。同時に、喉の奥へと液体が流れ込むような感覚に、

「んんお……じゅるっ……いっふっ」

飲み込みと共に咽る音が出た。それは、現実の身体が出した音と全く同じであることに、しかし千佳が気づくはずもない。

「ん、んにう……れるっ」

それどころか、無意識に見えない舌を探るように千佳の舌が動いていた。己の頬の裏を擦るだけで終わってしまう程度の動きだったが、勿論その頃生身の千佳は、反射的に男の舌に自分のものを絡めている。

そして、千佳に、そのトリオン体に、とうとうあり得てはならない異変が起きた。とろっ

その音は、音としてのものではなく、千佳の感覚の一つを擬音化したものだが、千佳の脳裏にはやけに明瞭に響いた気がした。

感覚の元は、両の脚の付け根。千佳は未だ己では排泄にしか使ったことのないそこから、何かが漏れたことを明確に感じ取っていた。

!!?!? わ、わたつ、しつ……おもら……)

経験と知識の浅さが、それをかつて幼少の頃に経験したそれと結びつけるが、下着が貼り付いてくるような感覚が同時に違和感を告げる。

そもそも、トリオン体にそんな機能はないことくらい千佳でも知っている。だとしたらこれは、間違いない自分の生身に起こっていることだということくらい分かる。

あの変な、芯から上がってくるような不思議な感覚のとき、自分から変な声が出ること。変な声とともに、自分のおまたに既知に近い、けれども未知の感覚があったこと。これらの事実が、しかし事実であるが故に知識としてそれを得ていない千佳にはどういうことか分からない。

——自分の性感という蕾が花開き始めたことに、気がつけない。

それが、致命的だった。右手が感触から解かれる。

(え? どうして?)

千佳の戸惑いを置き去りにして、口内への進撃は続いたまま、男の手が下へと動くの

が、密着している状態であるが故に感覚のみでも千佳に伝わった。

(まさかまさかまさか! ……だめ、いまそこ触っちゃだめええええ!)

内心で上げた拒絶の悲鳴は、勿論男には届くわけもない。届いたとして、男が止まるわけもない。

そして男の指がほどなくそこに触れた。布越したが、確かに、そこに触られた。千佳の未開の聖域——おまんこに。

「駄目っ……」

その瞬間、千佳の意識が消えた。

くちっ

男が少女の陰唇にパンティ越しに触れた瞬間、それが布越しだったが故に明確に、男に少女の今の状況を伝えた。同時に、男はあり得ないほどの刹那でそれを認識する。

(ん? まさかこれって……)

認識から男が思考する間を置くでもなかった。認識を確認すべく、男が唇を離すか離さないかの刹那の次の瞬間——

「駄目っ……………」

「は?」

「……………え?」

少女の目が開き、超至近距離で男の目とばっちり合った。

思わず呆けた声が出て、顔と顔が離れる。それから少し遅れて、千佳の方からも呆けた声が出た。

「……………」

「……………ふむ」

突然の驚きから復帰するのは、当然というべきか男の方が早かった。同調するほどに目覚ましくなっていく少女の反応から、いずれこういう自体になるかもしれないと、予想というか期待していた男と、予期さえしていなかった千佳との差は大きく、男は何事もなかったかのように千佳に再び口づけて、更にはその左手で千佳の陰唇をパンティ上から捏ね始めた。

「!!…なんでなんでなんだなんでなんでなんでなんで?!!…なんでなんで?!!」

「なんでなんでえ!」

千佳の驚愕はあまりにも大きく、思考にさえ疑問のこえしか上がることがない。

先程までと同じ、しかし鮮やかさは比べるべくもない感覚が、千佳の口内と股間に炸

裂する。

どちらも誰にも触られたところのない、下に至っては自分でさえもそんな触り方をしたことがない所であり、与えられる未知の、しかしここまで何度でも与えられた感覚が、先刻までの数倍以上の明確さを持って千佳を埋め尽くしていく。

混乱し続ける千佳には、その与えられ湧き上がる感覚の名前が「快樂」という名を持つことなど気付けもしない。

それに伴って秘所から湧き出る液体の名が「愛液」と呼ばれる分泌液であることも、それが女性の快感に伴って分泌されることも知る訳がない。

れろっ、ふにふに、ちゅぽっ、むにむに、れるれる

「んえう……にやあ!?んふう……んやあ、れるれる」

男の股間への愛撫と口内への蹂躪。その二つは相乗するように、千佳からあの感覚——快樂を引き出し始める。

徐々にパンティの湿り気が増し、仄温かくなっていく。それをおもらしと誤解している千佳は羞恥やら混乱やらでもう何がなんだか分からない。

こうして体意識が戻ったにも関わらず変わらないどころか、感覚的には数倍になった男の行動は、少女の開花をさらに促し続ける。

「や、やええええ……」

「ぶはっ、やめるわけ無いでしょ。んむっ」

「そんっ、むあああ……れる……」

千佳の微かばかりの抗議に一瞬だけ唇を離して短く拒否した男は、再び己のそれで彼女の可憐な唇を塞ぐ。

その一瞬だけ途切れた快楽が再開され、千佳の性感は本人の知らぬうちに昂ぶっている。その証拠となるおまんこからの愛液も、同様に増える。

口内のみならず、男の左手もまた器用に動き、陰唇を捏ねたり摘んだり、布越しに開いてみたり、時折更に敏感なとある部分に触れそうで触れない位置を軽めに擦ってみたりする。

こねこね、むにむに、くばあ、すりすり

「うえあ……ちゅばあ、ふむうう!? ふはあん♡」

かと思えば、おまんこから手を離して乳首いじめを再開したりする。

ふにっ、くりくりっ、ぴんっ

「れらあ……んんう♡ んふうん♡」

(いやっ♡ やめっ、おか、おかしくなるう♡ 身体が、あうん……違うう、わたし、

わたしがあ♡ おかしくされてるう……)

千佳の身体は先程からびくびくつと弱い痙攣を起こしていた。それは男の責めに

応じた動きであり、そのたびに千佳には「あの謎の感じ」が襲う。

口の端からはよだれを垂れ流し、股ぐらからの愛液がパンティを染め上げる。

決して長い時間というわけでもないが、短くもない時間に多くの責めに遭い、千佳の身体が男のそれを覚えてしまっている。意識が身体に戻ったことで、トリオン体の時よりもさらに強くそれらを感じてしまった千佳は、とうとう男の開発に屈し始めていた。

それを感じたのか、男が責めを止め、千佳から身体を離す。

「んえあ……？ お、おわりでしゅか？」

長きに渡るペロチュー責めによりもはや呂律も怪しい千佳の身体は上気しており、白い肌に浮かび上がった桃色が扇情的ですらある。蕩けた眼差しは男から離れず、その視線を受けた男は、しかし少女の希望に応えるつもりはない。

「どうしよっかなあ」

「もう、や、やめへ、くだしやい……お願いしましゅ」

「そうだなあ。じゃあ、何個か質問に答えてよ。そしたら考えてあげる」

にこやかに笑みを浮かべる男を見て、千佳は助かる可能性にわずかな喜びを得る。よくみれば優しい風貌なのではないかとさえ男を見て思うほどに。

「じゃあひとつめ、君の名前は？」

「ち、ちか……あまどり、ちか……れす」

簡単な質問だった。意図さえわからないほどに。

「ふたつめ、何歳？」

「じゆう、よんさい」

「またも簡単な質問だった。これでいいのかと思うほどに。」

「みつめ、好きな人はいる？ あ、もしくは親しい異性はいる？」

「しゆきつ!? い、いましえん……よくしてくれる人たちなら、いっぱい」

「……ふうん。その人たちにはいつか恩返ししたい？」

「もちろん、です。いっぱい助けられてばかりで……」

「また簡単な質問。答えなど向こうも分かっているんじゃないかと思うほどの。」

「よつつめ。いつつめか？ まあいいや。チカちゃん、身体動く？」

「えっ? ……あれ、う、うごきません……」

そして、次の質問で初めて、千佳は己の身に男以外の脅威が起こっていることを知った。

「むつつめ。チュツ。……今したことは何？」

「んむっ!? ……き、キス……です」

しかしその危機感は、男の次の行動と質問で流されてしまった。

そこから、男は一言で答えられるような質問ばかりを矢継ぎ早に浴びせてきた。

動かない身体への意識さえ飛ぶほどに、千佳に思考の隙を与えず繰り返されるそれに答えていく。

「えー、じゃあここはなーんだ？」

くにくにつ

「あうんっ♡ ……お、おっぱい、です」

「えー？ ここだよ、ここ」

ぴいんっ

「ひいんっ♡ ち、ちくびですう」

「よしよし、じゃあここは？」

くちゅ

「いやっ、そこ触っちゃ！」

「ソコサワツチャ？ 本当にそれでいいのお？」

くぱあ

「ふひやつ、お、おまたあ♡ おまたですう」

「うーん、まあ正解でいいや。でもね、ここは『おまんこ』って言ってほしいなあ」

「お、おまん、こ？」

「はいよく言えましたー」

くちゆくちゆくちゆう

「ふあああああ!?♡」

そして、次第に質問というか、問題の体を成した責めに変わっていた。

「や、やめてえ」

「うーん、わかつたよ。チカちゃん、やめたげるね」

耐えかねて、再度の抗議を無駄と知りつつ試みた千佳から、しかし男はそこであっさり離れた。

（えっ、本当にやめてくれるの?）

どころか、千佳の脱がされた衣類を男は拾い集め始める。まるでこれから動かぬ千佳に着せようとするかのように。

（あ、あ、あ……良かった、やめて、くれるんだ……）

安堵が千佳を包む。男が最後の衣類、ブラを拾い上げ、こちらに戻ってくる。

「これで全部だね。ごめんね、チカちゃんがあんまりにも可愛かったからさ」

「か、かわいい?」

「そ、だから夢中になっちゃって、ブラなんか思ったより遠くまで投げちゃってた」

「べ、別にそれは、大丈夫、ですよ?」

「ほんと? チカちゃん優しいね、許してくれる?」

「は、はい」

「ちなみにまだ身体は動けないの？」

「そう、みたいです……」

「……そう。そんな状況なのにこんな自分を許すだなんて、本当に優しいんだね」

自分を可愛いと言い、困ったように笑う男に、千佳は生来の優しさで許しを与えようと思った。ファーストキスも奪われ、体を散々にいじくり回されたが、今となっては許して解放されたかったという気持ちもある。

だが、そんな優しい千佳だから、

「じゃ、約束通り。今までの練習はやめて本番をしてあげるね」

次につけられた男の言葉が、本気で分からなかった。

「へ？」

ドサドサドサッ

男の手から集められた千佳の衣類が全て落ちる。自分の傍らに散らばったそれらに意識が奪われた隙を突いて、男が千佳の濡れたパンティをすばやく剥ぎ取った。

今度こそ、一糸纏わぬ姿となった千佳のシミ一つない幼い裸体が、男の前に余すところなく晒される。

「え、なんでっ……いい、いやああああああ！」

小さいながらもちゃんと膨らみのあるおっぱいも、その頂点にある勃ち上がった桜色の乳首も、なだらかなお腹も、成長期でわずかにくびれを生じ始めたウエストも、発毛の兆しもないつるつるのおまんこも、すべてを男につぶさに観察され、解放されると思っていた安堵から突き落とされた絶望に、千佳の口から悲鳴が上がる。

「やめるってえ！ やめるって言ったのに！ 嘘つき嘘つきい！」

「嘘なんかついてないよ心外な。約束通りやめてあげたでしょ『練習』は。ほら、あんよ開こうねー」

動かない千佳の足首を両手でそれぞれ掴むと、男はそれを大きく開かせた。

当然、股の間にある千佳の女の子が男の眼前に広げられる。

「~~~~~!!!」

「うっわ。感動だ……これがチカちゃんのパイパンまんこ……」

悲鳴はもはや声にもならず、身を裂くほどの羞恥が千歌を支配する。

愛液に濡れてテラテラとしながらもぴったりと閉じた千佳のおまんこは、悶たくとも動かない千佳の身体の代わりを果たすかのように、ひくひくと微かに動く。男の鼻息が荒くなって、そのおまんこに吹きかかった。

「んひひひ!?」

「あ、ごめんごめん。つい息が。あ、ちなみに動けないのなんで分かる?」

今まで晒したこともないところに息を吹きかけられて、思わず「あの変な声」が今まで一番大きく出てしまった。そこに意識を向かせまいとでも言うように、絶妙に差し挟まれる男の言葉に、千佳の意識はまんまと捕らわれる。

「……………え、なんで……………」

「まあ詳しい説明は省くんだけどき。いまチカちゃんの状況って、『トリオン体が起きていっているのに意識だけがトリガー内の生身の身体に戻ってしまった状態』なわけ。きつと同調が進んだせいで意識総体が本来あるべき生身の方に移っちゃって、だけど同調しているトリオン体は破壊されずに残ってるわけ。普通なら意識が戻ったことで、トリオン体は制御を失って自壊するなり格納されるなりするんだらうけど、トリオンが同調したままだからそれが起こらず、結果としてトリオン体に行動総体が残されたままになってるんだね。要するに、いまチカちゃんの身体を動かすためのプログラムはあるけど、ハードがちぐはぐで誤作動起こしてるような状態って理解してもらえる?」

男は本当に、煩惱さえ排せれば優秀な人間だった。なにせ、これを説明することだって策のうちなのだから。

「?????」

勿論千佳は、そんな「動けない理由」をわざわざ説明する意味がわからないため、戸惑う。それこそが、男の誘導だった。

「つまりい……こんなことされても、感覚だけで動けないって分かってほしいんだよね。はむっ」

「んきやあああああ!?」

戸惑う千佳のおまんこめがけて、男の頭が迫ったかと思うと、なんの躊躇いもなく千佳のつるつるのそれを男の口が塞いだのである。

んちゅんちゅんちゅ、れろんっ

「んひゅうううう!?」 んにやあん♡」

とんでもない程の衝撃だった。いろんな意味で。

「いやいやいやいやっ！ そんなっ、とこおっ！ きたない、のにいー♡」

千佳の持つ知識では、そこは排泄のための器官だ。おしっこが出るところだ。というより、認識の上では既にお漏らしをしていると思っっている。そんなところに口をつつけられ、あまつさえ舐められ、吸われている。ありえないことを躊躇いもせずに行つた男に驚愕するやら軽蔑するやら、千佳の頭の中はめまぐるしく入れ替わる感情で大荒れだ。

男は暫くその口で千佳のおまんこを堪能すると、ちゅぽつとわざと音を立てて離れた。その刺激で千佳の身体がまたも震える。

「やあん♡」

「ふう、いい声出るようになってきたね。おまんこも段々出来上がってきた。でもね、ま

だまだ行くよ」

「ひあ、まだ、するん、です、かあ……」

息も絶え絶えになりつつある千佳には死刑宣告にも等しい言葉をかけ、男はクンニによつて開いた千佳の大陰唇に手を伸ばす。くぱと軽く開いて、千佳の薄い小陰唇の襞の上側に指を這わせた。

瞬間、

「ふわあああん！♡」

千佳の背中が軽く反る程の快感が駆け巡った。

男が触った場所。それは先程までのクンニでも、その前の前戯においても決して触らなかつた、しかし知らず知らずのうちに徐々に包皮が剥かれつつあつた小さな、しかしおまんこで最も性的快感を得やすい器官——クリトリスだつた。

「さ、クリ責めいくよお」

「や、やめ……」

今までよりも、心情としては最も強い懇願はしかし、強烈な快感に晒されたばかりの力無い声でしかなく、もとより止まるつもりのない男を止められる力は当然無かつた。

さわっ

男が千佳の芽を撫でるように微かに触る。

先程の接触よりは優しいものだったが、千佳に走る快感は気持ちよさと認識できないほどに激しいものだった。

「んひひひひひ！」

嬌声というよりは悲鳴のような叫び。男が更に弄る手を進めれば、千佳の肉芽は完全に露出させられ、それだけで千佳の背筋にいままでの何倍も強い「あの感覚」が伝う。

「お、チカちゃんのごこすごい敏感なんだねえ。これは中々素質を感じるぞお！」

「やめてえ！ もうそれいじるのやめてえ！ おかしくなるの！ わたしがおかしくありませんからあ……！」

「何言ってるの。おかしくするためやってんだから、素直におかしくなっていいたいんだよ、っと」

「んっふうううう♡」

男の指が、先程までのローテーションにクリトリスへの愛撫を加えて動き出す。

その動きが、今までは付いては消えるばかりだかりだった千佳の性感に火を入れ、感覚の波がやがて大きくなっていく。

「ほらほら、どんどん気持ちよくしてあげるねー」

「気持ち良くないですよああああ……はあ♡ や、こすらっ、ないっ、でえ♡」

「じゃあ摘んであげようねー」

「んぎっ!？」

敏感の最たる場所を摘み上げられる衝撃。波が頂点で砕けて、しかし絶頂には至らず引いていく。

「おっと、逃さないよ」

くちくちっ、れろんっ

「ひゃあああん♡ にゃあっ」

しかし引ききる前に男の愛撫が再開され、忘れそうになっていた乳首への責めと共に押し迫る波が千佳の快樂の海を荒らげる。

「しっかし、本当にチカちゃんは俺好みだね。このふとももなんか最高だと思うよ」

「ひあ? んふう……やああ♡」

陰唇を捏ねたり、割り開いたりしていた男の両手の指が、そこから足の付け根へなぞるように移動し、千佳の幼い体の中でも官能的な肉感を持つふとももを撫でる。

そのくすぐったさすら、今の千佳には殆ど性的な快感に近く感じられ、同時に、自分のふとももでさえ男にはそういった対象になることが内心までもくすぐる。

(どうしてこのひと、私みたいな子に……まで……)

疑問の内容こそ、当初から変わらないが、確実に意味合いが変わっていた。その「私みたいな」の持つ意味が「何故私みたいな子供なんか」から、「何故私程度の女の子な

んかに」へと。男がやっているこの行為が、千佳への執着心だということに、隴氣ながら気づいてしまっていた。

男の責めは続く。唇を、おっぱいを、乳首を、おまんこを、ときにふとももやおしりの柔らかさまでを堪能され、その度に千佳の性感が引き上げられていく。

吐く息は荒く、甘いものへ。溢れ出る愛液の量はますます増えて、千佳のおまんこをてらつかせる程にしとどに濡らす。

くちゆくちゆとなっていた音に濁音が混ざり始め、千佳の白い肌がすっかりピンク色に上気しきった頃である。

「やあ♡ も、もうらめ……ふあ……？」

とうとう千佳に軽い絶頂が訪れそうになる刹那、男が千佳の身体から離れた。どこにも触れられない時間などそれまで無かったにも関わらず、服を拾い集めた以来の快感の途切れが、千佳には最早困惑を齎す。

(ふえ？ ……どうして、やめ……!? ……いまわたし、何を……)

そればかりか、こう思ってしまった。「やめてほしくない」と。

気持ち悪さなど、もう過去のものだった。男の手が、唇が、舌が、千佳の身体に触れること、千佳の奥から何かを引き出すこと、それらのことを自分が受け入れ始めていたことへの自覚が千佳を打ちのめし、同じくしてその事実そのものへゾクゾクとした期待

と不安を等しく得てしまう。

即ち、「このままされたらどうなるんだろう」という期待と、「ここでやめられたらどうなるんだろう」という不安に。

背を向けあつてるように思うそれらは、結局のところ、千佳が快楽を貪り始めた証左でしかない。

忌避感というものは、得てして禁忌と思うことから現れ、禁忌とは好奇心を刺激する。刺激されたのが好奇心だけなら、千佳はある種冷静に自分に立ち返れただろうが、未知の感覚として性的快感を与え続けられ、その間ずっと、ちんちくりんだと自分で思っていた身体のことについて——異常性愛的ではあったが——肯定的な言葉を浴びせられて、千佳の好奇心は性的なものでありながら肯定的な観点で発露してしまった。

「もつと、って顔してるね」

「!!」

もしこの男の言葉がもう少し早かったなら、もしくはもう少し遅かったなら、千佳は認識不足、または自己否定により男の言葉を跳ね除けられただろう。

しかし、「やめてほしくない」とほんの僅か、思ってしまった。その事実が千佳に否定を許さない。否定に到れるだけの余裕もない。

むしろその一言を内の部分で肯定する材料しかない今のタイミングで寄越されたそ

の言葉により、千佳は自覚してしまった。即ち——今まで受けていた男からの責めが「気持ちよかった」のだと。

それは千佳の知る爽快感あるものや、達成感や満足感からくる気持ちよさではない。羞恥と、嫌悪と、痛痒と、不安と、懷疑と、困惑とで満たされた不快さの中に、否応なしに期待を昂ぶらせる不明極まる気持ちよさ。それを情欲という言葉が一言で表すことまでは解らずとも、千佳は紛れもなくここまでで発情していたことを、言葉でなく本能で悟ってしまったのである。

はしたなさに顔が茹でだこのようになる熱を千佳は感じるが、実際のぼせたような脳はそれさえも下腹部にきゅんとした快感を送る燃料にしてしまう。

男は千佳の愛液にまみれた指を、半開きになった口に突っ込む。千佳は自身で分泌した、味わったことのない味覚と共に口内をくすぐられ、またも男の指で翻弄されていく自分に火照りが増す。

その口内責めはしかし長く続くことなく、男が引き抜いた指と千佳の力ない舌先で唾液の糸が引かれた。

「はむっ」

「ええ!!」

その糸が消えるか消えないかの内に、男が自分の指を啜え、千佳の唾液を味わう。今

までとは方向性の違う視覚的に明確な変態行為に千佳が驚く。

「はい隙あり」

「ひゃああああっ!?!」

くちっ、つぶつぶ……

その驚きが仇となった。男は手早く自分の指を引き抜き、人差し指を一本千佳の膣口にあてがったかと思うやいなや、そこからはゆっくりと千佳の膣内へと進め始める。

「うっわ、きつつ。結構ほぐしたと思ったのに」

ちゅぶっ、うにうに、くるくるっ

「ひいっ! ふわあああ……ひやうんっ♡」

入り込んだ男の指が膣壁をまさぐるように動き、果ては回転しながら少しずつ奥へ奥へと入り込もうとする。そうやってこすられる度に、千佳の口から嬌声上がる。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

小刻みに膣内をノックするような指遣いが、まだ固い千佳のおまんこを少女から女へと作り変えるかのように蠢く。

「やっ、指っ♡ 抜いへ♡」

「拒否しまーす」

ちゅぶちゅぶちゅぶっ

「ひああああああ♡」

千佳の懇願を一笑に伏して、男はさらに指の動きを早める。おまんこをいじりながらも、他への責めだつて忘れない。不意に乳首を甘噛みして甲高い嬌声を上げさせて声色の変化を楽しみ、指の動きを激しくしながら親指を使つてクリトリスを刺激して更なる快感を千佳に与えていく。

男の樂器もかくやという状態の千佳。その未成熟なおまんこは、今朝家を出た頃からは考えも及ばないほどに雌の淫臭を漂わせるものになり、愛液の分泌などあり得もしなかつたのに、今や男の動きに合わせて汗気をいや増す卑猥な器官になりつつあつた。

「やらああああ♡ こんなつ、のっ♡ おかひいのにい♡」

自分の体の奥から、どんどん自分の知らない感覚が湧き出てくる。ここに至れば、少なくとも千佳にさえ、この感覚の具体的な名詞を導き出せた。

「気持ちいい」のだ。

ありえないほどの嫌悪感も、与えられる卑猥さも、それによつて昂ぶつて蕩けていく自分自身も、総じて表す言葉は「気持ちいい」に他ならない。

訓練の成果が出せたときや、たまたま前日にやっていた勉強の内容がテストに出てきたときや、大人に褒められたときになどに生じる充足感と共に生じるそれとはまったく異なる、只々ひたすらに淫靡なこの背徳感を伴う感触が、千佳の脳裏を「気持ちいい」で

埋め尽くしていく。

やめないでほしい。この気持ちよさを。

やめてほしい。千佳を千佳でなくしていくこの気持ち悪さを。

——どうせなら、完全にいままでのわたしでなくなれば、もつともつと深いところに行けてしまうはずなのに。

そう千佳が思考した瞬間。

男の指の動きが止まった。

雨取千佳の場合 その3

ちゅぽっ

「んんっ♡」

男の指が千佳のおまんこから抜かれる。それと共に、もう千佳の錯覚通りに小水と言われても通用しそうなほどに濡れそぼったそこから、更なる愛液が溢れた。

「はあ……はあ……♡」

蕩けた表情を取り繕うこともできずに荒い呼吸を繰り返す彼女を見下ろしながら、男は自らの服にも手を掛ける。

惚けたままに男が己が上体の服を取り払う姿を眺める千佳。師であるレイジほどではないが、幼馴染の修よりはがっしりとしているなあと男の半裸を見て思うほど、自分が何を考えているのかさえ定まっていない千佳だったが、次の行動に惚けも呼吸も止まる。

男がズボンを下着ごと一気に下ろすと、千佳の目の前に男の屹立したペニス曝け出された。

「?!?!」

「!!!!?!?!」

限界まで目を見開いて驚きを顔にする。それと同時に、千佳の手が僅かに強張りを示した。

(えっ?! えっ?! ええっ?! ああああれっってお、おち、おちんちっ?!)

しかし驚きが先に立つ千佳にそちらに気を回す余裕はない。

千佳の知識にあるのは、保健体育で数度習ったものとかつてお風呂に入ったときの父親のそれ。しかしまろび出てきたそれは形も大きさも知識の埒外にあるものだった。

とはいっても、千佳にそう見えているというだけで、男の一物は、日本の平均から見てもそこまで巨根というわけではない。

「そこまでジロジロ見られると流石に恥ずかしいかな」

「つつっ?! ぐ、ぐめんなさいっ!」

全く恥ずかしそうでない声音の男の非難に、思わず謝ってしまう千佳。常であれば好ましい彼女の素直さだが、男にとっても好ましいそれが、更に男を興奮させてしまうことにはまるで気づいていない。

というより、千佳の考えうる限り最大級の「見てはいけないもの」を目の当たりにしてしまった衝撃が強すぎてそれどころではない。しかもぼつちり見つめてしまった。男にジロジロと挿げられるほどには。

男もペニスを曝け出し、千佳はすでにその男にヴァギナの中まで触れられている。屹

立する肉の棒と蜜に濡れる肉の穴という違いは、むしろより強く、この場にいるのが二人の男女なのだと言識させる。

(おとこの……人……わたし、女の……人?)

男と女がいる。そして二人共が服を脱ぎ去つて(千佳は脱がされたのだが)生まれたままの姿を晒している。お互いの最も性的な部分をお互いに見合わせるような状況が何を意味するのか。性的な部分には疎い千佳であつても流石に気づく。

(えっ……ち。わた、わたしと、せ、セックスしようとしてるんだ……)

認識とともに襲い来るはずであつた忌避感は、なかつた。いや、無いわけではない。目の前の男に散々弄くり回され、わけもわからない快感に翻弄され続けた結果として、心に思うだけではその行為が今までの行為の凄まじさの影に隠れてしまつていただけだ。

だが、それだけでなく、千佳は自覚してしまつたのだ。更に深く、その意味する所。即ち――

――自分は生まれて初めて、雌として雄に求められているということに。

知らず、強張つていた二の腕から力が「抜ける」ことに、千佳はその時初めて気づいた。

一方で、男の方も当初の思惑とは異なる感情を千佳に抱き始めていた。

このトリガー内の隔離空間に紛れ込み、そこにわりかし好みの据え膳があったから頂こうとしただけ。そんな気持ちで始めた性的な悪戯は、しかし、千佳のあまりに敏感な反応と、それに耐え続ける健気さと、そこまでされても自分の中の女に気づけない（または気づこうとしない）無垢さと、そのくせ幼い中にしっかりと持っている淫靡さにエスカレートしていった。

行為が進むごとに自分の手で千佳を悶えさせることが快感になっていく。まるで新雪に初めの一步を残すときのような愉悅がいつまでも止まない。この少女が自分の手によって徐々に女として花開いていくその過程が堪らない。

千佳の純粹さは絶妙だ。性的な知識を持っていないわけではないだろうに、そこに結びつける感得が欠如している。それは男の預かり知らぬところではあるが、千佳が長いこと近界民から逃げ続け、自分の体質から親友と兄を失わせた自責の念の基で身につけた自縛に近い純粹さ。自分は価値がない、あつてはならないと思ひ込みたいが故の逃避に至る為の純粹さ。

男は善人ではない。千佳に悪戯を始め、その敏感さ、健気さ、無垢さ、淫靡さを感じた時点では、千佳を一個人としてなど見ていない。都合よく用意された自分のためのオナホを手に入れたとでもいう喜びでしかなかった。

しかし、余りにも耐え続け、やめると言いながらも快感には震える目の前の少女を見

ているうちに、ふつふつと彼女に興味が湧いた。

先程無益なまでの単純な質問を繰り返したのだから、あの時点では男にだって意味不明な行為だった。

しかし質問を繰り返すうちに、千佳への興味を自覚する。

(この子、自分自身を余りにも蚊帳の外に置きすぎだろう)

男は思う。この無頓着さはダメだと。全く理解できない。この少女は、自分の価値を全く認めていない。だから自分に対して他人事のように、与えられる刺激に対して反応しながらも正体を探れもしない。例えばこのまま無理矢理に処女を奪おうものなら、そこに現れるのは悲嘆に泣く散華でもなければ、淫蕩に狂う妖花でもない。ただただ身に起こった不運から与えられる快感に溶けるだけの抜け殻か、自分が墮したことに震えるだけの傀儡が出来上がるだろう。

この娘に、分からせなければならぬ。男に天啓のような使命感にも似た気持ちも湧き上がる。

自分が、少なくとも男にとっては価値のある存在であることを。庇護欲すら掻き立てられる容姿もそうだし、健気な少女という属性だってそうだ。それらが淫らに蕩けるギヤップなんて言うまでもない。

だからこそ、この子に快楽を認めさせなければならぬ。女が男に与えられる快楽

を、女が男に与える快楽を。それらが、雨取 千佳というメスにも生来備わっている機能であり価値なのだという当たり前のことを、当たり前以上に認めさせたい。

つまるところ男は思ったのだ。

——このチカという少女を己のモノにしたい、と。

それは確かに性欲に基づいた歪んだ思いだったが、男にとつて女とは広く性欲の対象であり、一人の女にこんな思いを抱くのは初めてのことだった。いわば、初恋の芽生えにも似た衝動が男を襲う。我ながら気持ち悪いなど、男の顔に自嘲が浮かぶ。

ともあれ方針は定まった。彼女に快楽を認めさせた上で、彼女を得る。雨取千佳というメスが自分のモノだと証を立てる。そのためにはまず自分が服を着ていることが邪魔だ。

二人共裸になってしまえば、さしもの彼女として性差を意識せざるを得まい。もしも意識せずとも、このまま触覚的に刺激を与え続けたところで、少女は己を自覚しないだろう。

なので、男は自分も服を脱ぎ捨てて、千佳と同じく全裸となる。ボトムを脱ぎ去れば、そこには見慣れた己のムスコ。それが千佳という極上のおかずのおかげで、いつもよりややや元気になっている。

!!!!?!!」

男にとっては予想通り、千佳はそれが飛び出した瞬間に目を白黒させて驚きを顕にするが、予想以上にマジマジと見つめられた。

その様子を意外に思いつつも、性欲への自覚が出た兆候として受け取り、それを煽つてみる。

男は恥ずかしさなど特に感じていないが、千佳の朱が赤みを増したことに気を良くして、早速次の段階へと進むことにした。

「ちなみに、本当はもう、少しだけなら動けるんでしょ？」

「ー」

千佳の眉が上がり、驚きの表情がより強くなる。千佳と男、気づいたのは殆ど同時だったが、確かに今まで意識しても任意には力を入れられなかった身体の各所が、少しずつ意思に沿う動きになり始めている。

「それなのに拒絶しないでされるがままになってたんだね。チカちゃんって見かけによらずえつちなんだ？」

「ち、ちがつ……！」

あまりの言い方に千佳の口から否定が咄嗟に出る。そんなわけない、動けるようになりつつあることに気づいたのは自分も今しがたなのだと。

しかし、動くつもりがあれば動けた、という認識が千佳の二の句を奪う。それはつま

り、動かなかつたのと何が違うのだろうか。本当に心の底から忌避していれば、まずは何が何でも動いてみせたのではないかと。

だから飲み込んでしまった。否定できるチャンスを、この先を止められる最後のチャンス。

「そんなえつちなチカちゃんになら、もっとスゴイことしていいよね」

「えっ? ……やあああああ!♡」

男が千佳の身体を跨ぎ、膝裏に腕を差し込んで両足をM字に開いた。男の両足は膝立ちで千佳の顔を跨いでおり、男のモノが千佳の眼前で確かな硬度を保ったまま揺れる。いわゆるシックスナインの体勢になり、見られていることも見ていることも恥ずかしいその格好に千佳の目が激しく泳ぎだす。しかし、泳がせたところで目にうつるのは男のモノか両の脚であり、かといって目をつぶってみると、顔のほど近くで淫臭を漂わせている逸物の存在感が、臭いや熱でより強く感じられてしまった。

「さて、じゃあ激しくするね」

「えっ? ……んみゆううううううう!♡」

男がクリトリスに吸い付き、続けておまんこへのクンニを再開する。

動けることを自覚したと言っても、それは意識的に力を入れたり抜いたり出来るようになった程度な千佳に、男を押しつけることなどできるはずもない。万全の状態でもで

きたかどうかは怪しいが。

「あつ♡あつ♡あつ♡あぁあぁ!♡」

「ちゅぱつ……はいはい、お休みはまだですよー」

にちゅう、くりくりくりつ

「んはあぁあぁ……ひつ、くうううん!♡」

程なくして唇は離れたが、続けて人差し指が膣内に再侵入を果たし、更には親指でクリトリスにさらなる刺激が与えられる。

千佳のぷつくりとした大陰唇がひくひくと震え、快感を覚えていることを自他に伝える。小さなクリトリスは充血を始め、乳首同様、よりいじって欲しいとでも言うようにピンと立ち上がり始めている。

「ねえ、分かる? それとも分からないふりしてる?」

「んひつ?……ふぁあ♡ ……はえ?」

責めながら、男は千佳の認知を促すべく言葉を紡ぐ。千佳はその言葉の意味を掴めず疑問を浮かべるが、もうすでに、千佳の頭が明確な言葉にできていないだけで、千佳の身体はその感覚を理解してしまっている。

よって、

「いま、チカちゃんにやってることは『えつちな事』で、チカちゃんは『動けるようになっ

この感覚は、快感は、「気持ちいい」のだと。そして、いまも止められない全身のビクつきは「身体が待ち望んでいたもの」なのだ。

「しゅ……う……いいい♡ いまの……なんりやったのお……♡」

呂律も回らず、うわ言の様なものを繰り返しながら顔を蕩かせる千佳は、明らかに先程までの無垢さより淫靡さが勝っている。

絶頂一つ。ただそれだけで、年齢不相応の幼さが際立ちつつも雌としての魅力を放ちだした千佳の蕩け顔を、同じく蕩けきってひくつく股越しに見た男は、千佳の持つポテンシャルに背筋をゾクつかせ、逸物の硬度がいや増す。

その時だった。

男のペニスが硬度を増したことで跳ね、千佳の鼻面を叩いた。やや敏感になった亀頭に千佳のこれまた小さな鼻が触れ、男に僅か快感を齎す。男にとってはそれだけの出来事だったが、劇的な変化が起こったのは千佳の方だった。

「?…変な二才……いつ!?♡ ……んっ♡ ひいいんああ……♡」

鼻先をかすめるように叩いた男のペニスから滴った僅かな先走り汁。それを鼻孔に感じて、匂いを受容した瞬間、なんと千佳は浅いながらも再び絶頂したのだ。

身体が、理解してしまっていた。この雄の淫臭こそ、絶頂の花開いた次に千佳が求めているものなのだ。

その理解が齎した変化は絶頂に留まらず、閉じられた蕾が春めくが如く、千佳のおまんこ——その花弁たる小陰唇が開き、奥の雌蕊を曝け出すかのように膣口が仄かに顔を出したのである。紛れもなく、それはオスを受け入れんが為のメスが持つ機能。千佳の性徴の度から見れば、まだ開花するのは先であつたはずのその機能が、男の手によつてアクティベートされたのだ。

はむつ、じゅぞぞぞ

「んひつ、あはああん♡」

理性が振り切れそうになるのをこらえる男が、しかし堪えきれずに千佳のおまんこにむしやぶりつく。

先刻までの丹念な愛撫とは似ても似つかないオスの情欲のままにおまんこを舐られ、先程よりも甘い嬌声上がる。絶頂を覚えた千佳の身体は、その刺激で愛撫のときにはしなかつた、差し込まれた舌を締め付けるような膣の蠕動を起こし、それが辛うじて残つていた男の理性を喚起させた。

そして、舌先の動きはあくまで止めず、男は冷静な部分で違和感を覚える。

素質はあるだろう。しかしそれだけで、性的に未熟であつた女兒とも思しき体格の少女がここまで淫らに花開くだろうか。

「んひつ♡ んやう♡ ひよこっ♡ ひんつ、かんにっ♡」

舌のザラツキに浅いところを擦られて甘イキを繰り返しているこの少女は、今日まできつと自慰すら知らずに過ごしてきた筈なのだ。

いわば素質は種の状態。本来であれば蕾はおろか芽吹きもしていないはず。それがいまやどうだ。オスを誘う淫臭振りまくいやらしいおまんこは、前戯によつてぴたりと閉じていたクレバスが開き、差し込まれた舌を断続的に締め付けながらさらに奥へと導くように蠢き、持ち主に軽い絶頂を繰り返させるほどのいやらしい器官に成り果てた。

千佳の表情からは戸惑いが失せ、淫蘆にふやけた頬には力がなく、甘イキに震え濁点も発せなくなった口の端からははしたなくよだれが垂れ、その目は焦点を結んでいない。

性的な快楽を覚えたばかりの女の子が晒している姿では無く、晒せるわけも本来ならば有り得ない。

男は性欲こそ人一倍だが、性技において熟達しているわけでも、経験が多いわけでもない。というか無い。

仮に、見様見真似の愛撫にたまたま天性の才能があつたとしても、未開の少女をここまで雌にするほどの経験が足りているはずがなく、また同時に男も、挿入させたり口を犯したりという具体的に自分が快感を得る為の行為までは及んでいないとはいえ、射精の一つも行っておかしくないほどの興奮を覚えているのだ。

(……まさか、これも黒トリガーの効果か？ 同調したトリオンを介してこっちの感覚を相手にフィードバックさせる効果でもあるのか？)

男の推測は、またも的を射ていた。

このトリガーの基本機能の『同調』の真価は、トリオン器官にある基の部分のトリオンにまで同調が及んだとき、同調者の感覚およびサイドエフェクトを対象へと伝播させる『共振』の能力。この共振の前段階である『共鳴』を利用することで、他の国の強力なトリオンを道しるべに、界渡りを実現させている。

つまり、男がミデンに近づいた際に千佳に引き寄せられたのは、千佳のトリオン能力が高すぎるのが原因であり、必然でもあったと言える。

また、この共振は、相手のトリオン量が多ければ多いほどに同調完了時の効果が高まる。

つまり、感覚の伝播は常以上に大きな効果を発揮し、男の得た快感までも無意識に千佳へと流れ込んでいたことにより、まるで土に栄養剤のアンブルを差したが如く千佳の開花を加速度的に促したというのが、男の目の前でひっくり返されたカエルのような体勢でビクビクと甘イキを繰り返す千佳という光景を生み出したのである。

男が安易に挿入を急がなかったこともあり、焦らされたままにお互いの感応が高まっていくそれを、『共振』によって千佳がほぼ一人で受け止める結果となったのである。

そこに男の言葉が千佳の自覚を促したことで、身体の中でかろうじてせき止められていた欲情という名のダムを一気に決壊させるきっかけになってしまった。

つまり、千佳はその高すぎるトリオン能力が故に男に出会い、その多すぎるトリオン量故に雌としての本能を一息に引き出されたのだ。

その上、共振によって引き出された千佳の気配隠蔽のサイドエフェクトが、外部から千佳が訓練スペースにいるという事実をくرامせてしまい、孤立無援の状況が作り出されてしまっていた。

(なるほど。とりあえず確かめるに越したことはないな)

そんなトリガーの性能を完全に把握したわけではないが、男は強ち外れていない推察を終え、千佳の秘所を舐る舌を止めた。

「んあつ、んあつ、んきゆう……ふあ?♡」

刺激が突然途切れた事で少し遅れて甘いキ地獄(天国?)から解放された千佳が、呆けた声を出す。

男は千佳の眼前にあつた逸物を動かし、その小さな口元へと運ぶ。

むあつとした先走りの雄臭が再び鼻先を掠め、千佳の下半身が震える。

見れば見るほどグロテスクな、血管が浮かび上がっては震える肉の棒。臭くて、太くて、長くて、怖いハズのペニス。

しかし今の千佳には、オス臭くて、舌よりも太くて、指よりも長くて、それに対する気持ちや単語にまとめることはできない物。

男はそんな千佳の口元に肉棒の先端を到達させると、千佳に聞こえる程度の声で命令を発した。

「チカちゃん、舐めて」

口元に来た男の物、そして言葉。千佳の唇がふるふると開きそうになり、次の瞬間固く引き結ばれた。

「……だ、だめえ……」

男性器を舐める。それは流石に千佳の許容範囲をオーバーしていた。千佳の知識の中に、セックスが男性器を女性器に挿入するものだというのはあるが、それ以外の——オーラルセックスに関する知識など無い。

自分は男にさんざん舐められていても、自分が男の排泄器を舐めるという行為には単純に嫌悪感もある。

しかしそれ以上に、とてつもなくいやらしいことに思ってしまうことが千佳にそれを忌避させた。

ただし、唇を僅かに動かして絞り出した声は、勿論男が受け入れてくれるはずもない。「もし、お口で満足させてくれたら、本当にそこでやめてあげる」

「! ……ほ、ほんとう、れすか?」

代わりに与えられたのは、ほんの僅かな希望。満足というのはきつと、男にも千佳が味わったあの感覚を与えること。そしてそのためには、男と同じように舐めたり啜えたりする必要があるのでろうということは彼女のぼやけた思考でも分かった。

忌避感が、この先の決定的なところに踏み込まなくて済むという希望によつて塗りつぶされる。

口元を彷徨う男のペニス。これを舐めるといふ嫌な、しかしセックスそのものよりはマシな行為だと思えてしまうそれに対して、「酷い」か「より酷い」かの選択でしかないのにも関わらず千佳の天秤が傾いていく。

「今度こそ、約束する。俺をお口で満足させてくれたら、それ以上のことはしないし、その時点で君を解放する」

お互いに股の間から相手の身体を見上げるようなシニールな形ではあるが、男と千佳の目と目が合う。

その眼差しからは、言っていることに嘘はないと思つた。こんなとき、ユーマくんみたいに相手の嘘が分かるといふのにと考えつつも、根が純粋な千佳はもう一度だけこの人を信じてみようと思つてしまう。

実際、男の言葉に嘘はなかった。もしもここで自分が達するのならば、千佳の幸運へ

の饒に彼女を解放するつもりでもいた。尤も、それ以上にこの賭けへの勝率の高さを確信していたからこそその真摯さであることは言うまでもない。

そう、これは男にとっても実質賭けではあった。一度ほぼ騙したに等しい千佳にもう一度同じようなことをすれば、いくら千佳でも拒絶が勝るだろう。というより、この子は肉体への責め苦よりも、裏切られたり騙されたりという心の苦痛の方をより嫌うタイプだと思われたのだ。

そこで、この酷いかより酷いの二択を千佳に選ばせることで、「彼女が選んだ」という誤認を与える。約束で縛り、逃げ道を塞ぐ。この袋小路をあくまで千佳が選択した結果だとすり替える。

「……わ、かりま……した。やります」

果たして、千佳は術中に嵌った。

先程は男に舐め取られるがまだだった舌を出し、口元でビクンビクンと脈打っている男の剛直にその先を触れさせる。

「うおっ……」

尿道口に千佳の舌先がちろりと触れた瞬間、男の口からうめきが漏れた。

劣情が加速し、精をぶちまけたくなるほどの快感が瞬間的に男の背筋に走るが、

「えあんっ!?!♡」

驚きとともに艶声を上げたのは千佳の方だった。

舌先が触れ、変な味を感じた。確実にマズいに分類される雄の先走り汁の味。千佳の未知の味。しかし、それに味覚を刺激された瞬間、反応したのは喉や胃ではなく脳髓の方。

走ったのは、間違いないく男の責めを受けた時のあの感覚——快感だった。思わず艶声を驚きの色で上げてしまうほどの。

そして、その反応と自身の体に起こったことを鑑みて先程の推論に確信を得た男は、すかさず畳み掛ける。

「チカちゃん、もうおしまい？ だったら、チカちゃんは俺にもつとえっちいこととしてほしいってことになっちゃうけど、本当にいいのかな？」

「!? ……ま、まられす……きちんと、お口れしましゅ……にやめましゅう……♡」

最後の一線だけは越えたくないのか、千佳がおずおずと震える舌を再び伸ばす。淫臭と脳に来る味を堪えつつ、チロチロと、蛇のように龟头をつつくように舐め始める。

「うあ……チカちゃん、えっろ」

「れる……しよんなこと……れるれる……ないれしゅ……」

拙い舌の動きが男の陰茎に刺激を与えるが、しかしこみ上げてくる射精感は、

「うわ……ふう」

ある一定の高さまで高まると風船の空気がしぼむように抜けていく。絶頂したくてもできないような苦しいものではなく、むしろ余韻が残る引き方。その代わりに、

「れろっ、れろっ……んにやつ！ なんっ、でえっ♡」

抜けた空気——男が得るはずの昂ぶりが、共振を通じて千佳へと流れ込む。

自分は気持ちいいことをされていけないのに、さつきまでのようにいやらしい気持ちが止まらなくなっていく。

男の性器を舐めながら、自分が気持ちよくなっていく。これでは、男の言葉を否定できない。千佳の心が、自分自身を淫らに定義してしまいそうになる。

先程までとは別の理由で、早く終わってほしかった。自分がいやらしい、えっちな子なんかじゃないと証明したかった。

しかし、先走りを舐め取る程度のぎこちない舐め方では、男の人は自分のようにびゅっびゅっとはならないのだろうか。がくがくとならないのだろうか。舐められもしていないのに自分ばかりが気持ちよくなっているようで、そんな女の子のどこがえっちではないと言えるのか。

そんな気持ちがいじわじわと千佳の心を浸食していく。

「れろれろっ♡……れろんっ」

「うっ、ち、チカちゃん、だんだん積極的になってきた？」

挙げ句、それを否定しようと舌先のみながら動きを強くしたところ、男からはさらに千佳が淫らなのだとしても言いたそうな言葉が投げられてしまう。

そして、男にそんな千佳の心の機微はお見通しだった。というのも、勿論これは共振のせいではあるのだが、千佳のおまんこのよだれがまたはしたなくも増してきているのが、その眼前に曝け出されているのだから当たり前の話であった。

舌先が頑張つて男の性感を刺激しようとうねるたび、共振を通じてその快楽は千佳へと跳ね返る。代わりに男の方は波が風呂でいく。

これを戦闘に應用すれば、それこそ傷を受けてもそれを相手にフィードバックして相手のトリオンで自分ばかりが回復というのも可能となる、恐ろしいトリガーなのだが、今のところその恐ろしさはすべて千佳の性感を高ぶらせるためだけに作用している。

「ふうっ♡ ……れろれろれろ。れろ……んふう♡」

「はあ……チカちゃん、もういいよ」

暫くして、拙い舌先の動きを堪能したくせに、まるで呆れたように言い捨てた男は、腰を浮かせて千佳の口元から剛直を引き離す。

ふいに口から離されたために、千佳の舌先が宙を彷徨う。それがどこか名残を惜しむようにも思えて、千佳の頬がさらに朱に染まる。

だが、その朱は続けられた男の言葉に蒼白へと転じた。

「えっ……？」

「もういいよ、って言ったの。ペロペロと仔犬みたいに舐めてくれるチカちゃん自体はかわいいんだけどね。今のままじゃ、気持ちよくなってるのはえっちなチカちゃんの方だけで、俺は終わりそうにないからさ」

そして男は立ち上がろうとする。

「ま、待つへ……！」

なんとか制止しようと千佳が男の腰に縋りつこうとする。すでに縋れるほどに体の自由が効く事に気づけもせず、また気づけたところで逃げ出すという思考の余地は千佳にはない。

腰に手を回したことで逸物がまたも千佳の頬にぺちぺちと当たるが、最早気にしてもいられない。

「もう何度か待ったんだけどなあ。最後のチャンスもあげただけだな」

「ご、ごめんにやさい……れも、もいちららけ、んっ……こんろはちゃんろしましゆかりやあ……」

「もう呂律も回ってないくらいえっちな気分になってるのに何言ってるの。おちんちんをおまんこにいれるともっときもちーんだよ？ 想像してご覧、今までチカちゃんがびくびくしてたときに来たあれよりもっと気持ちよくなれるんだって」

「らめれしゆう……きもちくなつちやらめなんれしゆう……♡」

否定しつつも想像してしまったのか、またも声に甘さが混ざる。

男は四つん這いのまま、やれやれとでも言うように肩を竦めると、立ち上がろうとする力を緩めた。男の下半身の動きにつられて、千佳が再び仰向けに寝転ぶ形になる。

「じゃあ今度こそ本当に最後のチャンスだ。もしこれでも俺が満足できなかつたら、分かるよね？」

「が、がんばりましゅ……」

「俺としちや頑張ってもらわなくてもいいんだけど、じゃあラストチャつてことでフェラチオしてもらおうか。分かる？ フェラチオ」

「わかりまひえん……」

「そのお口をおまんこにするんだよ。俺のちんこをお口で啜えて、吸ったり舐めたりしゃぶったりするの。あ、噛んだらだめだよ。どつちかという大変な目に合うのはチカちゃんだし、噛んだ場合は反則つてことでチカちゃんの負けね」

「くわえっ!?! しゃぶっ!?!」

未知の単語の詳細を聞かされ、その内容に目を見開く千佳。

目の前で揺れるこの剛直を口に含み、先程自分がされたように男を気持ちよくし、満足させなくてはならない。

先程舐めろと言われたとき以上のショックが千佳を襲うが、その後に脳裏によぎった思いには違いがあった。

(お口に、入れ……そんな……そんなことしたら、どうなっちゃうんだろう……)

トリガーの効果など知らない千佳にとつて、男の逸物は、さつき舐めただけでも何故か千佳ばかりが気持ちよくなってしまう卑猥なものであるとインプットされていた。というより、そういうものだとも思い込まねば、千佳が経験もないのに男根を舐めて気持ちよくなるような変態だと認めてしまうことになってしまう。

故に、ここでの千佳の逡巡は先程の忌避感から来るものとは色が異なり、これ以上の気持ちよさをもし得てしまったら、自分はいつまで自分を誤魔化しきれぬだろうかという不安から来るもの。

「さ、じゃあやってみようかな。いつでもどうぞ」

「……………」

「どうしたの？ やっぱりえっちの方がいいのかな？」

「違つ……く、くわえますから」

「フェラチオだよ。唾えるだけじゃだめだからね」

「わかつて……ます……」

「おーけー、ならやってみよう。レッツフェラ」

ぺしぺし

男がまた腰を振って、催促するように逸物で頬を打つ。

このまま迷ってばかりもいられない千佳は、それを皮切りに動き出す。

「んあ♡……………はっ…いきます、よっ」

「いつでもどうぞー」

とうとうオスの匂いに対し条件反射的に蕩けるようになり始めてしまった千佳は、ぶるりと身体を震わせてから男のペニスへと手を伸ばした。

手を伸ばせることに最早驚きはなく、両の手で包み込むようにペニスを握る。千佳の片手では指が輪にならないだろう太さのそれは、血管が浮き出て脈を打ち、手が汗ばむと思えるほどに熱を持っていた。

(びくびく、してる……)

まだ手で触れたただだが、男のそれが自分と同じようにびくびくしていることに妙な親近感を覚える千佳。

「見惚れてないで、フェラしてほしいなあ」

「みとれて、ませんっ……します、からね？」

男の軽口に抗う声を上げ、まさしく言葉通りであった自分を振り払う。

千佳が口を開けるのに合わせて、男が膝を曲げて腰を落とす。鈴口と千佳の唇がキス

をするように触れた。

「んふう♡」

やはり、それだけでも快感が走る。男の快感の伝播だなんて考えもつかない千佳にとつて、それは己が裡から湧き出る気持ちよさにしか思えず、意のままにならない身体に哀しみさえ覚える。

それでも意を決して千佳が口の開きを大きくすると、ゆつくりと男のペニスが千佳の口内へと侵入してくる。

(お、おつきい……！)

口中を埋めてくる熱い肉棒に歯を立てないようなるべく大きく開け、対には亀頭が口内に没した。

「んむう♡」

口内から鼻へと抜けてくる濃度を密にした雄臭。呼吸の術が鼻しかなかったこの体勢において、それは容赦なく千佳の性感を刺激する。

男はおまんこを観察しつつ、千佳の口内の暖かさをちんこで堪能する。

啜えた時点ですとどに濡れ始めたそこを見れば、千佳が感じていることなど一目瞭然であり、同時に、常ならば間違いない達したであろう千佳の口内の感触とその強烈な快感を得ても自分の射精が起こる様子がないのを感じ取って、男はにやりと笑みを浮かべ

た。

それは先刻の自分の推論に裏付けを得た笑み。少女を墮とすためのピースが揃った歪んだ歓喜の笑み。

イカされないという、確実に約束された勝利を得た男は、暫く地千佳の反応を楽しむことにした。

「ふうー♡ ふうー♡」

啞えただけにも関わらず、男からのフィードバックと濃度を増した淫臭で再刺激された自身の雌の部分によって鼻で荒い呼吸を繰り返す千佳。息が鼻を抜けるたびに口腔に詰まったペニスからの臭いが嗅覚を通じて脳を馬鹿にしていくような気さえする。

このままではいけないと思い、男のモノに舌を這わせる。ここまで濃い臭いを放ちながら、実際にモノを舐めてみると思ったほどに味がするものではないことに少し驚く。

「んおっ」

「ふうーんっ♡」

しかし這わせれば這わせるほどに返ってくるのは雌の喜び。男を達させるためのもではなく、自分の快感ばかりが刺激される。

それを持ち前の我慢強さでなんとかこらえつつ、しかしこのままでは流されてしまうと悟った千佳は、一転して舌の動きを早めた。

(早くっ！ 早く満足させなきゃっ！)

れろれろっ、れるっ、じゅぷっ

「うおおっ!? ち、チカちゃんっ、急にどしたっ!?」

「んふうううううう♡」

いきなりの強烈な舐め上げだけでなく、先程の男の言葉に忠実に吸い上げてまで来た動きに、一気に射精に至るほどの快感を得た男がうめきを上げる。

その快感がまたフィードバックされ、千佳がまたイったことを示す潮がおまんこから吹き出して男の顔にかかる。

だが、千佳にはもう自分がイったことへも男の反応へも応じている余裕さえない。頭の中でリフレインするのは、

(早くっ、早くっ、早くっ、早くっ、早くっ)

ただ、男を満足させなくては、その一心から浮かぶ二文字のみ。

じゅぞっ、ちゅぷっ、れるう、ずぞぞっ

「ふっ、チカっちゃんっ、すげ……」

「ふううう♡ んふうううう♡」

合間合間にはフィードバックによってイってしまい、口の動きが止まるせい、動きは激しくなってもまだまだおぼこい千佳のフェラでは、共振を超えて男を達させるには

経験が圧倒的に足りていなかった。

(早くっ、早くうっ！)

ぐぷっ、じゅるっ、れらあ、ちゅぽっ、ぐっぽぐっぽ

「うあっ、からみつくっ！　ちよ、ちよ、うえ、奥っ!？」

「んぐううううう」

しかし、千佳はその物分りの良さで、吸うやしやぶる以上の領域に手を出していた。即ち、ストロークである。

舐めたり吸ったりという言葉ば二次元的な動きに対し、男の反応は掴めなくとも、そのペニスの跳ね方で快樂のツボを捉えた千佳の学習能力の高さは、その男の快樂をより引き出す方向に働いていた。

本来であれば千佳自身苦しさしか感じないはずであろうストロークを絡めた動きは、龟头を喉奥にまで迎え入れつつ男にも未知の性感を与えまくっていた。

くぐっくぐっ、おぶう、ちゅぽっ、れるれる

「ちよっ、まつ……チカちゃ、それっ、やべっ」

「んっっ♡　ぐぷっ♡　んっぐぶううう♡」

勿論、フィードバックは今なお千佳を襲い、そのおまんこからは愛液のよだれと潮がひっきりなしにぶしゅぶしゅたらたらと分泌され続けている。

それでも千佳は、あえて男のおちんぼの感触に意識を集中することで、なんとか快楽の波に自身を手放すことを堪えていた。

一方、男の方も千佳の思わぬ反撃に余裕を手放していた。シックスナインの体勢になつていたのは正直幸運だった。男のツボを押さえるようなその口内の動きは、喉奥を使い始めたことで裏筋の敏感な部分を千佳ののどちんこがくすぐるようになっており、もしそれが急速にこなれ始めた千佳の舌によるものだったら、共振の作用を振り切つて男の射精を導いていたかもしれない程に気持ち良いものだった。

くぶつくぶつ、うにいい、じゅぽつ、じゅぽつ、ちゆるるるつ

「うっ、くっ、やば……っ、ふおおっ!」

「んふう♡ んふう♡ じゅろろっ♡ じゅろろっ♡ ずずずずっ♡」

首に横の動きまで加え始めて、頬裏の肉までも使い、更には玉袋から精を吸い上げるかのようなバキュームを何とか堪える。

(まだなのおっ!♡ 早くっ、満足っ、してえっ♡)

焦る千佳は、とうとう男の腰に手を回すと、自分の身体まで持ち上げるようにして男の肉竿を更に更に奥へと導く。

ぐぬぬぬっ、ぬごんっ

「うあっ、くおおおおおおおお!」

「むううう、んヴオえっ!♡」

だが、それは悪手だった。

ある一定のラインを越えた瞬間、男のモノは一気に根本まで口内に収まり、その先端が千佳の喉奥を更に越え、喉仏の裏までも到達した。

思わず千佳が嘔吐反射により喉を震わせ、嘔吐感でモノを吐き出そうとした刹那、男の陰茎の先から僅かに液体が迸った。

先走り汁より濃密なそれは、短くとも間違ひなく射精ではあつた。だが、男は括約筋に力を全力で込めて、それ以上の迸り——完全な絶頂をすんでのところ堪える。

ここで男を絶頂に導いていれば、千佳の勝利だつたらう。

だが、千佳は剛直が嘔吐く程の位置まで入り込んだ衝撃で、反射的に動きを止めてしまった。必然、共振のフィードバック作用は男の興奮を沈静化し、その分千佳の性感を刺激した。さらに、濃厚に香る男の陰毛と陰囊からの淫臭が根本まで含んでしまったことでダイレクトに千佳に届けられてしまう。

結果——

「ンツゴフオオオオオオオ♡ オゴオオオオオオ♡」

ビクビクビクビクビクウツ!

千佳はがに股の爪先立ちで腰を浮かせ、より潮を高く吹き上げるかのようにおまん

こを高く突き上げる無様な格好で、腰をがくと震わせながら低い声で絶頂した。

今までのどんな絶頂よりも高く、深く、無様なそれは、波濤が風ぐのが何時になるのか不覚に陥るほど千佳に激烈な衝撃を与える。もう言い訳ができない、完璧に迎えてしまった快楽の頂点に、半ば白目を剥きながら翻弄される。

おまんこが熱い。噴水のように吹き上がる潮は、きつと千佳の身体が快楽に屈した白旗のようなもの。脳が溶けるかと思われるほどの悦楽。この状態の雌なら誰であろうと同じだという確信。気持ちよさが更なる気持ちよさを生むかのような、終わりの見えない深い海にどこまでも沈んでいくようであり、しかし空高くまで突き上げられているような、筆舌に尽くし難い絶頂の渦。

それは長かったのか短かったのか千佳には判別できないが、少なくとも主観的には無限に続いたような気さえする。実際、千佳の絶頂の波が収まるまでは暫しの時間を要したが、その間千佳の手はまるで縫い付くように男の腰に回されたままで、喉奥を埋める剛直もまたそのままだった。

身体の震えは喉にも伝わり、その刺激が産む快感がまた千佳にも伝わっていることを既に認識している男は、勝利を確信した。

潮吹きが収まり、次いで震えが収まり、突き上がった腰からへなへなと力が抜ける。千佳の雌汁に顔をびしゃびしゃにした男は、それを見届けると邪な笑みを浮かべる。

「ふう……さあ、チカちゃん。これで君の負け、ってことでいいよね？」

事実上の勝利宣言。だらしなく蕩けているだろう千佳の顔を想像しつつ、男はメインディッシュを楽しみに前菜の喉奥から己の逸物という食器を取り出そうとする。

その瞬間であった。男がしていた油断は、当然のことであった。散々に男に弄ばれ、未熟なおまんこを開花させられ、大人の売女でも早々味わえないほどの強烈な絶頂を、男の快感分も併せて炸裂させられた幼い少女が、よもやまだ屈していないなど誰が想像し得るだろうか。

千佳の舌が動き、喉奥が動き、口が窄み、ありえないことにフェラチオを再開したのだ。

「なっ!？」

これにはさしもの男も驚き、さらに今まで以上の快樂にさらされる。

(……………まだ……諦め……ない……………♡)

グツポグツポグツポグツポグツポグツポ!

「ゴフォツ♡ ヴオオオ♡♡♡ ングオ♡♡♡ エグっ♡」

「ああっ!?! ちよちよっ、マジかよこの子っ! すげっ……!」

もう、蕩けきった頭では舌の動きの繊細さなんて出せるわけもない。単純に今使える喉の奥という武器を自覚し、イラマチオもかくやという勢いで嘔吐しながらも男の肉竿

に必死でねぶりつく。

対し、男の心中は強い快樂と、それより強い驚きと、それよりも深い敬意までもに満たされていた。

この子は、あれ程の快樂に翻弄され、脳髓を突かれ、身体は完全に屈服してなお、心が折れない。

(こんなところでっ♡……諦めたらっ♡……兄さんたちを♡……救うなんてっ♡……できないっ♡)

(この子……いや、チカ。チカだ。この子なんて、ましてやちゃん付けなんかで軽んじていいような子じゃないぞ。この心の強さは、得難い。可愛いなんてもんじゃない。綺麗だ)

だが皮肉なことに、思うことは違えど、その意志の強さが結果的に男の想いの強さを強化してしまった。

男が、千佳に対し本気になった。

本気で、この雨取 千佳という一人の気高い女を、何としても自分に向けさせたくなつたのだ。

その強さを、健気さを、淫靡さを、そして何より好意でさえも、独り占めにしてやりたいと思つてしまった。

後悔さえ沸く。こんな出会いで無ければと。しかし、己の性欲の強さと歪んだ嗜好で、この少女と健全な付き合いなどできるわけがない。

故に、男が取る行動は一つだった。

はむうつ、じゅろろろろつ、れるんつ……つぶつ、じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼつ！

男は目の前にある千佳のおまんこに再びむしやぶりつき、吸い上げて、クリトリスを舌で弾き、かと思えばまたも指を侵入させて先よりも激しく出し入れを繰り返し始めたのだ。

「ンゴつ、ぶあつ!?!♡ にやんでえ!?!♡♡♡ んみやあああああ!♡ できない!♡♡♡ しやれたられきないよおおお!♡♡」

思わず喉からペニスを吐き出してしまい、続く責めに首をイヤイヤと振りながら抗議の声を上げる。

「俺からつ、しないなんて、言っていないでしょ! オラオラオラ、イけつ、何も考えられないくらいっ! イきまくつちやえ!」

じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼつ! くちゅくちゅくちゅつ、つぶつぶつ!

「あああああ!♡ やらつ!♡ まつへ!♡ ああああ!♡ んきゆうう!♡ イっへる!♡ にやんどもお!♡♡♡ りやめ!♡♡♡ もうやめへえええええ!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ひひひひひひひひ!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

指の動きで溢れた愛液を更にクリトリスに塗りたくるように刺激されるだけでなく、男の舌が千佳の小さな菊——アヌスにまで侵入してきた。

せつかく不意をついて最後の攻勢に乗り出したのに、その矢先に男の責めが再開されるなんて思っていないかった千佳は、ただでさえ積み上げられていたそれまでの火照りにいきなり爆弾を打ち込まれたようにあつさりど、しかも強烈に絶頂を繰り返す。

アナルへの異物侵入でさえ、今の千佳には新たな快樂だ。毛色の違う快樂は千佳の眠っていた性感帯をあつさりと隆起させ、数秒のあとにはアナルは完全なもう一つのおまんこへとなり果てる。

「やらあ！♡ おひりい！♡ きもちくなつひやらめえ！♡ わらしのかららあ！♡
いうこときいれよお！♡♡」

「まだ考えてるのか！ 違うだろつ、チカ！ 感じろよ！ 俺の手で、舌で、雌になれよ！ 墮ちきれえ！」

「やらよお！♡ わらひわあ♡……にいひゃんらちをお♡ たしゆけ、あんつ！♡ たしゆけにいグツ、イグううううう！！♡♡♡」

「自分も助けられてないのに何言ってるんだ！ 助けに行きたいのか、自分がいききたいのかももう分かってないくせにつ！」

「んおおおおお！♡ ちぎやうう！♡ まけにやい！♡ まけにやいのお！♡ んつ

ほおおおお！♡♡♡

「負けないばつかじや守れないんだよつ、自分だつて、もう身体が勝つことを放棄して
るつて分かつてるだろ！」

「あああああああ！♡ いまびりつていったあああ！♡♡ しよこつ、しよこやめれえ
えええ！♡♡♡」

「見つけたぞつ、チカのGスポ！ ここだろ、びりつとしたのここなんだろつ！」

「いやああ！♡ あああああああ！！♡♡♡ りやめつてえ！♡ や
べでえええええええ！♡ んやああああ！！♡♡♡」

そこからはもう男のターンだった。

男の勢いを遥かに増した責めは、千佳の抵抗を奪い、フィードバックも無いのに千佳の快楽をこれまで以上に引き出した。もう思考の余裕などない。苛烈な責めに翻弄されるうちに男の指先が千佳のクリトリスの裏側でぶくりと膨らんだGスポットを捉え、その途端に走り抜けた電流のような、先程までとは更に一線を画す快感が千佳から女の子の外殻を取り払い、雌の自覚を促さんと襲いかかった。

その乱暴な責めを、千佳のよだれまみれの濡れ濡れおまんこはきつちり良きものとして受け取った。

腰が無意識に浮き、男の指先をより気持ちいい所に導こうとさえしていた。

雨取千佳の場合 その4

男が、千佳には似つかわしくない咆声を聞き届けてから数秒から数十秒の間。その間に千佳は、一つの巨大な絶頂と、余震のように続く小さな細かい絶頂を繰り返した。

「ゼーツ、ゼーツ、ゼーツ、ゼーツ」

イってる間、男は千佳に挿入して彼女を狂わせた己の中と葉の両指を膣内に収めたままだった。男の意というよりは、抜けなかったが正しい。どうやら千佳にはいったときに強く締め付けるクセがあるらしい。

絶頂が治まって力が抜けるとともに荒い呼吸を繰り返し始めた辺りで締め付けも緩み、男は指をようやく引き抜く。引き抜きは、愛液という潤滑剤のお陰で先よりもスムーズで、先と同じくちゅぽっという水音を伴った。

「ひゅんっ♡」

男の指が膣壁を擦り、呼吸の合間に千佳の嬌声が混ざる。男はついでに幾分硬度を失ったムスコにて、千佳の顔をわざと擦ってから身体を起こす。

さしもの千佳も、それに反応を返すことはなかった。男は立ち上がると、身体を反転させて足元に横たわる千佳の裸体を舐めるような視線で眺め回す。

ひっくり返された蛙のように腕も足も開いたまま横たわって呼吸を繰り返している幼気な少女の一条まとわぬ姿。呼吸のたびに、汗の浮いた可愛らしい双の丘が上下する。頂点にあるさくらんぼは硬く隆起し、男に摘み取って欲しいかのように赤らんでいた。視線を下に落として、目に入るのはなだらかなお腹。きめ細かい肌には丘と同じく玉のような汗が浮かび、そのうちの一つが可愛らしいくぼみへと流れ落ちる光景はカーンもかくやというもの。流れに誘われるように更に下へと視点は移り、見えるのはだらしなく開かれた両の脚。幼い中でここだけはむつちりと女性的なふくらみを持つ太ももを這い上がるように視線を移動させれば、その付け根に位置するところに男のメインデイツシュ——おまんこが、賞味の時を今か今かと待ち侘びるようにひくひくと震え男を誘っていた。

ごくりと生睡を飲み込むほどに、少女の股ぐらに付いているには不釣り合いなほど淫猥な割れ目は、つい先程割り開かれて潮を吹かされたとはとても思えないほどびつたりと閉じ、元の一つるつるの一本スジに戻っていた。

名残があるとすれば、ぶるぶるとした大陰唇をしとどに濡らす愛液がテラテラと輝いていることくらいで、ビラビラの一枚たりともはみ出したりもしていない、幼女のような無垢なおまんこ。

それをさつきまでぐちゃぐちゃに蕩かせて、悲鳴じみた喘ぎを上げさせていたことを

思い出し、男にゾクゾクとした愉悦が走った。

名残惜しげにそこから目を離して、視線は同じくトロツトロに蕩けた千佳の顔へと向かう。

本来であれば自信なさげでありつつも強い意志を込めた瞳は、男によつて絶頂を教えられるとメスの色を宿し、しまいには今ののように焦点も合わなくなってしまうことを知っている。

今は呼吸の大部分をそこには依存していない鼻は、形もよく小さな鼻孔なのに敏感にオスの匂いを受容することを知っている。

だらしなく半開きになりながらも鼻では足りぬ呼吸の役を代行する口は、その可憐な唇も思つたより長い舌もその奥の喉も、全てが性器の代用ができるようになってしまったことを知っている。

世界で、男だけが、雨取千佳に潜んでいた『オンナ』の部文を知っている。

とてつもない優越感を男は感じる。先程質問の中に出てきた数々の面子——友も、戦友も、師も、幼馴染も、兄も、父母も知るはずのない千佳の雌の顔を、自分こそが引き出した優越。

だが、男の目的は更にその先にある。

なので、そろそろ戻つては来ないだろうかと男が千佳の目を覗き込んだ時だった。

奇しくも、千佳の意識がトリオン体から戻ったときとほぼ同じ体勢で、千佳の目が焦点を結んだ。

白い世界から、千佳の意識が浮上する。

「あ、目が覚めた？ いいタイミングだね」

目の前には、どこか覚えのある光景。目に続いて呆けた頭が機能を回復しだして、千佳は悟った。

（わたし……負け、ちゃった……）

負けたのだ。貞操を賭けた勝負で。つまりは負け分のチップを払わなくてはならない。この目の前の男に、純潔を明け渡さなければならぬ。

（なんで……かな……なんで、わたしだったのかな……）

思えば、青天の霹靂もいところだった。普段通りの日常で、普段通りに訓練していただだけ。それなのに我知らぬうちに現れた男に、意識のないままの本体を弄ばれて、女の子の大切なところに限なく触れられて、気持ち悪くされて、でも本当は気持ちよくて、おまんこからはおもらしさせられて、でもきつとあれはおもらしじゃなくて、気持ちよくて、えっちな子って言われて、悔しくて、でも気持ちよくて、おちんちんまで舐めさせられて、それでも満足してくれなくて、フェラチオなんて知らなかったのに、頑張っ

たのに、でも気持ちよくなるのは自分で、喉の奥におちんちんが入ってきた瞬間にまつしろになって、それでも頑張っておちんちん気持ちよくさせようとしたら、突然おまんこをまたいじめられて、ぐちゃぐちゃでもうわけわかんなくされて――

「う、うあ……ううううう……うええええん……」

どうしてわたしなんだろう。どうしてわたしは、こんなにきもちよくなつちやうんだらう。

理不尽な現実と、自分のくせに意のままにならない身体に翻弄されきつた千佳の涙腺が、とうとう緩んだ。

兄らを失つて以来久しい涙は、熱かった。

本当はこんな男の人の前で、泣き顔なんて見せたくなかった。でも、もう何もかも見られてしまった。泣き顔以上の顔だつて。それが悔しくて、悲しくて、でも、このヒトが与えてくれたあの気持ちよさがまだ体中に残つでいて、このヒトが今日これからわたしを弄び終えていなくなったら、もう二度とあんな気持ちよさは味わえないんじゃないやなんて考えている自分を許容できなくて、涙は止まらない。

「ああ、チ力、泣かないで」

男が地面の己の服で手を拭つてから千佳の髪を撫でる。あやすような手付き。滲む視界に男を見やれば、困つたような、でも思いの外優しげな風貌の青年が映る。

思えば、男の顔をまともに見たのはこれが初めてな気がする。至近距離すぎたり、まるで余裕がなかったたので少なくとも記憶には残っていないかった。

思ったよりも大きな掌。温かい手のひら。それなのに、この先に付いている指はどこまでも冷徹に千佳をあそこまでぐちゃぐちゃにできてしまう。

ちゅっ

「ふあっ!?!」

そんなことを考えていたら、不意打ちでキスをされた。さつきとは打って変わって、啄むような軽いキス。性欲を意識させるよりは男女を意識してしまうような初々しいキス。

その驚きに、千佳の涙が止まる。

「ごめんね。でも、止めないから。罰ゲームとか勝ち負けとかじゃなくなったからね」

「?」

前半はともかく、後半の男の言葉の意味が分からず、千佳の困惑が深くなる。が、男はお構いなしに千佳の額に口づけて、続けて顎をクイツと持ち上げて己の唇と千佳のそれを重ね合わせた。

「!!?」

唇を割り開く動作さえ先よりも優しく、千佳の口内に男の下がまた入ってくる。

だが、続く動きは自分都合で貪るようなものではなかった。

くちゅ……れる……にちや……ぴちや

「んあ……♡ んふう♡……にあ♡ れうう♡」

無理矢理に性欲を喚起させるような激しさはなく、まるで先程捉えた千佳の気持ちいい部分を再確認し、またさせるかのような舌の動き。

一方的に激しく性欲だけを喚起させるような独りよがりな暴力的なものでなしに、互いにゆつくりと昂ぶりを覚えさせるような、それはまるで――

（恋人どうしみたいにな――）

どんな言葉よりも雄弁に、千佳を気持ちよくしてあげたいという献身さえ感じられるようなフレンチキス。

先程まで男が見せていた姿とのあまりのギャップに、自分がありえないことを考えていることに気づけない千佳。というより、気づいてはならないと千佳の奥底の部分が判断したのかもしれない。自分をさんざん陵辱した男に覆い被さられ、熱烈な、しかし激しくはないキスをされて安心感を得ている自分という事実。

あれだけ自分勝手なことをした人間が、打って変わって他人のためを思っている、なんて事実が気がついたら、千佳の奥底にある自分のいやらしさに触れてしまいそうで――

「ぶはっ……ねえ、いま何か余計なこと考えたでしょ」

「！」

瞬間、男が口を離して、千佳に問うた。

まさしく凶星をつかれた驚きに見開いた目で男を見る。

「チカ、君をいただく前に少しだけ話をしていい？」

「……ふえ？」

そして今度は意表を突かれた。君をいただく、なんていう明確なワードより何より、このタイミングで対話を望んできた男の真意が読めない。

「どうして君は、そんなに自分から目を背けているんだ？」

「……な、なにを」

怖い。

千佳は改めて、目の前の男にそう思った。だがその恐怖は、今までみたいな得体のしれなさや欲望をぶつけられることへのものではない。

まるでユーマのような、こちらを見透かす眼差し。衣服のそれではなく、内心を丸裸にされるような恐怖。

「チカ、君は強い。ここまでされても折れない心を持つてるし、意外と負けん気もある。状況に翻弄されてても、その中で打開策を練ることを止めない諦めの悪さもある」

「……………」

「だけど、君の中には君がない。いや、そういうと語弊があるな。君は救うこと、贖うこと、報いることに縛られている。まるで、『そうしなければならぬ』と何かに強制されてるみたいだ」

「……………やめ……………」

「滅私といえば聞こえはいいが、君のそれには違和感がある。さつきまでそれが何なのか分かってなかったけど、君が泣いたのを見てなんとなく分かった」

「……………やめて……………」

「チカ、君はどうして——」

その先を聞かされることの恐怖。

「やめてえ！」

「——自分を出すことをそんなに恐れるんだ？」

そして、男が決定的な一言を放ち、千佳の顔が快樂ではない歪みを見せた。

「気持ちよくなっちゃいけない。なのに俺の機嫌を損ねちゃいけない。負けちゃいけない。なのに俺の要求には素直に従う。折れない強さを持つているのに、チカから伝わってくるのは自己否定ばかりだ」

「いや……………聞かせないで……………」

掴まれていた。身体だけだと思っていたそれより深く、男は千佳を見抜いていた。

あんなことをしたくせに、あんないやらしいことをしてたくせに、この人は自分をしつかりと見ていた。

それが怖い。幼馴染の修だつて、きつと千佳をそこまで理解していないのに、この男はこんな僅かな時間で千佳の底まで手を伸ばしてこようとす。

男は千佳を強いと言つた。千佳は自分をそんな風に思っていない。雨取千佳は弱い。本当に強いなら――

「君は、何をそこまで恐れているのか。はじめは、俺を恐れているんだと思つた。だけど違う。君は始めから俺の目を見ていた。恐怖の対象にできることじゃない」

「いや……やだあ……」

「未知の感覚を恐れているのかとも思つた。でも違つた。翻弄されてはいたけど、君はあれそのものを恐がつてはいなかつた。むしろ気持ちよくなつてからは積極性さえあつたし」

「やめてえ……もう……」

「そしてさつき、俺がおまんこぐつちやぐちやにしてあげたとき。君は最後の抛り所に兄や友達を助けに行くことを叫んだよね？ あんなに自分が滅茶苦茶にされてるのに他人のために叫ばなきやならなかつた。それを、俺に言つてやめてくれるだなんて君自

身思つてなかつたのに、君は叫んだ。継り付くように。そういう自分でなくてはならぬ
いとでも言うように」

「……………」

千佳がいよいよやを止めて沈黙する。千佳自身が目を背けていた奥底に沈めた真実が、
男の言葉で浮上する。

「君が恐がつているのは、自分が傷つくことじゃない。他人が傷つくことじゃない。気
づくこと、気づかれることだ。君自身が心にしまった何かを自分で気づくこと。他人に
気づかれること。違うか？」

「……………」

浮き上がったものは、見えてしまう。目に映らなくても、心に浮き彫りになつてし
まったものは、もうごまかせない。

「……………」

だから、訊いてしまう。自分で分かっているくせに、その決定を自分以外の誰かにしよ
うとしてしまった。

「どうして、というか。ぶつちやけ当たつちやつたかーつて感じだけどね。俺としても
意外だよ。まさか俺ごときがチ力をそこまで分かつてあげられたなんて」

だから、聞きたくもない男の本心なんてものを聞く羽目になった。

「……………え？」

「正直ね、チカにイタズラし始めた当初のまま、都合のいい性欲の処理として君を『使う』気持ちのままだったら分からなかったと思うんだわ」

「……………そうじゃ、なくなっただけですか……………」

そうして吐露された男の内心は、最低ではあったが同時に意外なもの。痴漢の気持ちなんて知らない千佳にしてみれば、イタズラされた時点で最低なのでそれを下回ることはなく、むしろそうじゃなくなっただけというのがどういふことなのか気になる。

「いやホント、自分でも何言っただよって思うレベルなんだけどね。正直に言うよ。この最低男は、どうやら君の可愛さや強さに本気になっただけらしいんだ」

「??」

言ってる意味がわからず、千佳の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。いきなり年相応の顔を見せた千佳に男がくらくとやられそうになり、いやいやキモいキモいと自嘲気味に自戒してから千佳をまっすぐ見た。

「この俺は、アマトリチカという女を、男として本気で欲しくなった。だから本気で君を落とす。まずは身体を、そしていつかはその心も。最低な男が最低な告白をしているのは自覚してるけど、俺は、こういうやり方しかできないから」

「!!!」

ありえない告白だった。千佳の知る告白とは、もっと甘酸っぱくて、ロマンチックなものだ。

でも、きつとこの男の精一杯の誠意がこれなのかもしれないと千佳は思う。どこまでも歪んでいて、醜くて、悪辣で、しかしそれを隠さないこの目の前の男。名前さえ知らない、千佳を散々に弄んで、その上で更に千佳を頂こうなんて、身勝手さが人の形を持つたような男。最低な痴漢のくせに、千佳を理解しかけた男。

「どうして……」

「ん？」

だからこそ、問わずにはいられなかった。先程頭をよぎった疑問を、正しく目の前の、千佳が思う千佳よりも最低で、その最低さを隠しも否定もしない強さを持つ人間に。

「どうして、私みたいな子なんかを？」

「それ、どつちの意味で訊いてる？」

そして、疑問には疑問が返ってきた。はぐらかすではない、更に深く千佳を理解するための疑問が。

「……どつちも」

「どつちも、ねえ……じゃあ答えるか。一つ、俺チカみたいなお柄な子が好きだから。もう一つ、君が思うほどに、君の魅力は小さくないから」

「な、何を」

「なんかチカは自分の価値をだいぶ低く見積もってるみたいだけど、少なくとも俺にとっては女として見るに充分なんだよ。ミデンの価値観じゃどうかは知らないけど、でも価値観なんてものは個人の物でしょ?」

「ミデン……え? やっぱ、近界民……ですか?」

「え、今更そ?」

確かに男には、アフトクラトルの角付きのように明らかなミデンの人間との差は見受けられないが、今まで自分をただの痴漢とも思ってたかのような千佳の態度に男の口からこの日何度めかの苦笑が零れる。

「いや、ここでそんな質問って、豪胆というか、マイペースというか……まあどちらにしても俺好みの女だよ、チカは」

「ふあっ!?!」

そしてそのまま不意打ちで頬にキスをする。言葉か、感触か、そのどちらかに嬌声を上げさせられたのか千佳にも分からないまま、男が千佳を自分のものにするべく、ベツトの徴収を始める。

「やめっ」

「やめない。ますますチカを俺のものにしたくなつたから」

「そ、そんな……」

ふに、こりこりこり、ふにふに

「えやう♡ んいいいい♡ やあつ、これ、違うう♡ さつきと違うう♡」

その徴収は部位自体は同じの責めでも、摘んだり弾いたり吸ったりといった「引き」の責めではない、乳首を中心に千佳のおっぱいを全体的に愛撫し、圧を与える「押し」の責め。

とろけたバターをフライパン全体に広げるような、先程まで散々にイカされて燻っていた千佳の身体に再び火を入れる動きは、されど先と異なり優しさを感じるもの。ゆつくりと、千佳の身体がまたも快楽を受け入れ始める。

さすさす、ふにふにふに、くにつくにつ

(やだあ、この動き……奥が、きゅんきゅんするう♡)

「チカ、キスするね?」

「ふむっ!? んふう♡ んふうっ♡」

唇をまたも塞がれ、鼻からしか漏れなくなった息が、それでも千佳の昂ぶりを示す色を宿す。

続いて差し入れられる舌は火箸のようなものだ。すでに火入れの済んでいた千佳という火鉢の中を攪拌して、性感という名の火を大きくする。

燻りは舌のくすぐりによって容易く燃え上がり、その熱が千佳のおまんこを腫を再び蕩かせるのに時間はかからなかった。

未成熟なおっぱいを堪能していた男の手が下腹部へと伸び、千佳の無毛のおまんこへ触れれば、その証左のように彼の指を愛液が濡らす。

くちっ

「あっ♡ だめっ♡」

「そのだめっつてさ、気持ちよくなってるの知られたくないっという『駄目』でしょ?」

くちゅっ、つぶつぶぶぶ、ずにゅっ

「んああああああ♡ 入っつてえ♡ いひあん♡」

「もうバレバレなのに、まだ意地を張れるんだね」

男の指二本は、先までよりも抵抗なく千佳の膣内へ侵入を果たし、その狭い門を開くべく、少しずつ少しずつ広げるような動きを加え始める。

くちゅくちゅ、くぶっ、くぱっ、くぱあ

「ひああ♡ りやめっ♡ なんね、こんな♡」

「え、解さないと痛いって聞くし」

「いたくて♡ いひい♡ いいの、にいつ♡」

「そしたらチカ、言い訳できちゃうでしょ。とことん気持ちよくさせるから覚悟してね」

言いつつ、首筋へとキスを与え、しかしおまんこの開発も止めない。

「ふああああああ♡ やさしくしないれえ……♡」

「駄目、する。チカでさえチカを優しくしてあげない分、俺がするって身体に教えてやる」

「やああああ♡ そこっ、らめなとこっ♡」

男の指がまたもGスポットを責め始めると、千佳もまた前と同じようにいやいやと首を振って拒絶を示す。前と違うのは、やはり男の触り方が絶頂に導くような激しさを持たないことだ。千佳の快感の波を次第に時化らせるように、緩く擦りつつたまに軽く捏ねるような動きで千佳の感覚を攪拌していく。

その徹底して千佳を気持ちよくさせるためだけの責めは、快感以外のところでも千佳の脳を蕩かせ、あつという間に千佳の身体の準備を終えようとしていた。即ち、男の肉棒を迎え入れるための。

「んひ♡ んやあ♡ やあ♡ んきゆううう♡ ひあやん♡ りやめ♡ もうやあなのお♡ できちやう♡ えつちの準備い♡ れきちやうう♡」

「おっと」

そして、男の指や舌の動きがピタリと止まった。

もう間もなく千佳が絶頂しそうになっているのを感じ取ったのだ。そして、それまで

の千佳の可愛らしすぎる反応だけで、男の剛直は再び臨戦態勢を取っていた。

「千力、えっちの準備できちやったよ」

「ふえ？♡ ひやあああ♡」

千佳の膝を抑えて脚を開かせ、おまんこをさらけ出させる男。ピトリ、と男が己の竿の先端を千佳のおまんこに充てがう。ビクビクと脈打つ熱を持った肉の塊が、男の象徴が、自分の女の部分に迫り、あまつさえ侵入を試みようとしている。

「ふわああ♡」

そのことを認識した瞬間、千佳の背筋に拒絶とかけ離れた震えが走り抜けた。

それだけでなく、僅かに腰を浮かせ、男のちんぽをおまんこでお迎えしようとさえしてしまふ。

ちゅっ、と千佳の膣口と男の鈴口がキスをし、千佳おまんこが男のちんぽを味見するかのように僅かに吸い付いた。

「あんっ♡ これはあ♡ ちがうのお♡ ちがうからあ♡♡」

そして、自分の恥態を否定するのも最早言葉の上だけの形骸と化していた。言いながらも千佳の火照りきつた身体は腰を落とすこともせず、おまんこは男のちんぽにちゅうちゅと吸い付くのをやめない。

「……………っ！」

流石に、男の理性もここで限界だった。

「チカっ！ 貫うぞ、君の処女を。お前の初めては俺のものだっ！」

「だ、だめっ♡ んっぎいいいいいい！♡」

男がそのまま腰を進め、水音がわずか立ったかと思うと、千佳の発情おまんこは大した抵抗もなく男のちんぽを受け入れた。

指よりももつと太いそれは、あつという間に千佳の最後の防壁——処女膜に届き、その抵抗を意にも介さず千佳のおまんこの奥へと突き立った。

「んいいいい……いい、いた、いい……♡」

破瓜の痛みに身を震わせる千佳ではあったが、その奥の情欲は決して消えていない。

丹念にほぐされた膣の内部は、その痛みを早く和らげ更なる快感を貪りたいかのように愛液の分泌を増し、膣壁は入れた瞬間こそギチギチに固まっていたが、指で教え込まれたことを反復するように千佳の呼吸に合わせて男根を徐々に締め付けから解放し、あまつさえ圧までもを与え始めた。

表情だつて、一息に処女を散らされた痛みから目の端に涙こそ浮かべているものの、瞳の奥の蕩けた雰囲気は消えていない。

（うおおおおおおおおおおお！）

一方、男は感動していた。千佳の処女を奪い、この手で女にしてやったこともそうだ

が、何より千佳のその名器っぷりに。

納めて初めて分かったことだが、入り口はきつく締め付けてくるのに奥へと誘うような動きを持ち、それに従って奥に行くにつれふつくらとした締りに変化しつつも褌が絡みつくようにチンコに吸い付いてくる、巾着とミミズ千匹を併せ持つかのようなおまんこに、男は挿入直後からイクのを我慢するので精一杯だった。

三こすり半などというレベルではない早さで処女に射精させられては男のプライドとして許せない、割と必死に我慢していた。なお、男にとつても千佳が初めてであることはどこかに放り投げている。

処女喪失の衝撃から千佳が回復するまでの間、男も千佳も互いに目を見開いて、下半身に集中していた。

ついでに男は同調作用を今度は逆に作用させ、千佳の痛みを感覚としてある程度引き受ける。

(つくおとおおおっ!? いってええええええ!)

男性が経験し得ない類の痛みを味わって内心絶叫する男。お陰で射精感が遠のいてくれたのは目論見通り。萎えなかつたのは運が良かった。

作用のおかげで破瓜の痛みが徐々に薄れ、痛みへの反射で蠕動していた千佳まんこの動きが緩やかになっていき、男の方に若干余裕が戻る。

対して、挿れられている側——処女を奪われた千佳の側には、そこまでの余裕はない。破瓜の瞬間など、一瞬であったがかなりの激痛に襲われ、痛みが引き始めた今だって、男と千佳の持ち物のサイズ差からくる圧迫感が千佳を苛み続けている。

なので、千佳は気づかない。

破瓜の痛みがありつつもそれが普通よりありえないほど早く引き始めていることにも、圧迫感の原因はサイズ差も然りではあるが、自らの膣がきゆうきゆうと男の逸物を締め付け始めているからであることにも。

暫く男が千佳への観察に終始していると、浅く激しく上下していた胸の動きが徐々に落ち着きつつあることに気づいた。目からは力が抜け、焦点がまた合い始める。

「ふあ……んむう!？」

「ちゅっ、れる……んはっ、チカ、女になった気分はどう？」

そこですかさず唇を奪い、口内を軽く舐め回してから離れ、見つめ合う形で千佳の視界と心の向きを独占する。途端に真っ赤になる千佳。

「ど、どうって……いっ！」

「まだ痛いかな。じゃあ、もう少しこのままいようか」

答えを聞くでもなく、試しに少し腰を動かしてみると、流石にまだ痛みが走るらしい千佳を労るように、繋がったまま腰を動かさずに抱きしめる。

(ふぁ……あつたか、い……)

「痛かった?」

「……………いい、痛かった、けど、段々、痛くなくなつて、る? あやんつ、耳やめえ♡」

「はむ……チカは耳も柔らかいね」

また男は千佳に問うておきながら答えの前に千佳の耳たぶを食んだ。ぞわぞわとした、しかし悪寒ではない寒気が千佳の身を震わせ、それが千佳に入ったままの男の陰茎に伝わり、肉棒が僅かに跳ねた。

「んひい!♡」

「あれ、チカ、今……」

それへの反応として千佳から引き出されたのは、痛みへのもではなく、もう聞き慣れた快楽からのもの。

どうやら千佳のおまんこは膣内の形状のみならず順応性も優秀らしい。持ち主の快楽を引き出さんと、急速に痛みより快楽を優先させ、中に侵入してきた肉の棒が千佳のための性具であると千佳に教え込もうとしている。

それを理解した男は、ホールドを解き、千佳の膝に再び手を添えてほんの少し腰を引いた。

ずるっ

「いつ、んくふううう……♡」

そのわずかな動き。男の力りが膣壁をちよつと擦っただけ。それだけで、並の少女であればまだ痛みを感じるしかないだろうこの状況の千佳の口から吐き出されたのは、紛れもなく嬌声だった。口を閉ざして必死に漏らすまいとしているが、そこに籠もる熱がほんの数分も経っていない程度前に感じていた苦痛よりも、性的快感が勝っていることを雄弁に語っている。

「やっぱりチカはえつちだ。もう気持ちいいんだね」

「違つ」ずぶ……「うううん♡」

否定の声も、男がもとの位置に戻しただけの動きで封じられる。

（なんでっ!? いたいのにつ、いたいのにい!♡）

痛いのが気持ちいい、というわけではない。流石にそこまで逸脱できるほど千佳は常識を逸していない。痛いよりも気持ちいいのだ。身体が、もうこの男から与えられる快楽に屈しているのだ、と思わず脳裏によぎる。

もちろん、この痛みの引きも男のトリガーの効果によるところが大きい。ある程度同調のコツを掴み始めた男が、自分の性的快感や興奮を千佳へ意識的に流し始めたのだ。その上で、そんなことを知らない千佳へと男のこんな言葉が届けられる。

「いいこと教えてあげる。普通の女の子はね、初めてだともっともつと痛くて、しかもま

まだまだ痛みは引かないんだよ」

!!!

千佳の目が男の目を捉えて驚愕に見開かれる。信じたくないという様子はありありと伝わった。千佳には分からないことだったが、喪失の痛みには個人差もあるし、そもそも大概の女性は初体験で気持ちよくなつてなれないのが普通だ。

つまり、千佳の体の敏感さは、いくら本人の資質があつても異様さを感じるほどになり過敏だということ。しかし、それが起因しているのが男のトリガーによるものだと分からない千佳には、自分の身体が男の言うとおりのやらしいものなのだと思うされてしまう。

「う、うそ……」

「嘘じゃないよ、こうやって」

ぐぐぐ

「んんっ♡」

「ちよつと動かすだけでほおらえつちな声だ」

男のペニスのカリ首が千佳の中身を擦ると、意図せず口からは喘ぎが漏れてしまう。

痛みはある。痛みはあるのだが、指とはまるで違う感触が己の中で蠢くたびに、千佳の奥底からやってくる快樂がその痛みを塗りつぶしていく。

「ほら見てチカ。繋がってるところ。この赤いのが千佳の初めてが俺のものになった証で、もうピンク色になってる繋がってる部分のが千佳がえっちだっという証だよ」

男に後頭部に手を差し入れられ、首を持ち上げられて結合部を見せつけられる。まず目につくのは痛ましいほどに広がった自分のほとに男のものが突き立っている光景。次いで、男の陰茎。それにコントラストを描くように、赤い液体が付着している。ペニスの中程当りから赤く、千佳の中に収まっている辺りだけほのかに色が薄く、ピンク色になっていた。

「これ、千佳の気持ちよくなったときにびゅっびゅっ出てちやうお汁と混ぜったから薄くなっただよ？」

「いやああ……♡ えっちなこと言わないでえ♡」

「まだ認めないか、ほら」

っぶっっぶっ

「んっ♡ んんう♡」

男が腰をわずかに動かし始める。強烈ではない、しかし紛れもなく与えられる快感が千佳を責め始める。

「んあっ♡ らめっ、うごかつ♡ うごかしちゃあっ♡」

「でも、チカのおまんこはちゅうちゅう吸い付いてきてるよ。もっとしてっっておまんこ

が言ってる」

「言ってるないっ♡ そんなのお♡ あんっ♡ あっ♡ 言ってるないんからあ♡」

いつの間にかちゅぷちゅぷと水音を立て始めたおまんこを、浅い部分で男がこすり続ける。千佳の僅かにざらつきのあるGスポにカ리를擦り付けるだけでとんでもない気持ちよさが男を襲う。やがて、結合部から見える出し入れのグラインドは少しずつ大きくなり、赤の交じる液体がひつきりなしに千佳のおまんこから漏れ出すようになった。

男としても、正直この膣穴をめちやくちやに突いてやりたい衝動に駆られるが、そんなことをしては千佳に自分の中の淫靡さを認めさせるのは流石に無理だという自覚があるから、今の動きで現状は満足だった。というか、トロツトロの千佳まんこは入れているだけでも男のペニスを気持ちよくしてくれる優秀なおまんこであり、むしろこれ以上の刺激を受けると即射精しかねない。

まずは千佳を一度は中イキさせてから、同時に射精したいと気持ち悪いことを考えながら、千佳のより気持ちいいところをちんこで探る男。そのせいか単純なピストンの動きは次第に円を描いたりカリで引っ掻いたりを意図的に行うようになり、そのたびに男の下で千佳の腰が震える。

「んっ♡ ひやめっ♡ しょこっ♡ ごしごしするのらめっ♡ んひい♡ ぐるぐるしゆるのりやめえっ♡」

「はあっ……すごっ……チカの、おまんこっ……最高だ……」

「やらあ♡ にゅぽにゅぽとめてえ♡ んうっ♡ んはあっ♡」

千佳のGスポを捉えつつ、次第に次第にキツキツの膣内を自分の形に広げるように、緩やかなピストンを男は続ける。男のその動きに、千佳のおまんこは千佳の意思とは別の意志を持つているかのように、積極的に順応しようとしていく。

突き入れられた瞬間に溢れた真紅は、愛液と混じり合うことで徐々にその色を薄め、結合部からはそれよりもピンク色の膣肉が、ほんのわずか引っ張り出されてしまっている。

男が奥へと進んでいるのか、千佳が迎え入れているのか、あるいはそのどちらもだろうか。互いの性器は互いの性感を高め合うように卑猥な音を立てては、男の息を荒く、千佳の息を甘くする。

この間も、同調作用は男の快感に作用し、信じられないほどの気持ちよさを容赦なく千佳に流し込んでいる。

(いやあ♡ えっちじやないの♡ わたしえっちじやないのに♡ どうしよ♡ きもちい♡ きもちいよおおおお♡)

「やあ♡ んふうん♡ んひっ♡ んひっ♡ぞりぞりもらめっ♡ もうやらあ♡」

「はあっ、はあ、チカっ、可愛い。感じて顔可愛いっ」

「いやあ♡ 見ないれえ♡ 見ながらぬこぬこ♡ らめなのっ♡ こんにや顔見ちやらめにやのお♡♡」

自分がきつととてもだらしな顔をしてしまっていることをぼんやりと理解して、恥ずかしさから両腕を交差して顔を隠す千佳。しかし、男は千佳の顔が隠れることを許さず、膝の上の腕を千佳の両手首へと移動させ、その両手を強引に開かせる。

「顔隠しちゃだめだよ。おまんこと一緒でとろつとろになつたチカの可愛い顔、もつと見せて」

「らめえ♡ かわいくないからあ♡ 見ちやらめなのお♡」

「そんなことを言う口は塞いじやうからね」

「ふむう!?!♡ れろお♡ んちゆ♡ んちゆ♡ にあ♡ んふうう♡ ぷはっ、らめれう♡ れるれる♡」
ちゆうーもらめえ♡ お口の中ぺろぺろお♡ りやめえ♡ んむう♡ ちゆぱっ♡

そのまま、濃厚なキスで唇を塞がれ、またも差し込まれた舌が慣れた調子で口内を蹂躪する。

そして、男が千佳により覆いかぶさる体勢になったことで、男の腰のグラインドが意図せずして深くなる。

結果、

ずにゆうっ

「んおっ!? ～～～～～～～っ、!♡♡」

それまでGスポを擦り続けていた男のペニスが、千佳のポルチオまで一気に到達してしまっただ。

その瞬間、千佳の脳にスパークが走り、先程ぐつちやぐちやにされた時と同等か、もしくはそれ以上かという快感が全身を駆け抜けた。

背中を仰げ反らせ、声なき声を上げる。絶頂の快感の大きさは先に経験していたが、ポルチオによる中イキのそれは質が異なっていた。

先程のが打ち上げられるような絶頂ならば、これはまるで深く深く、どこまでも沈められていくような絶頂。本能がよりこの気持ちよさを求めて身体を動かすレベルの、中毒性のより高い快楽が全身を捕まえているような感覚。

気持ちいいところを全部知られた? とんでもない。自分の中の淀んだものすべてが白く塗りつぶされるような、幸福感さえ感じるこの気持ちよさを知ってしまった。「少なくともこの感覚を味わっている間だけは、何もかもを考えなくていい」ことを。

千佳のおまんこは絶頂をさらに求めるかのようにペニスをきゆうきゆうと締め付けている。もつともつと、千佳自身をめちゃくちゃにして欲しいと催促している。

「ぶはっ……チカ、すごくイッたね。……あらま」

男が千佳の絶頂に合わせ、舌を千佳の唇から離し、その顔を至近距離で見ると、目を剥いて、口を金魚のようにパクパクと開閉している。もう何度目かのその意識を手放した状態を見て、しばらく戻つてこないかもしれないな、と男はぼんやり考え、千佳のイキマンコの感触をしばし楽しもうと思考を切り替える。

ついでに千佳のちっばいに手を伸ばし、やわやわとそつちも楽しみ始めた。

しばらく、それをしてしていると、次第に千佳の意識が戻ってくる。

「……………」

「あ、おはようチカ。気分はどう?」

男がそれに気づいて声をかけるが、千佳からの反応はない。ひよつとしてやりすぎたかとも思ったが、千佳の目を見ると、虚ろというわけではなく、そこに意思の光はしっかりと見て取れる。

「……………」

「ん?」

やがて、千佳の口から言葉が零れた。

「……………」

同じく、涙も。もう解らなかつた。唐突に現れて、突然いたずらされて、途轍もなく気持ちよくされて、途方もなくイカされた。千佳の体を好き勝手に弄び、穴という穴に

侵入された。千佳の初めてを土足で踏みにじって、千佳の本心に土足で入り込んでくる。

「君が何でそこまで自分を顧みないのか、俺には分からない。分かるのは、君が弱い部分、自分自身を否定する部分があることを自覚しているのに、それに負けない強い意志を持つてる女だっただけだ」

「……なに、それ……わたし、そんないい子じゃない……」

「良い子なんて言っていない。いい女って言ったんだ。自分の中に目を背けたいものがあった、でも背を向けない強さは、俺にはないから。だから、君が欲しくなった」

「そんな……いい女でも……ない……ないんです……」

「チカが自分をどう思っていたとしても、俺にとっては君はいい女なんだよ。もうご存知だろうけど、俺は身勝手だから」

「なんですか……それ……」

しかし、誰にも話したことのない自分の弱さに、気づいてなお肯定を返してくれる。最低の人間が、最低の口説き文句で自分のものにしてしまうとしてくる。

「わたし、本当に貴方が言うような強さなんてないんです……だって、わたしはズルいだけ……」

「チカがズルいなら俺どうなるのさ」

「違うんです……わたしは、怖いだけ。自分が誰かを傷付けて、それを他の誰かから責められるのが、怖いだけ……わたしは、誰かのことを口にしながら、自分が傷つかないことを……自分のことだけを考えてる……」

それなのに、その最低の人間は、千佳に価値を見出している。千佳にとって最低の間が、千佳にとって最低の人間を、最高だと言ってくる。

だから吐露した。今まで抱えていた千佳の昏い部分を。自分の恐怖から目を背ける言い訳に他人を使うだけの浅ましい人間なのだ。

「何言ってるの？ 結局それって、チカが優しいってことだよな？」

「……………へ？」

しかし返された男の言葉に、間の抜けた声が出た。

「チカ、根本的に勘違いしてるけどね、人間なんて君が思うほどキレイなもんじゃない。君は傷付けるにしろ傷つけられるにしろ、そこに『自覚』が無いのを怖がってるんだ。無自覚に傷つけること、無自覚に傷つけられること。それを思っただけで涙を流せる君は、少なくとも優しい人間だ。傷つくことなく傷つけられる人間よりよほど上等だよ」

とんでもない暴論だった。世界を二色でしか見てないような理屈だった。しかし、千佳にとって、そんなものの考え方そのものが、眩しく見えた。

「だから大丈夫だよチカ。君は別に悪くないし、重ねて言うけど俺にとっては魅力的な

んだよ。容姿も、考え方も、本当に俺だけのものになってほしいほどに」

とんでもない口説き文句だった。千佳の気持ちなんてお構いなし。だが、千佳は今までも自分を他人から求められたことも、ここまで無条件に肯定されたこともない。「それでもし君が俺のものになつてくれるなら、俺は俺の力を君のために使うこともやぶさかじゃない」

さらに男は、取引めいたことを口にする。

「俺のトリガーの能力を使えば、友人の方はどうか分からないが、いなくなつた君の兄を探すことは不可能じゃない」

「……」

その内容が、あまりにも大きな衝撃を千佳へと叩き込んだ。目の前の男に、兄を探す術があるという。それは、たとえ悪魔との契約であつても千佳が千佳であろうとするなら断れはしないもの。兄を失い、責められる恐怖から逃げた千佳に、卑怯な自分を否定したい千佳自身が繋いだ鎖が、男の言葉を拒絶させてくれない。

「俺のトリガーの能力を使えば、界を渡ることができる。実際俺はそうやって門を開くことも、遠征艇を使うこともなく、こうして君のトリガー内の疑似空間にさえ入り込んでみせた」

「……………」

だが千佳は頷くこともできない。自分がどうなるかではなく、その取引に応えることは仲間を裏切ることになるからだ。

その千佳の内心を見透かしている男は、その耳に口を寄せて悪魔の囁きを重ねる。

「大丈夫。チカ、君は仲間を裏切るんじゃない。俺にまたこれからめちやくちやにされて、俺のものになって、俺にお持ち帰りされるだけだ」

「……………っ！♡ んんう♡」

囁かれた言葉、そして、ぴくりと己の中で動かされた、入ったままだった男の肉棒。忘れていたわけがない、忘れられるわけがない千佳の雌が、再び顔を出すのは必然。ずっと、自分の裡に目を向けることで目を背けていた自分の中のモノが少し動いただけで、一見冷静さを取り戻していた千佳の瞳が瞬く間に潤んだ。

千佳は思い知る。この男の前では、自分が目を背けていた部分も、自分でさえ知らなかった部分も全部ぜんぶ曝け出されてしまうのだと。

「……………だったら」

「ん？」

千佳の身体から力が完全に抜けて、千佳の裸身が余すところなく男に曝け出される。

呼気が漏れるような小さな呟きに男が耳をそばだてると、千佳は諦念のような、呆れのような、しかし、その中に僅かに期待があると男には感じ取れる声で、言った。

「優しくなくていい。どこまでも身勝手でもいい。もう何も考えなくていいように、わたしを……壊して。自分の嫌なところも、あなたの嫌なところも、見えなくなるくらいに……わたしを、助けて」

男によつて歪まされてはいたが、それでもしなければきつと出なかつたであろう、救いを求める、言葉を。

雨取千佳の場合 その5

くたあ、と、男に委ねるように千佳が全身の力を抜く。よもや千佳からこの段階でこう来るとは思っていなかった男であるが、自分の段取りなどは些事であると、千佳に改めて覆いかぶさってとりあえず唇にむしゃぶりついた。

「んぶう♡ にあ♡ んあん♡ んぶ……♡」

もう何度味わったか分からない千佳の口内が、より甘みを増した気さえする。名残惜しくも唇を離せば、そこに引かれる唾液の糸さえ粘つきを増やしていた。糸にできた玉が、重力に従って千佳の側へと流れていき、それが千佳のふつくらとした唇に触れると、千佳の小さな舌が僅かに顔を覗かせてそれを舐め取った。糸が切れ、線となったそれが千佳の首筋へ垂れる。

「チカ……」

「名前……呼ばないでください……んあ♡」

その光景の淫靡さに、男のモノが固さを取り戻す。名前を呼ばれることに嫌悪感ではなく、危機感を感じた響きの千佳のセリフが、その理性にもヒビを入れていく。

「嫌だ。優しくしないで欲しいんでしょ。チカの嫌だはもう聞いてあげない」

「ああ……♡ そんな、あんっ♡」

男が腰を動かす。男は上手いこと同調を使っていたので、肝心の絶頂はまだ迎えておらず、千佳の温かい膣肉に包まれ続けていたその剛直が硬度を取り戻すのは容易かった。

自分の中で存在感を元通りにしたそれを、しかし千佳のおまんこは先程よりも情熱的に包み込む。圧迫感はあるけど、それは気持ちよさを阻害するほどのものではなくなり、むしろ剛直の気持ちよさをより感じるための密着という様子で、動き出しを今か今かと待ちわびるようにひくひく疼き、男のちんぽをにぎにぎと催促している。

「チカ、行くよ」

「あ、まだまっ」

「待たない」

ぬる……ずぐんっ

「んひっ♡ んあああん！♡」

男は腰を引くと、さつき貫いた千佳のポルチオまでひと息に差し込んだ。

陥落した千佳のおまんこは、先程ほど強くはないが先程よりも遥かに甘い刺激を叩き込まれて、歓喜の声を千佳に上げさせる。

これだ。この気持ちよさだと、千佳がおまんこ脳で再認識する。自分の何もかもを

白く溶かしてくれる気持ちよさ。男のちんぽが与えてくれる雌としての喜び。そんな雄が自分を求めているのだから、さらけ出されたくないわけがないという免罪符。

それらを与えた男は、今度こそ自分の欲望を発散するべく、千佳のおまんこに所有物の証を注ぎ込まんと腰に力を込める。

ずちゅつ、ずちゅつ、ずちゅつ、ずちゅちゅちゅ、ずち…ずんっ！ にゆるうう…：ずんっ！

「んあっ♡ んひぎい♡ あは♡ あんっ♡ あああああ♡ ……んう♡ ひゃあああああん！♡ んああああん！♡」

単純なピストンと見せかけて、緩急をつけて千佳のおまんこを慣れさせはしないと、ひたすら肉棒を叩き込んでいく。教育されてイカされまくった千佳おまんこは、よだれをだらだらと垂らしながらその動きにむしやぶりつく。

「んにゃっ!?!♡ ちくっ♡ ちくびいっ♡ りやめ♡ こねこねしながら奥ずんずんりやめえ!♡」

勿論、立派に性感帯として発達させた控えめ乳首を攻めることも忘れない。摘んだり引つ張ったりするよりは千佳は捏ねられる方がお好きなようで、千佳の色素の薄い乳輪に沿うように動かされる男の指の動きに合わせて喘ぎが漏れる。奥を小刻みに突きながら乳首を緩やかにこねこねされるのがどうやらお気に召したようだ。

ずりゆうううう、くちゅつくちゅつくちゅつくちゅつ

「んふうううう ♡ んんうううん!? ♡ しよこもつ ♡ りやめつ ♡ 手前のしよこ、ざりざりやだあ ♡」

もはや千佳の嫌だは「大好き」の隠語と化していた。Gスポを責められ、後頭部のあたりに快樂によるビリビリを感じる。愛液は脱水を起こしてもおかしくないような量となり、その天然のローションが男の抽送を手助けし、千佳の脳をも快樂に浸していく。ずるうぐちゅうつ、ずるうぐちゅうつ

「んおつ ♡ んおつ ♡ んおつ ♡ んおつ ♡ にやがいよお! ♡ おちんちん、ずるうつてえ! ♡ んおつ ♡」

長いストロークでGスポ経由のポルチオ攻めをしてやれば、ついさつき与えられた中イキの快樂が呼び起こされて、千佳から人の言葉を奪う。辛うじて絞り出した言葉も、ただ自身の膣内を蹂躪する卑猥な肉の棒を讚えるような一言だけ。

男は自分によつて翻弄され、その淫靡さを増し続ける千佳の小さな身体を抱きしめると、より密着させた体勢からより強く腰を叩き込んだ。

ぐにゆうううう!

「ひゅおつ!?! ♡ んやああああああ! ♡」

ポルチオに食い込むように男のちんぽが突き込まれる。千佳は、自分の秘所にまだそ

んな先があることに驚愕し、同時に叩き込まれた更なる快感にのけぞるように艶声の絶叫を上げるが、がっちりと抑え込まれた男の腕がその動きを許さない。

結果、千佳の快楽は身じろぎで紛らわすこともできずに、おまんこから直接、なんの軽減もなく叩き込まれることになる。

「お、っ♡お、っ♡お、っ♡お、っ♡お、っ♡りや、りやめて♡これっ、てよめてえっ♡んお、っ♡」

男が、引きをそこそこに突きを重視した動きに変わる。接合部をみやれば、男のペニスを三分の二まで啜え込んだまま、さらには男がその剛直すべてを千佳に埋め込まんとするような動きをしていることを窺い知れる。

男の身体で誰にも見えていないが、千佳のおへその下辺りは、僅かに膨らんでももとに戻りを繰り返している。男のちんぼが、千佳の小さなおまんこを突き上げる様が、その収まりきらぬ証が、千佳の下腹部にぼこぼこ現れては消えている。

普通なら痛みに耐えかねて泣き叫んでもおかしくない。しかし千佳の優秀おまんこは、持ち主の体の柔らかさを己も持ち合わせていると言わんばかりに柔軟に男のちんぼを啜え込んでいた。

さんざんおまんこに「良きもの」として馴染んだ男のモノだからこそ起きた雄と雌としての相性の良さが、ここに来て千佳の望む通りに千佳に快楽だけを与えまくつてい

る。

「んああつ♡ あつ♡ あつ♡ にやにこれっ♡ しよんなつ♡ こんにやあつ♡
しゅごい♡ もつとがあ♡ もつとがあつらなんれえっ♡ んおっ♡ おっ♡
にやあああ!♡」

いわゆる種付プレスの体勢から男の激烈なピストンが繰り出される。

千佳の膣肉がその度にぐにぐにと形を変えながら僅かに露出する。

縦の動きかと思えば膣口を広げるかのような横の動き、横の動きかと思えば今度は横は横でも膣奥を広げるかのような奥の動き、そして千佳が甘くイクタイミングに合わせて再びより奥を指すおまんこプレス。

ぐっちやずっちや! ぐぐぐっ! ぐちゆうっ! くいっくいっ、ぢゆくぢゆくにゆくにゆく! どちゅっ! どちゅっ!

「んああああああつ!♡♡ はーっ♡ はーっ♡ んお、っ!♡ ーーーっ!
♡ ひあああああ…お、っ?♡ お、っ!♡ んあ、♡ しよれええ♡ んひい
いいいん!♡♡ んぶう?!♡ んえあ…んちゅんちゅんちゅ ♡ ぷはっ♡ んお
、お♡♡ おくうっ♡ おくにいつ♡」

その最中に魂までも吸い出されそうなキスをされ、千佳のおまんこに異変が起こる。密着した二人。互いに汗と愛液と唾液とでぐちやぐちやになり、互いの身体の境界さ

え曖昧になりそうなほど男が千佳を抱きしめてピストンを続けていると、千佳の奥がひくひくと痙攣のような蠢きを見せはじめた。

その蠢きは次第により奥へ奥へと伝わり、共鳴するように千佳の背筋にゾクゾクと快感が走る。蠢きの範囲が奥へと進むたび、うずうずとしたおまんこのざわめきが快感にコンバートされ、脊髄から徐々に脳髄までも上がってこようとする。

その感覚には覚えがあった。先程の深イキの直前に一瞬で感じたそれ。此度は快感が千佳の全身へと浸透するようにじわじわと、しかし確実に上り詰めつつある。

(ああ♡ 絶対だめ♡ これ絶対にだめなやつだ……♡♡ 本心に何の容赦もしてくれないんだあ♡)

そしてそれに抗う術もつもりも最早千佳には存在しない。ただただ、自分の全てを塗りつぶしてくれるあの絶頂がいずれ齎されることへの期待があり、その自覚もあった。つまり、それはもう必然だったのだろう。

くいつ

「んおうっ!!? ち、チカ!?!」

千佳が、わずかに自由になる範囲で腰をくねらせる。その動きに釣られるようにうねる膣肉が男のペニスを左右に上下に搾り、男が驚きを顔にする。

くいつくいつ

「あはあ……♡ もっろ♡ もっろお♡ しゅごいのください♡♡♡ んちゅ♡」

もう己が何をしているのか分かっていないのか、より気持ち良いところに男の亀頭を誘うようにお尻を振り、あまつさえ千佳から男に口付ける。

その瞬間、

ぐちい……とんつ

「うあ……これっ……」

男の亀頭が今までほんのわずかに届いていなかった何か届いた。否、届いたのではない。「何か」の方から近づいた。膣口とはまた違った亀頭に吸い付くそれに、男は瞬時に思い至る。

ポルチオのほんの少しだけ先、子宮口そのものが、男のペニスに吸い付いている、と。下りてきたのだ。固かったポルチオがほぐれただけではない。千佳の屈服に少し遅れる形で、子宮を下ろし、身体の奥底までも男のモノになってしまふ準備をおまんこが整えたのだ。

それは初潮——生理の様な性徴としての女への過渡とはまた質を異にするものだった。千佳の身体が、いま交わっている雄に孕まされてもいいから、もつともつと性交に耽りたいという雌の本能からの機能。最も奥で、最も直に、最も気持ちよく男の精を受け入れるための機能。

男がはっと千佳の顔を見る。

目が、合った。

千佳もまた、それに気付いた。

とろんとした眼で、眦が下がって。

口元がぴくりと、少しだけ弧を描いた。

顎が微かに下がった、気がした。

少なくとも、男にはそう思えた。頷きだど。

男の理性のタガが、外れた。

「う、うおおおおお！ ちかっ、ちかあっ！」

男は身体を思い切り起こし、千佳の足首を掴むと、そのまま左右に大きく広げ、思い切り腰を突き入れた。

ずんっ

「っ！——かひゅっ……んおおおおお!!♡♡」

最奥に今までで最大の衝撃を叩き込まれて、千佳の息が一瞬止まり、ちんこで肺まで押し込まれたかのように数瞬遅れて息の塊が漏れ出る。

男はそこで止まらない。千佳の息が漏れたか漏れないかまで待ったのさえお預けだったとも言わんばかりに、これまでで最速のピストンを千佳のおまんこに繰り出

す。

ドツチュ！ ドツチュ！ ドチュドチュ！ ドツチュ！

「お、んっ♡ お、んっ♡ お、んっ♡ お、んっ♡ お、っお、っお、っお、っ♡♡
お、んっ♡♡」

「くそっ、チカっ！ もう収まらないからなっ！ 出してやるっ、チカのっ、いちばんっ、奥っ！ 俺のっ、子種っ、出すからなっ、チカあっ！」

「はっ♡はっ♡ らしてえ！♡ いっぱいい、わらしがあ！♡ らんにもかんがえられにやくなるくりやいっ♡ こわして♡ きもちよくしてえっ！♡♡ んああっ♡ あしいっ♡ ぐるぐりゆう！♡♡ ああああ！♡♡♡」

千佳の足首をレバーのように動かして、単順なピストンをいろんな所に当たるようにしながらも、男に最早停止の考えは存在しない。あるのはただ、この可愛い生き物の雌穴に己の精子を叩き込んでやる、それだけ。

グラインドは深く、強く。膣口、Gスポ、ポルチオを経由して子宮を押しつぶさんばかりに。

時には深いところを重点的に攻め、慣れる前に浅いところ。先程は計算ずくでしていたことが、本能任せの乱暴なそれに変化し、だが千佳はそれを全て受け入れ続ける。

「いいのかっ、チカっ！ これセックスだぞっ！ 出したら赤ちゃんできるんだぞっ！

俺とのっ、俺とチカとのっ！ 子供ができるんだっ！」

「あひいいいい♡ ざりざりしながりや♡ そーゆーの♡ いっちやらめえ♡ おもっちやうからあ♡ れきてもいいておもっちやうかりやあ！♡ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ♡♡♡♡」

あまりにも脳に来る言葉を千佳が吐き出し、男のピストンがやおら勢いを増す。

髪を振り乱して、手は頬に当てて、駄々っ子がイヤイヤをするような仕草をしている千佳。だがそれはもう正しく駄々っ子のようなもので、イヤイヤするのは現状を停滞させようと必死になっているに過ぎない。来てしまふ。来てしまつたら終わってしまうのだ。この快感が、止まらないピストンが、千佳をまつしろにしてくれるセックスの時間が終わってしまったのだ。イヤイヤは男の言葉を否定するものではなく、この時間から離れることへの拒絶を示していた。

「んっ♡ん、っ♡ にゃあああああ！♡ ぎやまん♡ れきないいい♡♡ 止まらにやいよお！♡♡ じゅぼじゅぼしゅごいよお！♡」

「どうだっ！ きもちいいかつ！ いまチカをきもちよくしてるのはなんだっ！ 言つてみるー！」

「んうううう♡ やらあ♡ しょんなの、いえないひいつ!?!♡」

「言わないと止めるぞっ！ 動くのやめるからなっ！ いいのかっ、チカっ!?!」

「やあつ♡ 止めつ♡ ちやつ♡ らめえ♡ 今あつ♡ 止められたら♡ あんつ♡♡ おかしくなつちやうかりやあ♡」

「なら言つてみる！ いまチカのどこに何が入つてるのか言つてみるつ！」

「ああつ♡ おちんちんれしゅ♡ おちんちんがあつ♡ やんつ♡ ああつ♡ わらひのおまたに♡♡」

どちゅどちゅどちゅどちゅうつ！

「あああああああ！♡ なんれ!?♡ なんれろちゅろちゅすりゅのお!?♡♡ いてるのにひい!?♡ ちゃんとゆつてたのにい!♡♡」

「嬉しいくせに嫌なフリはもうやめろつ！ さつき教えただろつ！ おまたじゃないだろつ！ ほらつ、止めるぞつ！ すぐ言い直さないと止めちやうぞつ！」

「ああああん!♡ おま♡ おまんこお♡ おまんこにいいいん!?♡ おちんちんがずぼずぼしてりゅの!♡ わらひのあたま♡ まっしろにしてくれりゅのお!♡♡」

「よーしつ、よく言えたなつ！ ご褒美だつ！」

トントントントントン！

男のピストンが奥を深く、小刻みに突きまくる。千佳はその動きにいつかのような背を仰げ反らせる絶頂で応える。

「んおおおおつ!?!♡♡ りやめつ♡ とんとんりやめつ♡ しゅごいのお!♡♡ しょ

れしゅごいかりやあ!♡♡ らめにやのお!♡♡

「くそっ、まだ嘘をつくのはっ、この口かっ! そんな悪い口はこうだっ!」

男は千佳の足の拘束を解くと、今度は頬に当てられていた手を抑えて先刻と似た密着した体勢に戻した。

すかさず、千佳の唇へと己の唇で狙いを定める。

ぶちゅっ、じゅぞぞぞぞぞっ、はむっ、くいいい…

「んむっ♡ んぶうううう?!♡ んにあ…えううう♡」

唇を唇で塞がれて、吸い上げるような熱烈なキスから舌を絡め取られ、甘噛みで引つ張り出される。さながら閻魔大王の裁きのように、駄目だ嫌だと嘘を吐き続ける千佳の舌を挟んで弄ぶ。

「ぶはっ…:…ほらっ、まだまだ終わらないんだよっ! チカのお望みどおりになっ!」

あっさり舌を離すと、ふたたびおまんこへの攻めが激しくなる。奥に突き入れるのではなく、今度は押し付けける動きで子宮口を攻められる。

後ろから見るものがいれば、男の尻がぐいぐいと動く度に、千佳の足の爪先がびくびくと震えているのが分かるだろう。

「にやあああああ!♡ ぐりぐりい!♡ しょれはもつとりやめにやのにい!♡♡んむっ!?!」

「んちゅ……れるれるろ、ふう……ほらほらっ、キスされたいから嘘つくのか！ えっちめっ！ チカはえっちだ！ えっちなんだよ！」

「ぶはあんっ♡ ぐりぐりしにやがら♡ キシユらめえ♡ ほんろに♡ きもちくなっちやつてりゆかりやあ！♡」

「ほらっ、ほらっ、こうだろっ!? これが好きなんだろ!? 認める、おまんこ気持ちいいのはっ、チカがえっちだからっ！ そうだな!? 言わないと止めるからなっ！」

「やあっ♡ もうしよればっかりい♡ いたくないい♡ れもやめないれえー!♡」

「わがままかっ！ イヤイヤのあとはわがままかっ！ また口を塞いでほしいんだなっ!?!」

「んむううう♡ れるれる♡ んぶう!?!」

「またも口を塞がれ、しかし今度はピストンをやめない男。男の舌が千佳の口内を舐れば、千佳の舌がそれに絡みつく。男の鈴口が千佳の子宮口を突くたび、千佳のそこは吸い付きを以て応える。」

「じゅるう……じゅぞぞっ」

「れるれる♡ んく……んく♡ ふうう……♡ んんんうー!♡」

「上にも下にも、果ては内にさえ熱烈なキスを繰り返されて、千佳は望み通り「訳わからなく」されていく。これまで通りに、これまで以上の気持ちよさが、ピストンの度に

千佳を塗り潰していく。

唾液の交換にすら容易く応じ、キスなどよりよほど嫌悪が勝るはずの男の唾液を嚙下し、更に男の舌を求めて吸い付きさえ加える。

その一つ一つをこなすたび、男と千佳の背筋には同種の悍気にさえ似た快感が這い回り、水気に塗れた肢体と肢体を擦り付け合い、性器と性器をより深く触れ合わせ、男と女、雄と雌、互いの身体よ溶け和えとばかりに快楽を貪り合う。

やがてどちらともなく唇を離すと、そこにあるのは上気した互いの顔。誤魔化しが聞かないほどに発情し切り、気持ちよさを求めるだけの浅ましい獣と獣。

男の瞳に映る自分の姿を見て、千佳は、

(これが……わたし♡ すごい♡ えっちな顔してる♡ おちんちんでおまんこどちゆどちゆされて♡ 自分でも知らなかった顔してるう……♡)

未だにぐりぐりと奥を指すのをやめない男のちんぽに、とうに陥落していたことを今更ながらに悟った。

両の腕は男に縋り付くように彼の肩に、両の脚は男を離さないとばかりに彼の腰に、それぞれ回されてその身体を結びつけていた。

身体を揺らされて、性器が擦れて、快感に喘いで頭が白くなればなるほど、その結びつきは千佳の方から強くなっていった。

どんなに頭や口で否定しても、千佳の本能が、心が、男とのセックスを受け入れている。

ゆさゆさと揺すられる度に、あんあんとはしたない声が漏れている。

きゅんきゅんと軽くイク度に、きゅうきゅうとおまんこがはしたなくちんぽを搾り上げている。

トントンと奥を突かれる度に、グリグリと子宮口にキスされる度に、あへあへとはしたない顔を晒している。

「んうっ♡ はっ♡ んあっ♡ ひっ♡ ひゃあんっ♡ い、いくっ♡ いくっ♡」

だが、それに対してもう何をどうすることもできない。頭にあるのは、汚い自分を漂白してくれるあの感覚の最大のそれが間もなくやってくるという期待だけ。

膣内を蹂躪する肉の棒、擦り上げるカリ首の感触へ全神経が集中していく。頭の中のチカチカする間隔が狭くなっていき、身体が男の精を待ち侘びている。

「んひ♡ きてりゅ♡ くりゆう……♡ あれ、くりゅよお♡ い♡ いくっ♡」

そしてとうとう、千佳の身体が昇りつめる。雄チンポによるガチイキが襲いかかろうとし、千佳の小さなおまんこは更に収縮し、その襲撃に合わせて深く深く、子宮の中へと精を導いてやらんと蠢きを強くし——

ちゅぼんっ

「ひいんっ♡……………はえ？」

ようとしたところで、快樂の素は千佳の体内から姿を消していた。男がそのちんぽをおまんこから引き抜いたのだ。

我慢汁と愛液でテラテラとしたその剛直は未だに硬度を保っており、男が満足したわけでないことは見て取れる。

思わず呆けた声を漏らした千佳は、昇りつめようとしていた火種が燻りへと転化していくことを感じ、次の瞬間には泣きそうな顔をした。

「え……………なんで」

「……………」

帰ってきたのは沈黙。男は千佳をじっと見つめたまま、動かない。

「どうして……………え、なんで？」

「……………」

千佳が最早焦りを隠そうともせず男へと問う。なんで抜いたのかと。もうちよつとだったのにと。

それにさえ、男は答えない。今までの饒舌さが嘘のように、ただの一言も発さない。

「やだやだ！ してえ！ おかしくなっちゃう！ こんなところで止めないでえ！」

「……………」

その静けさへの恐怖と、このまま終わることへの焦りから、千佳が縋り付くように声を上げる。

「……………」

「どうしてえ……………なんで何も言わないのお……………」

宙にある剛直を求めるように腰をへこへここと動かすが、どうしても体勢的に届かない。そんな無様な姿を見てなお、男は無言を貫く。

「準備つ……………できてるんですよ？ 貴方のおちんちん、気持ちよくなる準備いつ……………」
(ああ……………わたしやっぱり嫌な子だあ……………)

もう分かっている。千佳は明らかに気持ちよくなりたいと、絶頂を味わいたいのだと。他ならぬ千佳自身が理解しているのに、まだ千佳の理性が他人を理由にしようとしていることに、自己嫌悪が過る。

本当は、男が無言な理由だつて敏い千佳は理解しているのだ。だつて、自分は言っていないのだ。言っていない自分がイかせてもらえる訳がないのだ。男は先程放つた自分の言葉を実行しているに過ぎない。

だから無言で待っている。千佳が、その口から、最後の一言を吐くことを。だから入れずに待っている。千佳が、その口へ、最後の一突きを誘うまで。

その証拠に、無言を貫く男の目には、千佳を否定するような意思は全く感じられない。

ただ、待っているだけ。彼女が、男の望んだ虚飾を一切取り払った雌の降伏宣言を行うことを、ただただ信じているだけの目。

歪んでいる、間違っている。千佳の強い意志が未だに辛うじて維持している倫理観や理性は、今からだって男を拒絶するべきだと警鐘を鳴らしている。だが、その大きさは当初に比べれば酷く小さなものへとポリユームを変更していた。

そしてどこまでも歪んだ好意ながら、ひたすらに千佳を肯定し、そしてどうやつても落とすとオスとして求めてくれた眼前の男の眼差しは、意外なことに真つ直ぐなもので、きつともう千佳の身体の火照りだつて見抜かれている。だから、本当にまず千佳の身体だけでもいいのなら、いますぐにまたベニスを千佳のおまんこに突き立てて、めちゃくちゃに腰を振るだけでいいのだ。恐らくそれだけで、今の千佳の身体であればあっさりと陥落するだろう。

(ビクビク………してる………そうだよね、辛いよね………わたしだつて、こんなに………)

そして自分の股の上で硬さを保っている剛直を見やれば、ビクビクと震えるように小刻みに動いている。

自分が寸止めされてこんなにも早くイキたくて疼いて堪らないのだから、男だつて同じはずだと千佳は気づく。本当は今すぐにでもトロトロになった自分の穴に戻つて、ズボズボと気持ちよくなって、中にパンパンになっているだろう精液を吐き出したいのだ

ろう。でも、千佳を待つてくれている。千佳が自分から負け分を支払うまで、強制的に徴収せずに。

(だめ……だあ……わたし、またこの人を言い訳にして、自分を……ああ……でも、もう、無理い)

それに気づいてしまつてはもう駄目だった。「男のためでもある」という免罪符を千佳のズルい部分が作り出してしまった。

千佳が、先程の観念のときとは違う脱力を行う。くたあというような全身の力を零にするものではなく、ふっと、余計な力みだけを、羞恥や倫理とともにするように抜き去る。

「……………どうかした？」

その様子を見て、男がようやく口を開いた。期待があるのだろう、上品とはいえない笑みが口元に浮かぼうとするのを無理に抑えているらしく、比較的端正ではある顔立ちが愉快なことになっていたが、今更それで千佳の火照りが引くほど冷めるわけもない。

「…み、みとめ……ます……」

「何を？」

分かつているのにいまいち踏ん切りを付けていない千佳に先を促すように男が応じる。それに背を押されるように、千佳の唇が動く。

「わたしは……雨取千佳はえつちな子です……突然いたずらされたのに、はじめてなのに、きもちよくなつちやうえつちな子です……」

男は、組み伏せた年端も行かない少女の口から出る卑猥な言葉にゾクゾクとした下卑た悦楽を感じる。それが自分が女にした娘で、ここから先は完全にメスとしての領域に入るとなれば尚更。

「だから、お仕置き、してください……気持ちよさに負けちゃったえつちなわたしを、貴方にあげます……貴方が勝ち取った千佳のおまんこ、おちんちんでいっぱいお仕置きしてえ……」

言いつつ、千佳は腰を上げて、男に見せつけるように大陰唇を己の指で割り開く。くばあ、と擬音さえ聞こえそうなあまりにもエロスを掻き立てる光景。台詞も相俟って、これ以上ないほどにオスの情欲を刺激する。

「してえ……女の子がしちやいけないうことお願いしてるおまんこに……女の子にしちやいけないうお仕置き、してえ……♡」
「うっ、チカあつ！」

千佳の、完全な降伏宣言を男は即座に受諾した。それは最早脳に命令が届くより早く、脊髄反射の如く、千佳が広げたおまんこへ待機状態だった剛直を差し入れる。

ずぶんっ

「~~~~~」

「うあ……さつきよりすごつ……」

挿入しただけで、千佳のそこはこれまで以上の熱い抱擁で男を歓迎した。持ち主の声なき絶叫に呼応するように、男のモノに絡み、締め付け、蠢きでより一層の動きを求めらる。

「行くからなつ、チカつ。次は、最後までつ！」

ぐつちやぐつちやぐつちやぐつちや

「んいいいい！♡♡♡ これえ！♡♡♡ しゃつきよりもふかいひいひいん！♡♡♡ うそうそつ♡♡♡ にやんでしょこまではいりゆのお!?♡♡♡ しゃつきまでいちばんおくらつたのにい！♡♡♡」

千佳が髪を振り乱して、半狂乱になりながら自分の身体の神秘に戸惑う。さつきまでは全て入らずとも奥を小突いていた男の代物を、自分の膣が根本まで受け入れて、なおかつその位置が一番最適に気持ちよくなれる、子宮口へトントンもグリグリも可能な位置だと気づいたのだ。

男の方も驚きだった。千佳の気持ちいいところも弱いところも把握した気になっていたのは間違いだつた。どうやら千佳の女性器は、性を生業にするような者でさえ経験だけでは所持し得ないほどの、天賦の才と言える名器であるらしい。先程吸い付いてき

た子宮口は、まさにお迎えだったのだろう。男のモノを自分はずべて受け入れてやれるのだと、だから遠慮なく貪ってこいという誘惑だったのだ。

たまらず、男の腰の動きも早くなる。一刻も早くこの雌を征服せんと、

「ああつ、チカあつ！ 最高だ、君つて子はなんて俺好みなんだつ！ 俺のために生まれてきたんだつ、君はっ！」

「んんう♡♡ りやからあ♡ おちんちんしながらりやそーゆーことお♡♡ んああつ！
♡♡ とけちやう♡ きゅんきゅんしゆるよお♡♡ んむう♡」

「んっ、れるっ、チカあ……素直になったらもつとえつちになるなんてっ、このえろっ娘が！ おらっ」

「んほおおおおお♡♡ ぐりいって！♡♡ いちばん奥♡♡♡ 強くぐりい♡♡ しゅごい♡♡ ああ、もつとお♡♡」

ばちゅん、ばちゅんと、男が腰を打ち付けるたびに千佳の奥をペニス責め立てる。傍から見れば千佳のおまんこに不釣り合いな凶器が掘削しているような光景だが、今や当の千佳は隠すことも偽ることもせず、それを受け入れ、快楽を享受していた。

おまんこからは白く濁った本気汁がピストンの度にぷしゅぷしゅと吹き出し、辺りの淫臭が濃度を増す。

その香りにあてられるように、男の理性がなりを潜め、興奮をそのまま形にするよう

な体重をフルに利用した種付けプレスを千佳へと繰り出し始める。

どっちゆどっちゆ！ どちゆどちゆどちゆどちゆどちゆどちゆ！

「ん、お、っ♡ん、お、っ♡お、んっ♡お、んっ♡あ、あ、あああああ！♡
 ♡ぎゅーっしてしゅるどちゆどちゆらめらよお！♡きちやうからあ！♡わらし
 らけいつちやうかりやあ！♡♡」

子宮口を連続でブローし、引くたびにザリザリと膣内を扶るカリ太の男の逸物が、暴力的な刺激を千佳に与える。さっきの種付けプレスはただのジャブだったとおまんこに思い知らせるほどの快感に、意識さえ手放しそうになりながら、千佳が思わぬ本音を吐露した。

即ち、「一緒にイキたい」と。

「うおおおっ、チカ！ 今度こそ出すからな！ チカのおまんこの奥の奥に、俺の子種を！」

「あああああ！♡らして♡らしてえ！♡きもちーの！♡にやにもかも、どーでもよくなりゆくらいきもちーよお！♡おちんちんがしゅごいのお!?!♡あにやたがしゅごいのお!?!♡わかんないよお！♡♡」

「俺のものだ、チカっ！ 絶対そうしてやるからな！ お前は、俺の女だあ！」

「あああああ！♡おっ♡おっ♡イク♡しゅ、しゅごいのが♡きちやうよお♡

♡ しよんなこといわれたりやあ♡♡ ん、お、おお♡♡

「好きだつ、チカ！ 君のことが好きだ！ だから貰うぞ！ チカの全部を！ 君は俺に、身勝手に奪われるだけだから！ だから安心して、気持ちよくなつちやつていいんだっ！ セックス好きになつちやつていいんだっ！」

「んひっ♡ にやああ！♡♡ しゆき♡ おちんちん♡♡ ろちゆるちゆ♡しやれりゆの♡♡ せつくしゆ♡ しゆきでしゅう♡ わらしは、せつくしゆすきになつちやういけない子れしゅう！♡♡」

ペニスで突くほどに、千佳のおまんこが熱く熟れていく。言葉で突くほどに、千佳の奥の奥が熱く倦んでいく。

好きだと、歪な好意を真つ直ぐに伝えられて、千佳の女の子の部分が喜びを示す。

奪うと、拗らせた心を解す免罪符を叩きつけられて、千佳の自分が嫌う身勝手さが、正当性を得る。

上がる嬌声は、果たして身体と心のどちらの喜びなのかすらもう曖昧になり、あり得ないことにジャストフィットを繰返すペニスのことしか考えられなくなつていく。

「~~~~♡♡♡♡♡ もうつ、むりつ、いくつ、イクう……！♡♡ やらよお♡ もうひとりでイクのはいやらよお♡♡」

「安心しろつ、一人じゃない！ 独りじゃない！ 俺も、もうつ……！」

「きてえ♡ わらしのいやらしいおまんこれえ、あにやたもきもちくなつれえ!♡♡」
 「くうっ……出るっ、一番奥でっ……」

「ああああ♡ にやかでっ♡♡ おつきく!?!♡♡ らしてえ!♡ わらしのじえんぶ、まつしろにしてえ!♡♡」

「頭もおまんこも、全部真っ白にしてやる! おらっおらっおらっ、トントンキスしてやるぞ! 準備しろっ、俺の精子を受け取る準備しろおっ!」

「んいい♡ ふおお!?!♡♡ あんっ、あんっ、ああんっ♡ トントンいいっ♡♡ もうにやんどもっ、ちっちやくイってるのお♡♡ れもらめなの♡♡ おっきいのがいいのお!♡♡」

突けば突くほどに、千佳のおまんこ男のちんぼの相性がどんどんと良くなっているのか、激的な快感が二人を襲っている。最早男のトリガーの力でどつちに同調したとしても互いが絶頂を迎えるだろうというほどに溶け合う二人の境界。その最後の壁を破らんと、男が千佳の身体を抱きしめ、持ち上げんばかりに密着させてラストスパートをかける。

じゅぶじゅぶと、卑猥な音を立てて二人が交わる。

紛れもないオスとメスの交尾に、興奮した二人はやがてどちらからともなく口づけを

交わし、互いの舌を貪り始める。舌は相手に言葉ではなく、より高い快楽を与える器官として十全の機能を発揮し、舐り合うごとに二人の腰がいやらしくくねった。

そうなってしまうえば、もう長くはなかった。男の腰振りが千佳の最奥に精を放つべくより強く、深くなる。亀頭が、抜くことなど許さぬとより一層の膨張を見せる。

それを感じて、千佳のおまんこも男のペニスを精一杯抱きしめる。互いの性器が互いを離さぬと、身体と同様にぎつちりと繋がり合う。

「うっ、うあっ、チカっ、いく、いくぞっ……！ 君の中に、俺の所有物の証を刻んでやるっ、くらえっ……！」

「うんっ♡♡ うんっ♡♡ してっ、いっぱいして♡♡ あっ、おつき♡♡ でりゅ♡♡ わらしをあにやたのものにしてえ！♡♡」

そして、千佳の子宮がより一段降り、男の亀頭が完璧にその入り口を定めて付き入れた瞬間——

びゆるっ、びゆるるるるるるるう！

「んああああああああ！♡♡♡♡♡♡」

男の精が勢いよく放たれ、千佳の子宮へと降り注いだ瞬間、二人は、同時に達した。

双方にありえないほど気持ちいい、射精による快楽が齎され、千佳はおまんこを、男はちんぽを痙攣させて最大の絶頂を甘受する。

やがて、放出が断続したものになっていく。びちびちと奥に当たっていた奔流が収まる代わりに、吐き出すごとに男の陰茎が千佳の中で跳ね、最後の追撃を与えだす。カリがいいところを擦り上げ、たまらず千佳の腰も跳ねる。同時に射精の終わりを感知取り、どこか寂寥にも似た思いが湧き上がる。

「すげっ……千カ、エロすぎ……っ」

びゅくっ、びゅくっ、と長い射精が終わっていく。最後の一滴まできつちりと千佳に流し込んだのを確認し、男が千佳のおまんこからちんぽを抜く。

精き果てたとばかりに男の拘束が緩み、千佳の身体が少し沈む。

ちゅぽんっ……ごぼお

「んああ……♡♡ しゅごかった……よお♡♡」

そして剛直が引き抜かれたおまんこはぱっくりと開き、そこから白濁した精液が溢れ出る。絶頂の余韻でぷっくりとした大陰唇がぴくぴくと震えている。千佳自身も仰向けにされた蛙のような、または犬が降伏を示すかのような体勢で快樂の残響を楽しんでいる。

(ああ……わたし、もう戻れない……♡)

知ってしまったのだ。メスの一番の性的快樂を。子を孕むための行為がこんなにも気持ち良いということを。

もちろん、千佳ほどの年齢の娘がその花を散らされるに当たり、快楽の虜になることなど普通はありえない。しかし、千佳は男の黒トリガーの同調能力により、男の快楽分まで合わせて徹底的に気持ち良さを叩き込まれたことなんて知る由もなく、同様に、男が自分の波を鎮めるために利用したせいで破瓜の痛みがすぐに引いたことも分かっている。

結果として、男の言葉通り、雨取千佳という少女が、普通であれば痛みが勝るはずの初めての、それも殆ど強姦と言える性行為で絶頂に至るまでの快楽を得ることができ、できてしまった、いやらしい雌であるという証左なのだと思ひこむ。

だがしかし、最終的には浅ましく自分から快楽をおねだりし、腰をくねらせ、奥に浴びた精液で最大の絶頂を味わわされたことで、最早千佳には男を忌避することもできなくなってしまうている。

それならば、せめて、この快楽の波が完全に引くまで、頭が冷静さを取り戻すまでの少しの間だけでも、何も考えない自分でいたいと、千佳はただただ快楽の余韻に浸る。戻れないという自覚も、戻りたくないという内奥さえも、それは全て気持ちよくされてしまった混乱のせいだと、現実目目を背けながら。

驚くべきは、ここまで乱れ、戻れぬ自覚があつてなお、一欠片残った理性が今からでも遅くないから何とか男を振り払えと千佳に警告を発していることである。そうでな

ければ、現実から目を背ける必要もないのだから。この逃避は、だからむしろ自己防衛。一度冷静な自分へ立ち返るまでの冷却期間として必要なものだった。

千佳は自然、火照った体を冷ますべく、まどろみに身を任せようとした。

雨取千佳の場合 その6

「ごめん、チカ」

だが、それを許さない存在が近くにいた。というよりは、男にとつても完全に誤算と言えた事実が一つ。

「俺、まだ満足できないみたいだ」

「……………ふえ？」

予想だにしなかった言葉を理解できず、呆けた声が出る。

互いにとつての一つの誤算。それは、よもやあれほどの到達を経てなお、男のモノの硬さが少しも衰えていないこと。剛直は変わらぬ存在感のまま、そこにあった。

「えっ？ えっ？」

男が悪戯を開始したばかりの時のように、状況を理解できずに目を白黒させる千佳。仕方のないことだろう。まさか目を背けようとした現実のほうを理解不能な光景をしていようとは思うまい。

「はあ……………はあ……………これも、全部チカがえっちなのがいけないんだから……………」

そしてちんぼと同様に目を血走らせて再び男が覆いかぶさってくる。

事ここに至って千佳もようやく理解が追いつく。オスの勃起が収まっていのならば、それは果たしてどこへ納まろうとするのか。

「ひっ……む、むりれす……まら、びくびくおわつれないのお……」

「はあ……はあーっ……ダメだよ、お仕置きなんだから……チ力が終わりにはできないんだよ……」

先刻とは別の意味で身体が動かさせない千佳の片足を持ち上げ、ぱっくり開いたおまんこにまたも突きつけられる男のちんぽ。いわゆる松葉崩しの形を取り、そそりたつペニスを大陰唇に軽く触れさせてから、膣口に充てがう。

片足をホールドされたことで千佳はもう逃げられないが、いま挿入なんてされたらどうなるか分かったものではない。弾けたとはいえ、未だ冷却期間を終えていない快樂の火種は残火として千佳を温めているのだ。

「らめ……♡ らめらよお♡ しよんな……らめ♡」

身をよじり、なんとか男から離れようとするが、絶頂により抜けてしまった腰と、体位的にがちり抑えられた両の足が動かせないため、およそ抵抗と言えるものにはなっていない。だが、千佳は必死であった。今入れられたらマズい、と欠片残っていた理性が最大限に警鐘を鳴らしている。もし挿入を許したら、その欠片さえ砕け散ると、死に際を悟った理性が我武者羅に警告を送ってくるのだ。そうなれば今度こそ、千佳は快樂

に吞まれてしまうと。

しかし、その警告も、身体が二重の意味で落ちてしまっている今となつては遅すぎた。チエツクをかけられてからキャスリングが出来ないように、千佳の理性というキングは既に詰んでいる。

結果——

「そんな、蕩けきつた声でダメダメ言つても——逆効果だよ、つとー!」

どちゅんっ!と、まだ愛液も精液も溢れたそこへ、再挿入はあつさりと果たされてしまふ。

「ふみゆううううううううう!?!?!?♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

さっきのセックスとは違う体勢故に、全く想定外の箇所叩き込まれた男の摩羅が、その隠語の語源の通りに千佳の欲望を激烈に呼び起こした。

先だつての絶頂と同レベルの快楽が性器から脳を突き上げるように迸り、絶叫を上げて達する千佳だが、違う点があるとすれば、男が止まってくれないこと。

ばちゅんっ! ばちゅんっ! ばちゅんっ! ばちゅんっ!

「ぎやうっ♡ あへっ♡ らめっ♡ んぎい♡ きやふうっ!?!♡♡ こえっ♡ こえらめっ!♡♡ んいっ♡ ひいっ♡ ゆるしへっ♡ りやめっ♡♡ こしゆれっ、てりゆのお♡♡ ちぎやうとこっ♡ じえんじえんっ♡♡ しりやないとこ♡♡ らめっ♡♡

♡ んほおっ♡♡ おほほ♡ もどれにやくなりゅっ♡♡ もろれにやくなりゅかりやあ!♡♡ とめへっ!♡♡ とめっ、やめれえ♡♡ おっ♡ もうじゅっといってりゅのほおおお!!♡♡」

千佳が髪を振り乱し、涙も鼻水も垂れ流しになりながら懇願する。火種はどうとう業火となり、千佳の理性を焼き尽くしている。それを知ってか知らずか、男が止まってくれる様子は微塵もない。むしろ荒い息をより荒らげて、その業火を煽り続けるようにピストンを加速させる。

ぐちゅんっ!ぐちゅんっ!ぐりい!ぐりいっ!ばちゅばちゅばちゅばちゅ!

「ひいんっ♡ひいんっ♡あたまっ♡おかしきゆなりゅっ♡♡あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!♡♡やべてええええ!♡んおゝおゝおゝ♡♡わらひのおみやんこっ♡ばかににやつてりゅうう!♡♡おひんひんてよめてへええええ!♡♡♡♡」

小柄な身体をいまできる最大限に動かして何とかこの濁流のような快楽から逃れようともがくが、実際は上半身の、それも胸より上ばかりが激しく振り乱れるばかりで、下半身は全く男から逃れられる兆しさえない。

(ああはあ♡♡ これきつと罰なんだあ♡♡ ずるいわたしが受けるべき罰……なのに、こんなに気持ちいいよ♡♡ お仕置き、えっちなお仕置き、終わってほしくないよお♡♡♡)

そして、千佳の強い意思に支えられた理性の、最後の一寸片にとうとうヒビが入り始める。思考のうちでさえもう自分をごまそうという気さえ消失しつつあることに、千佳自身がまるで気がついていないのがその何よりの証。

「おおおおおつ、チカつ、チカつ……また出るぞお！」

一方、男の方はというと腰を打ち付けるのに夢中で、先程までの敏さは影に隠れ、本能と欲望のままに再びの膣内射精を行おうとしていた。

千佳がその言葉を受けて、なけなしの気概を振り絞って射精に備える。身が動かせぬならせめて気構えだけでも、と千佳の最後の力を動員する。

きつとここで理性を手放さければ、千佳が辛うじて立ち帰れるという最終のチャンスを手放さないために。

「うっ、いくぞチカあ……中に出すっ……また、全部っ、ぬあっ」

びゆるるるるるう！

「んっ♡くうううううん……！♡♡♡」

そこから時を置かずして、二度目の精が千佳の膣内に放たれた。そして、またもその感覚だけで絶頂に導かれる千佳。だが、千佳の反応は絶頂の大ききの割に小さい。

それは迸る精が流石に先程までの勢いを保っていなかったことや、その快感の大きさを千佳が感得済みであったこと、何より、『覚悟』をしていたことが大きい。

男の動きは、今度は射精が終わってさえ止まることがなかった。男の逸物は未だに硬く、千佳の膣内を思うまま蹂躪している。終わりの見えない快樂に翻弄される千佳の理性は、もう限界を迎えようとしていた。

(ああああ……もう無理だあ……わたし、もう無理だよお♡♡)

「ほらっ、次だっ」

「ふえあ?!♡♡」

男が千佳の足の拘束を解き、代わりのように腰をホールドする。繋がったまま尻を持ち上げ、千佳を四つん這いにさせ、後背位を取らせると、すかさず腰を打ち込んだ。

「ばすんっ！」

「!!♡♡♡♡♡♡♡♡」

!!後背位となったことで、チンポの反りがよりの確にGスポットを捉え、打ち込まれた腰の動きに合わせて裏筋がGスポをなだらかに擦り上げつつポルチオに先端が叩き込まれる。先程も食らった責めだが、体勢の違いからくる擦れ方はもう次元が違うと言えるものだった。

ざりい、どちゅんっ！ ざりい、どちゅん！

「おぎゅっ♡♡おぎゅっ♡♡ひぐうっ♡♡ひいひい♡♡こんにやつ♡♡ワンちゃんみたいにな♡♡♡♡かっ♡♡♡きもひっ♡♡よしゅぎ♡♡ざりざりしにやがらおきゅ♡♡

♡ろちゆるちゆ♡♡♡りやめええ♡♡

「コネコネもしてやるからなっ！」

「んほおおおお♡♡♡しよこらめっ♡♡しきゅーこねちやりやめにやのにひいいん♡♡♡やんっ♡♡りやめてよお♡♡」

呂律の回らない口から出るのは、あまりの快感に必死で抵抗するような台詞ばかり。実際、千佳は頭では必死に抵抗しているつもりなのだ。

だが、後背位になってから少しの時点で、男は千佳の変化に気づいていた。些細なことでだが、千佳としてはとても大きな、その変化。千佳の自覚はなく、繋がっている男にしかわからないそれは、ピストンの度により大きくなっていく。

「んおう♡なんれっ?♡♡なんれとめれくれないろお?♡♡んっふ♡くひい♡♡あっあっあっ♡」

だが、その変化をただ指摘するのは躊躇われた。無論善意などではなく、より千佳に自覚を促すために。

よって、男は自分もある変化を加えて、状況をしばし楽しむ事にした。

それはゆつくりと、千佳にそうと感づかれなないように行われる。

男の腰振りが次第に、少しずつテンポを落とし始めた。しかし、千佳に与えられる摩擦のテンポが変わらない。つまり、それがどういふことなのかといえば、答えは明白

だった。

「こしゆれりゆう……♡んはあ♡おちんちんがあ♡♡にやんどもおまんこにキシユしてりゆ♡♡ざりざりしにやがりや♡♡トントンしてう♡♡」

「楽しそうだね、チカ……くう、締まる……っ」

千佳に与えられる快感は、依然として変わらない。男が腰を振る頻度は先程までの半分程度になっているのにもかかわらず。

「たのしくない♡♡きもちよしゆぎてちゆらいのお♡♡てよめへっつていつれりゆのいに♡♡いじわるしゆるのやめへえ♡♡」

「まあ嘘ついてるな、このえろっ娘め」

快樂が強すぎて呂律が回らなくなって久しい千佳は、その快樂の因が男によるものと疑わない。

「うしよなんてちゆいてない♡♡あにやたが♡♡おちんちんとめれくれらいかりやあ♡♡ちゆらいよお♡♡」

「嘘だよ。だつてきつきから、自分で気持ちいいところ探してるでしょ」

「ちぎやうう♡♡わらひしよんなことしてにやいんらかりやあ♡♡んひっ♡♡んひっ♡♡らめらつてばあ♡♡おちんちん、らめえ♡♡んほっ♡♡こしゆれりゆう♡♡」

そして、ひとしきり楽しんでから、無駄な抵抗を口先で続ける千佳にとどめを刺す。

「嘘だよ。だつて……」

「うしよちゆいてにやいい♡♡んふう♡♡ぎりぎりい♡♡」

「もう、俺動いてないもん」

「きもひ♡……………っ!？」

男の一言に、ピタリ、と千佳の動きが止まる。同時に、膣を擦られていた感覚も止まったことで、千佳の顔から血の気が引いた。

「ほらね？」

「……………うそ」

繰り返ししていた絶頂さえ一瞬忘れるほどの絶望が千佳を襲う。自分が動きを止めて、感触が止まったということ、男の言葉が偽りない事実だということにほかならない。

「バックにしてからすぐ気づいたけど、チカ自分で気持ちいいところ当てに来てたでしょ？ 口ではやめてとかだめとか言ってるのに、身体はおまんこもつと気持ちよくなりたくて、俺のおちんちん使ってオナニーしてたんだよ。オナニーってわかる？ ひとりでおまんこいじって気持ちよくなることだよ。チカ、今までそんなことしたこともないだろうに、おちんちん止められた瞬間から、俺のおちんちん使ってオナニーしてたんだよ」

男の言葉が、絶望に苛まれる千佳をより深い谷へと突き落とす。崖つぶちにいた千佳の理性が、粉々に砕け散るように。

「認めなよチカ。心から認めるんだ。おちんちん、気持ちよかつたんでしょ？ 嫌だとか駄目だとか言ってたの、本当は全部気持ちよかつたんでしょ？ もうチカはえつちな女の子から戻れないんだよ」

「ちが……しよんなの……ちがう……」

凝り固まった千佳の殻が、破れるほどに突き落とす。

「違うないよ。だつて」

最後の言葉が届くと同時、

「俺がチカを捕まえてるから、戻してなんか、やるもんかつ！」

追い打ちとばかりにちんぽを突き込まれて、

「んっ、きやアアアアア!!♡♡♡♡♡」

千佳の最後の理性——意地が、砕けた。

ばすんっ、ばすんっ、ばすんっ！

「んあああつ！♡♡ぎやまん♡♡しれたろにい！♡♡じゅつと♡♡してたのにいい！♡

♡」

「我慢なんてっ、してなかつただろっ！腰くねらせてたくせにつ！うらっ、どう

だつ、チカっ！ 陥落おまんこにちんぽぶち込まれてどんな気持ちだっ！」

「しゅごいのお！♡♡わらし♡きもちーの止まらにやいよお!!♡♡もう♡♡もどりやな

くていいによ!♡♡ここによまま♡♡あにやたのにされちやつていろいろお!♡♡♡

「いいも悪いもないっ!俺がつ、君を奪うんだっ!だからっ、君はっ、何も考えず気持ちよくなつちやえっ!もつと素直に気持ちよくなれっ!んむっ!」

「ふみゆうっ♡♡んあ♡れろれろ……♡♡んはあ♡こっちもきもちーよお♡♡ああん♡♡んあっ♡♡」

決壊したダムが水を一気に放出するように、千佳の口から快樂を受け入れる文言が飛び出していく。

顔を向けさせてその口を塞げば、迷いなく千佳の方からも舌を絡めてくる。

ぷくりと勃起して存在を主張する丘の上の二つの突起は、彼女に絶頂を促すスイッチと化している。

おまんこは生殖器として十全の性能を發揮し、ちんぽにむしやぶりについては更なる白濁を飲み込むべく、淫らに蠢いて射精のおねだりを止めない。

言葉で拒絶しても、身体が受け入れている。理性がブレーキをかけても、本能はアクセルを踏み込む。

そんな自分を自覚している。男が腰を突き入れるたびに、女にされていく。ぐちゃぐちゃにされたおまんこが、脳までもぐちゃぐちゃにして、もう思考なんてまとまる筈もなく。

千佳が崩れていく。望み通りに、望まれる通りに。犬のような格好で犯されながら、実は男が腰を止めても気づかないほどに、いわば自分も男を犯していたような現実に気がかされて。

(受け入れちゃった……よお♡)

心が、理性が、とうに男の欲望と千佳の欲望が合致してしまっていたことを、受容した。

ぞわぞわぞわつ

「うおおっ!? ちよっ、なんだこれ!? チカっ!?!」

その途端に、千佳の腰つきが変わる。今まで、間違いなくそれをされたらマズいと理性が逃していた千佳の「本当の弱点」を男に教えるべく、千佳の体の最後のタガが外れた。

膣壁が蠢きを細かくし、千佳の腰のくねりが、奥へ奥へ受け入れるためのものから、力を縦横へ誘う動きへ変わり、男の突き入れに合わせて「そこ」へと手順通りにちんぽを導いた。

膣口の浅い部分からGスポをかすめ膣奥へと至る「男が理解したつもりの千佳が好きな動き」だったものが、Gスポを鈴口で押し付けてから、その奥、AGスポットを弾くように腹側を擦って膣奥へと叩き込む「千佳の本能が本当に望んでいた動き」へと、千

佳自身の意思で変更、否、アップデートされる。

結果、

ずにゆつ、どちゆんつ！

「んきゆううううううう！♡♡♡♡♡」

「ぐうううう！ 搾りつ、とられつ!?!」

びゆるるるるるるるるるるるつ！

男が「射精させられる」という形でその成果が現れた

。自分の意思で吐き出すそれと違い、腰の力が根こそぎ奪い取られるような快感が、今度は男を襲う。精液を、文字通り精魂までも搾り取るかのような蠕動に合わせて、繰り返し繰り返し、最後の一滴まで自らの子宮へ導かんと千佳おまんこがちゃんぽを締め付け、吸い上げ、絡みつき、うねりを加える。

あまりにも唐突で急激な変化に、トリガーの効果を発動させることも出来ずに、為す術もなく射精させられた男の心中を驚愕が満たす。その才能があるとは思っていた。しかしまさか、これほどとは。受動から能動へと変わるだけでいきなり搾り取ってくる腰つきと膣の動きを体得しようなど、想像の埒外も甚だしい。

その蠢きは、男の射精を促し続ける。どうやって飲み込んでいるのか、男の精をごくごくと飲み込み続ける千佳まんこ。明らかにその外観から窺えるキャパシティ以上に

子宮へと納めているのだらう、千佳の下腹部は、ほんの少しだが中に注がれた精液の量を表すようにぼこりと膨らんでいる。

やがて、それにも限界が訪れたのか、白濁がごぼおと音を立てて千佳のおまんこから溢れ出る。それに連れて、男の硬さを失ったペニスもそこから排出された。

「ち、チカ……」

あまりに大量に精を放ったせいか、多少ふらつく頭で、おそらくは自分以上に疲弊しているはずの千佳へと呼びかける男。あれだけ絶頂させられたあとに、覚醒したかのようになり己を搾り取った少女。両腕を交差して、そこに顔を埋めて荒い呼吸を繰り返し、その起伏のたびに突き上げられたままのヒップの半ば——おまんこからこぼこぼとザメンを溢れさせる淫らな姿から、男の射精に合わせてまた幾度もアクメを決めたことが窺い知れた。

そして、当人はといえば——

(しゅぐ)………かつたあ♡ まっしろで、チカチカして………もう、何もかも消えて………色んなもの、モヤモヤしたの………全部………ああ、もう無理だあ………わたし、もうきつと戻れない………だって………もうこの人のこと、嫌じゃ………なくなってる………ずるいよお、こんなのお)

自分の変化を、とうとう受容していた。

その内心にまだ気づかない男は、気をやってはしないかと、千佳へ手を伸ばす。

だが、それより先に千佳がぴくりと動いた。男は安堵し、ほっと息を一つ吐き出す。

だが、今度は男が驚愕に目を見開く番だった。

(もう……どうにでもしていい、どうにでもなっちゃえ)

千佳が、こんな男に好き放題されて、結局は快樂に墮とされてしまった己に半ばやけっぱちな結論を付ける。

「……んあ」

「大丈夫か、チカ……っ!？」

そしてまだ荒いままの呼吸を整えるより先に、ころんと、千佳が仰向けになる。それほどばかりか、股へと手を伸ばすと、中出しされて溢れた男の精液を指に絡め、それを口に含んだ。そのあまりの淫猥さに男が息を呑む。

そんな男に向けて、千佳はそのおまんこを見せつけるように脚をM字に開き、絶え絶えの息で言った。

「わたし……まら、こわれて……ないよ……? ♡ らって……まら、かんがえ、られりゆもの……♡」

「チ……カ……」

最後の、自分へのとどめを。

「らからね……もどれないくらいに……もどりたくなくなるくらいに……あなたのものにしてけれなきや……らめ、なんらよ?♡」

「~~~~~っ!」

おまんこを自ら開き、くぱあと男に見せつけながら自分にも男にもとどめを刺すような台詞を千佳が零した瞬間。すでに吐き出しきつたはずの男のモノが一気に硬さを取り戻す。

自分が女にした少女が、自分のものになるべく挑発をしてきた。それに応えなければ男である意味などないとばかりに。

しかし、この千佳の行動の根幹にあるものに、男は気づいてしまった。いや、気づけてしまった。

千佳の身体は堕ちた。理性も砕いた。だが、ここで千佳がこんな行動を取るといふことは、逆に一つの事実を示していた。『雨取千佳が折れていない』という、その事実を。

「くっ……チカ……だめだ……それは、ダメだ」

「?♡」
気づいてしまったのは、それから目を背けることはできなかつた。先程のようにただ性を吐き散らかすような、荒々しい性交を繰り返したところで、果たして意味はあるのかと、今すぐにでも千佳に襲いかかりたい気持ちを男はぐつと抑える。

ここまで快樂漬けにしても、理性を飛ばしても、まさか折れないとは思わなかった。今だつて眼前でこれみよがしにおまんこをさらけ出しながら、男を誘う台詞まで吐いておきながら、根本的などころでこの少女は「雨取千佳」を保っている。負けてはいる、崩れ、堕ちてもある。だが、千佳という少女が作り上げた「雨取千佳という定義」が壊れない。この挑発だつて、これまで通りに自分を投げ出しただけで、大元は今までと何も変わっていないと男には理解できてしまった。

どうしても、行動の主体を他人に委ねてしまう。ここまで殻を剥がしてなお、自分の外の何かを存在意義にしなければならぬという、雨取千佳のかねてからの自縛が解けていない。

「悔しいな。ここまでしても、チカは……」

「わたしのここ、とろとろらよお♡♡ きもちよくにやりたいってうずうずしてりゅよお♡♡ あなたのおちんちんは、違うのお?♡♡」

つい今しがた搾り取られたときには、ようやく千佳が自分を振り切つて積極的になつたのかと思つた。だが、そうではなかった。ただ単に、あれは自分の中の快樂を認めただけに過ぎず、より強烈な絶頂とより甘美な快感を得たいがための本能的な反応だったのだろう。

雨取千佳は折れない。どれだけ快樂を叩き込もうとも、どれだけ弱いところを責めよ

うとも、この少女は、折れない。きつと、そういう「強さ」にいくら晒されたところで、弱音や諦めよりさきに、彼女の心に巢食う罪悪感やら柵やらが顔を出すのだろう。そして彼女は、それを酌んで「望まれるべき雨取千佳」になろうとする。傷つきたくないから、傷つけたくないから。今だって、勿論快樂に溺れたというのはいずれも、きつと根本的には、男が望んだからこうして「彼を誘う雨取千佳」を表しているに過ぎないのだろう。

全ては彼女の強さと優しさ故に。しかし翻つて見れば、彼女自身でさえ彼女が心のままにあることを否定しているも同義。だとするならば、それは、あまりにも孤独なのではないか。

(くそつ、何だよ、それは)

男は、ここに来て、千佳を理解して、初めて己を恥じた。こんな強く、真つ直ぐで、本当はなにより儂い女の子を、当初は手前勝手に性奴隷にでも仕立て上げようと思つて己の生まれ持った下劣さを、心から。

そして気づく。先刻告げた「俺のものにする」という独占欲の正体に。

ああ、自分はどうかやら、このアマトリチカという少女を、本気で恋慕してしまつたのだ。独占欲も、性欲も、愛欲さえもすべてを彼女に集約させたいと思う感情にラベルを付けるなら、その名前以外にありえないのだと。

それは、男にとつては脳天に落雷を食らったような衝撃だった。欲のままに行動しては異性に忌避され続けた下劣な天才であった男が、いま自分が弄んだ一人の少女に心底からの愛情を覚えている、など、笑い話にもならない。ならない、が、それが真実。

傍から見ればそれは余りにも気味が悪かろう。犯罪者が、手込めにした少女に恋をする。だが、その犯罪者でなければ、少女の隠した本当の姿を見つけるには恐らく相当の時間を要していただろう。

奇しくも、彼が欲望のままに動き、千佳が取り繕う余裕さえ無いほどに快楽で翻弄したからこそ、彼女の核心を衝くことができたともある。そして、千佳に愛情を覚えることがなければ、彼がその衝いた核心に気づくこともなかっただろう。

結果的に、男が歪な恋をした結果、千佳の心に巢食う闇に手を届かせたのは皮肉も皮肉と言える。

(どうしたん……だろう?)

そして、目の前には苦悩のような表情を浮かべ始めた男を訝しみながらも、開脚したままこちらへ秘所をさらけ出したままの、己がそうさせてしまった少女が、不安げな表情を浮かべている。少なくとも、『困惑』という感情は千佳から向けられている。そんな、ただ千佳から感情を向けられているだけのことでさえ、男にとつて喜びになっている。その色がどうあれ、自分に向けてこの少女の感情が動いている事実だけが重要だと

でも言うように。

もはや、据え膳などとは認識できない。男にとって少女は、想いを抱かされてしまった「アマトリチカ」という一個の人格であり、同時に、少女を鎧う、哀しいほどに「雨取千佳」という役割を遂行する仮面さえも幻視してしまう。

だから、男は決めた。

こんな男の思いなんて、チカに届くはずはない。届いて良いわけもない。だが、このままだ淫蕩に沈ませるだけでは終わらせないと。

故に、男は改めて、彼女の壊し方を決めた。否、壊すのではなく、彼女から「雨取千佳」を剥ぎ取る、そのやり方を。

雨取千佳の場合 その7

男は告げる。

「チカ、君はきつと、このままどんなにめちやくちやにしたところで、アマトリチカであることを捨てないんだろう」

「そんな……」

「どんなに強く責めても、君は受け入れてしまうだろう。どんなに辱めても、君は受け入れてしまうだろう。だから、そんなに自分を犠牲にするチカの代わりに、せめて俺は、俺だけは、アマトリチカという女の子を大事にする。ひたすら甘やかして、どこまでも与えてやる」

それは、千佳にとっては快楽を認めるよりも、理性を放棄するよりも余程厳しい取り立て方。そう、それは自縛でありながらも、千佳が数年の時をかけて作り上げた一種の「尊厳」さえも奪い去る、そんな意味を持っていた。

「ひう……♡ そんな、そんなの……いら」

「いらないと拒絶されようと、たとえそれで君が苦しもうと知らない。俺は、俺のために、チカを、自分を否定するチカを、剥がしてやる」

「そんな……そんなあ……そんなのって……ひうんっ♡」

そして、千佳の拒絶をもう男は聞き入れない。

早速と言わんばかりの性急さでありながら、非常に柔らかい手付きで、男の指が千佳の乳首を捏ねる。

与えられた甘美な快感に千佳の抗議が止まる。

顔を上げて男の目を覗けば、そこには、今までにないほど優しく千佳を見つめる眼差しがある。

「チカ……するぞ」

「優しくしないでえ♡♡んっ♡♡はあ♡♡入ってきたあ♡♡♡♡」

千佳を抱きとめ、男が今度はゆっくりと挿入を始める。男のものに馴染んだ千佳のおまんこもまた、それを温かく迎え入れる。

どちらにとっても一方的だったこれまでのセックスとは全く次元の異なるそれが今から始まるのだと、思考は異なれど肉体は互いに理解した。

「んっ、チカ……どうだ？」

「んう♡ 耳元で囁くの、だめ……♡♡」

「もうチカのダメは聞かない。答えないのも許さない」

「いぢわるう……」

「ほら、ここだよ。ゆっくりゆっくり蕩かしてあげるから、どう?」

「……………」

「答えないのは許さないって言ったろ」

ずりつ、と、男が千佳の弱い部分を擦る。力加減は優しく、声音はそれに追従するよう
うに。

「んやう♡ ……き、きもちーれす♡ずんずんされりゆのもきもちかつた、けどお♡」

「うあ……………けど、なに?」

「こーやって、ゆっくり、しゆるのも♡ きもちー、よお♡はあん♡♡」

その動きに、思わず本音が零れてしまった千佳だったが、先程までであれば追って出たであろう、それを否定する言葉は、後を追うことはない。

お互いの形を確かめながら、相手と快感を共有するためのセックス。ただ快楽を貪り合うだけだった今までとは打って変わって静かな、相互に反応を確かめ合いながら行われる性交が、仄かな熱の広がりとして情欲を再び昂ぶらせ始める。

言葉は幾分素直になった千佳の口からは、快楽を享受する文言が飛び出すものの、しかし彼女のの中にあるのは実際には当惑だった。

何もかもめっちゃくちゃにされるような荒々しいものを望んでいたのに、まるで壊れ物

を扱うかのような優しいものに変わってしまった。男の変心のその理由が、よもや自分への恋心の自覚だとは思えない彼女には、急に男の様子が変わった意味に気付けるはずもなく、ただただ戸惑いが心中を満たす。

その戸惑いは、男の態度へのものでなく、こんな静かな行為であるのに、先程のそれとは趣を異にする気持ちよさがあることへも及ぶ。

(なんでえ……どちゆどちゆされてないのにきもちーのお……♡)

男の動きはゆつくりだった。当初の愛撫のように緩急をつけて千佳の反応を楽しむものではなく、徹頭徹尾、千佳の気持ちよさを発掘し、快楽を食らわせるのではなく、まるで捧げるような柔らかく、優しい動き。

千佳の奥が疼き始める。決して、物足りなさなんてものではない。この動きのまま、ゆつくりと昇りつめることに否やはない。この疼きはもつと別の、千佳の心からくる疼き。

「やだやだあ……優しくしないで……わたし、優しくされる資格なんてない、ないよお……♡」

暴力的に壊してくれるなら、屈することにも言い訳ができた。だが、これはダメだ。男は辿り着いている。「千佳を本当に壊せる唯一の道」に。

それは、ただ同じ向きを向くだけではない、ただ千佳の有り様を肯定するでもない、千

佳を理解し、寄り添うこと。千佳の罪悪感も何もかも認めた上で、その重石を何でもな
いものにしてくれる何かの存在になること。

「逃げるな、チカ。前に逃げ続けたところで、そこに君の救いなんてないし、何より俺が
逃さないから」

だから、この男にこのままされるがままにされていては駄目なのだ。千佳の自分に縛
り付けた鎖を解くのではなく、それごと掴んで離さないなんて迂遠な解法に、よりにも
よつてこんな快樂責めなんて方法からたどり着いた男とのセックスを、気持ちよくな
って感じちや駄目なのだ。

(駄目……なのにい)

頭ではまだわかる。そんなこと千佳じゃなくたって女の子であれば当然だ。自分に
突き立っているペニスとは、強姦魔のそれ。そんな男が自分の救い手になるかもしれな
い、なんて、間違つても思つてはいけない。縋るなんてもつと駄目だ。

(でも……でもお……)

思つてしまう。こんな形だったけど、果たしてこの先、この男ほど千佳を理解し、ま
た更に解きほぐすことなく一切を振り切つてくれる存在に出会えるのかと。長い間倦
んでいた千佳の心の柵に手をかけて、あまつさえそれごと運び去ろうと言わんばかりに
強引に千佳を求めるような男に。

（離してくれないって、言った……今なら、私も……）

そして、身体と身体が比喩でも何でもなく繋がりを得ている今、その「離さず」は決して一方通行ではない。しようと思えば、千佳も男を離さないことが可能なのは、先程タガが外れてしまったときの自分の腰遣いが証明してしまっているのだから。

ここで千佳が、男を求めてしまえば――

くちゅっ

「きゅあうっ♡」

そんなことが過ったタイミングを狙いすまし、男の腰遣いが千佳の弱点へとペニスを振じ込む。ゆつくりとした、激しさのない挿入なのに、タイミングがあまりにも絶妙で、あつさりと嬌声を上げさせられてしまう。

（わかってる♡ 解られちゃってるう♡♡）

きっと、千佳の内心を男は見抜いている。そうじゃなかったら、こんなにタイミングを合わせて千佳を気持ちよくするなんてできないはずなのだ。むしろ、見抜きもせずそれができるなら、それこそ身体の相性が奇跡的に合致していることになってしまう。

くちゅ……くちゅ……ぬちゅう

「んっ……♡ ふうう……♡♡ くうん♡♡」

「（い）ゆつくりするの、（い）ぶううっ」

「きかないでえ♡♡ わかつてるんれしよお♡♡ んんっ♡♡」
 (これ以上、わたしを解ろうとしないですよ……♡♡)

正常位に戻り、抱きとめていた腕を解いて、代わりに掌を重ねると、どちらからともなく千佳の指と男の指とが絡まり合う。上気した頬は桃色に染まり、その表情は明らかに、このスローセックスをお気に召してしまったことを男に白状している。

もはや千佳がどれだけ言葉を否定の形で吐き出そうとも、身体が男に真意を密告する。もう、理性なんて残っていないのだから当然だ。どれだけ否定を示そうと、男に行動の主体を預けようと自ら彼を誘ったあの数行の誘惑は、間違いなく千佳が選択した行為だったのだから。

「んあ……♡ もつと、奥までえ……♡」

自然、千佳の腰が動く。男の息遣いに合わせるように、身体が順応していく。快楽に抗う気持ちはどこかに失せた。代わりにあるのは、欲求だ。こうしてほしい、こうされたくない、そういう原始的な欲求。

せめて、いまどうされたいかだけでも知られたくなくて、千佳は偽りの「そうされたい」を男に伝えるが、

「だめ」

「んんうん♡♡ あしやいと♡♡しゅ♡♡しゅしにやいでえ♡♡奥つてゆつたのにい♡♡

♡♡」

「千力の言葉がウソかどうかなんて、もう解ってるから」

「ふうく♡ふうく♡ やらよお、ゆつくりやらあ♡♡」

言葉だけの否定など、とうに男には通用しなかった。むしろ、それを解っていて千佳自身そういう言葉を選んでいくかの如く。裏返しをきちんと汲んでくれるかどうかを試すかのように。

本当は浅いところを擦られたい、ゆつくりされるのは今までとは違った気持ちよさでたまらない。男は、そういった千佳の本音を、ちんぽに伝わる千佳の動きから察していた。

「だいぶ素直になつたね、千力。あとはその口からも、素直な言葉が欲しいな。いや、引き出してやる」

「んふっ♡んっ♡♡手え、ぎゅってしないでえ♡♡」

「ん?..(うう?)」

にぎっ、にぎっ、とちゅっ、とちゅっ

「ひやああああ♡♡あんっ♡あんっ♡きもちっ♡♡んあっ♡」

段々と、男が察する度に、千佳の身体に最後に残っていた余計な強張りがときほぐれていく。

「らめ♡らめらよお♡♡しよんな、なんれえ♡♡きやう♡♡」

「またダメダメか。つまりこうだね、んむっ」

「んちゅっ!?!♡ んむ♡♡れる……♡♡ぴちや♡♡にああ♡♡んふっ♡♡ふっ♡♡ふむうう♡♡」

以前のように、千佳がダメダメをすれば男がキスをする。そうして口を塞げば、以前のようにどちらからともなく舌が絡む。

そう、これは追体験だった。千佳の身体が堕ちてからの手順をなぞることで、千佳の心にも思い知らせるための、儀式。

「んむっ♡♡れろれろ♡んくっ♡♡」

くにゅっ、くちゅう、くにい

舌が絡むたび、男が膺壁を回すように擦り上げる。擦られるほどに、千佳の心から抗いが削ぎ落とされていく。

「うっ……チカ、いいよ……君のおまんこ、俺のを離したくないって言うてる」

「ふああ♡ 言つれない……♡♡ こんらの、きもちーらけ、なんらからあ♡♡」

「だめだ、見てご覧ほら」

「んうううう♡ やらやらあ、見せないれえ♡」

絡み合った手を解き、千佳の頭を持ち上げて、いつかのように結合部を見せつけければ、

それだけで千佳まんこは男のモノを愛おしげにちゅうちゅう吸い立てる。

「たしか、これも好きだよね」

「ひゃんっ♡ んにゆうう!♡♡ しよれっ、もつろらめなのっ♡♡ おかしくなっ
ちやうかりやあ!♡♡」

乳首をこねながら奥をずんずんと強くする動き。男が一番はじめに気づいた、千佳のお気に入りのピストンのひとつ。

「じゃあこつちにしてあげる」

「んひゅっ!?♡ んあっ♡♡ ひいつ♡らめらめらめえ!♡♡ じゅんじゅんのあとにい♡♡
しよれはむりらよお!♡♡ 思いらしちやうからあ!♡♡ ざりざりとめてへえ!
♡♡」

「思い出させるためにやってる。だから止めてあげない」

そこから、Gスポを擦りつつ浅い動きの繰り返し。一度味わった経験をしつかりと活
かす優秀まんこが、ラブジュースを蜜壺から溢れさせる。

ずろおぐちゆう……ずろおお、ぐちゆうう

「んほおおおお♡♡ こしゅっ、こしゅれへええああ……♡」

長いストロークが千佳の膣壁を優しく擦り上げれば、はしたない声が思わず口からま
ろび出てしまう。

「んひあ♡♡ にやうう♡♡ ゆつくりにやのにい♡♡しやつきとじえんじえんちがう
ろにい……♡♡ わらひ、もつろらめになりゆ♡♡ らめになつひやうよお♡♡」
ぐにゆいゆい!

「ーっ、ーっ、ーっ、ーっつっつっ♡♡♡♡」

「ほら、また一番奥に届いた。どう?」

男の剛直が奥を突き、ポルチオが悲鳴のような快感を千佳へ与える。

呼吸さえ吹き飛ぶほどの強烈な快楽を、もはや慣れ親しんだもののようにあつさりと受け入れている危険性に気づきながらも、千佳は形だけの抵抗を試みる。

しかし、形だけなのは男もおなじだった。

打って変わって千佳の心を確かめるように問を繰り返すのも、ある一つの確信が男を先程までのような責めの姿勢にさせてくれないのだ。

おまんこへと断続的に刺激を与えながら、男はただ、不安に支配されていく。これから口に出そうとしている、その男の本心を告げたとき、彼女はどんなかおをするのだろうと。

しかし、それを伝えるのは、今はまだ快楽に翻弄されたままの彼女ではなく、一度冷静に立ち返った彼女であつてほしいという、相も変わらず身勝手な、しかし男にとつては切実な願望が、その不安をいや増していく。

「かひゆつ♡♡はひゆつ♡♡らめ♡♡もうらめ♡♡これ以上は、ほんろに、やめへ……♡」

「……ふう、いいよ、じゃあ少しだけ待ってあげる」

そして、剛直を最奥へ差し入れた男は、千佳の形骸的な懇願に応じて動きを止めた。

最後の懇願だった。最早形だけ、骸のような物であったとしても、千佳にとつて、まさしく本当に最後の懇願だった。辛うじてだ。辛うじて、今ならまだ雨取千佳に戻る。

先程の機会を逃したことで、「以前の雨取千佳」に戻ることはもう出来ないだろう。だが、理性が挫けても、あられもない本能が曝け出されても、まだ「兄と友を、皆とともに助きたい」という矜持だけは残っている。千佳が千佳であるために手放すことのできない枷が、文字通り千佳を縫い止めている。

だがその縫い目は、綻び、解れ始めてはいた。しかも、その解れた糸の先を握っているのは目の前の男だ。

男の剛直は、千佳の中に埋められている。それをほんの少しでもいま動かされ、僅かでも絶頂を与えられてしまえば、千佳の矜持の縫い合わせは解け、瓦解するだろう。

それをどちらも分かっている。そして千佳は男に動いてほしい。男は千佳に動いてほしい。最後のきつかけを、お互いに向こうから与えてほしいと思っている。

千佳は、最後の矜持を捨てないために。男は、千佳の矜持を捨てさせるために。ほんの少しの静寂。だが千佳の心の中は雄弁だった。

(ほしい♡ほしい♡ほしいよお♡♡おちんちん、欲しいの♡でも、もし私が今動いたら、もうごまかせないの♡ そんなのいやだよ♡♡わたし、もうこれ以上自分を嫌になりたくないのお♡♡だから、動いてよお♡♡)

そんな心中を知ってか知らずか、男が最後の言葉をささやくべく千佳の耳元に口を寄せた。もしここで、男が言葉攻めで追い打ちをかければ、千佳は素直にそれに身を任せて、しかし男にその心まで明け渡さずに済んだだろう。「友と兄を仲間と共に救う」という最後の矜持を縁にして、自分を誤魔化しながら辛うじて繋ぎ止めることができただろう。だが、それを最早同調作用など抜きで本能的に見抜いている男は、千佳とは逆に、誤魔化すことを止めた。

故に、その口から溢れたのは――

「好きだ、チカ。もう俺には君しかいないと思えた。こんな俺が、こんな最低の男が、初めて心から、そばにいてほしいと思つてしまつたんだ……だから、俺と一緒にいてくれ。頼むから……」

「……………!!」

千佳を求めめるのではなく、千佳に求めた吐露。男が初めて見せた、懇願だった。

それは、思わず千佳の頭から、それまで受けていた快樂の火を吹き飛ばすほどの切実さが込められていた。

男は、ここに来て自身でようやく気づいた。男が何故、当初は据え膳としか見ていなかった千佳にこれほどまでに執着したのか。

許せなかったのだ。きつとなりふり構わず助けを求めれば、誰かに手を差し伸べてもらえるような彼女が、他人を想う余りに自分を苛み続けるなどという孤独を選んでいたことが。なりふり構わなろうと構おうと、そばに誰もを置けなかった者にとつてすれば、そのなんと贅沢なことかと。

気づいてほしかったのだ。ここに、君を必要としている人間が確かにいるのだから、自分を蔑ろにする必要などないのだと。

それは、優れた才と歪んだ嗜好を持つていたが故に、誰からも理解されることがなかった男の、先刻と同じく最低ながらも、先程までの虚飾など取り払った、心底からの告白。

千佳の孤立を否定し、己の孤独を埋めてほしいと。自ら輪から外れるなら、何より求めた「そばにいてくれる誰か」という願いのために、外れた君を己にくれという、『ただ、誰よりも千佳を必要としている』ことを何よりも不器用に告げただけの言葉。

そして、その言葉を受けた千佳も、気づいた。

（あ、ああ……そうなんだ、そうだったんだ……わたしは、この人にメチャクチャにされたけど、わたしも、この人をメチャクチャにしてしまったんだ……この人が、『独りでいるために必要だったもの』を、わたしが、だめにしちやったんだ……）

きつと、ここで千佳と出会わなければ、もしくは、千佳があつさりと淫欲に墮ちる女であつたなら、男は千佳の身体を堪能して、次なる獲物を探す陵辱者のままでいられただろう。

だが男は知ってしまった。折れず砕けぬ強さを持ちながら、傷つけることも傷つけられることも厭うが故に己を蔑ろにし続ける千佳の在り方を。己以外を蔑ろにしたが故に、主体を自ら保ち続けることしかできなかつた男であるからこそ気づけた、己を蔑ろにするあまりに他人に主体を委ね続けた少女の儂さを。その、あまりに自分と正反対で、だからこそ眩しく見えた雨取千佳の健気さを。

それに気づいた瞬間、男は自分の弱さにも気づいてしまった。欲しい、という意味が、言葉はそのままに全くの別物へと変質した。玩弄の対象としてではなく、ただ自分が己がそう思うのと同じように『欲して欲しい』のだと理解してしまった。

だから、ここに至り男は、初めて心から千佳に求めた。千佳を求めるのではなく、君にこそ俺を欲してもらいたいのだと。こんな最低な自分を、見放さずそばにいてほしいのだと。今までの孤独の全てには耐えられようとも、これから先に千佳がいない孤独に

は耐えられないのだと。

それは、千佳にはついで出来なかつた『弱さの吐露』であり、自分の醜さを受け入れた上で誰かに求めるといふ、本来であれば千佳が何よりも欲していた己の鏡でさえあつた。

(ずるい……)

それに対する想いは、こんなことをしておいて。というのが、千佳の率直なもの。こんなにも知らなかつた事を叩き込んで、どうしようもなく気持ちよくさせて、今まで必死になつて目を逸らし続けた『雨取千佳』を掬い上げて、どこまでも『わたし』を肯定した目の前の男は、何よりも最低な陵辱者のはずなのに。

そんな男が、千佳がついで出来なかつたことをしている。己の弱さを認めた上で、他人に委ねるではなくただ『求める』という何よりも簡単で、しかし千佳にはそのなんと難しいことを、いとも容易く。

(ずるい、ずるい……)

そして、それを雨取千佳は拒めない。拒んでしまえば、己の求めた解答を否定してしまふ。救われていいのだと、その柵ごと雨取千佳を欲するのだと、そういう『千佳が嫌いな千佳』こそが美しいから、それを欲するのだと。

もう、誰かには委ねられないこの状況で、己の弱さへの救いを千佳に求めた男は、う

ごかない。

委ねられたのは千佳だから。千佳の答えを、ただただ受け入れるという構え。

どこまでも卑怯だな、と男は内心で自嘲する。

こんなものは、告白とも呼べない。千佳の強さと良心につけ込むようなやり口に過ぎない。

だが、それでも、男は最早なりふりなど構わずに千佳を欲していた。同情でも構わない、性欲でも関係ない。千佳を己に結びつける為なら、汚くとも狡くともすべてを利用することに厭いは無い。

そして千佳も、そんなことは分かっていた。男が自分を盾にし始めたということくらいは、ぼんやりと。

もちろん、これ突っぱねることは簡単だ。こんな男の告白など一笑に付し、張り手の一つでも見舞ってやるのがむしろ正道だ。

だが、千佳には出来なかった。確かにこの目の前の男は最低だ。出会い方も最低で、関わり方も最低で、始まりもここに至るまでの過程も何もかも、肯定材料なんて見つからない。

ただ、そんな最低の男が、少なくとも初めて『雨取千佳』を探り当てた。キスも、セックスも、自分の知らなかった気持ちよさも、果ては、千佳自身がひた隠しにしていた雨

取千佳を見つけることさえも、そしてそれを責めず、厭わず、あまつさえ肯定してのけるような好意さえも、男が初めてになってしまった。

分からない。何故目の前のこのような男に、殺意さえ覚えて然るべき相手に、こんな気持ちにさせられなくてはならないのか。憎いはずなのだ。とんでもない外道だ。なのに。

(ずるいよ、ずるいよお……)

分かつてしまうのだ。孤独に自分から逃げ続ける苦しみを知るが故に、孤独に自分だけを進み続けた背反が。

形は違えど、独りでい続ける苦しさは同じだと、共感できてしまうのだ。

そして、その苦しみが、共に歩む誰かによつて和らぐことを千佳は知ってしまったている。玉狛の皆——師が、幼馴染が、その一番の友人が、肩を貸してくれることによつて重さを少しだけでも和らげられることを知っている。誰かがそばにいてくれることの大切さは、何よりも身にしみている。

千佳は、失うことを恐れた。それは『持っていたから』故の喪失への恐怖。大切な何かがある日自らの過失で失われてしまうことへの自責。

だが、対象的に男は何も持っていないなかった。ここで千佳に出会わなければ、その千佳がこんな在り方をしていなかったら、男は喪失感などおそらく生涯抱かず、気づかず、孤

独に苛まれるという恐怖に晒されることもなかっただろう。

(ずるい、けど……もし私がここで拒絶したらこの人は……)

ぞくり、と、千佳の心に恐怖感が生まれた。

あの時、親友を失ったあとに向けられた非難の視線が蘇る。全てから拒絶されるかのような圧倒的な絶望感。現実を受け入れられないのは千佳も同じなのに、それを千佳には許さないとばかりに世界から弾き出されるような激烈な疎外感。

目の前の男を見る。未だ自分の中にものを収めたまま、千佳の答えを待つ男の顔を。

この短時間で不本意にも見慣れてしまったその顔は、揺らいでいた。表情そのものは然程変化はない。だが、先程までの、云わば千佳で愉しんでいた頃の顔とは似ても似つかない空気感を千佳に与える。表情そのものは真顔なのに、何かを押し殺しているような、そんな表情。

(あ……わたし、だ……)

結びつけたくはない。こんな男と自分を結びつけたくはないのに、その顔には覚えがあった。かつて、千佳が鏡の中に見た自分自身が、そこに他人の顔で現れていた。

拒絶されることへの恐怖。傷つくことへの恐怖。男にはなかつたはずのそれに耐える姿は、どうしようもなくかつての自分を千佳に想起させる。

なつてしまえばいいのではないか、とは思う。

先程から、散々自分に言い聞かせようとしていたように、当たり前に考えれば、この最後の機会に千佳は男を拒絶し、千佳にとつて最悪と言つていい辛さを男にも与えて報復とすべきだ。それを以つてして、人だなしとは評されないほどには最低なことを男はしている。千佳とは違ひまさしく因果応報。男が孤独の辛さに耐えかねるのを、だから何だとせせら笑つたとして、かつてのように千佳を非難する者などありはしまい。

(でも、それは……それは……)

それが正道。裁きを与えることこそふさわしい。しかし、ありはしないのだ、そんな選択肢など。ここで男をあゝの地獄に落とすことだけは「雨取千佳」が許さない。だつてそうしたら、その地獄を知つていてそれを誰かに与えたら、それは今までの自分を否定することだから。

男は、千佳の鏡だつた。そこに映つているのは、反対でありながらも対照の姿。かつて助けてほしくとも救いが現れなかつた千佳自身に等しい。

たとえ稀代の悪人であろうと、己が知る地獄を等しく味わえと言ふよりは、引き上げようとしてしまう。それが叶わないならば諸共に落ちることさえも辞さない。その在り方こそ、彼女を「雨取千佳」たらしめる根幹。何を傷つけないことを代償にすれば、何からも責められないのではという自己犠牲に、幼い自己防衛を見出した少女のレゾンデートル。

葛藤はある。いまここで彼を受け入れることは、裏切りに繋がる。彼は異界の輩。彼女の幼馴染の親友や、いまは協力関係にあるチームメイトとは同列に語れるわけもなく、自分たちにとっては明確に敵に相違なく、ボーダーに所属する自分がとつていい選択肢たり得ない。何より、自分の歩む道へ同道してくれた誰も彼も彼もに対する裏切り以外の何者でもない。

それなのに、千佳はその男への決定的な拒絶を示せない。彼は、自分とは違う孤独を知ってしまった者だから。何もなかった自分に、今まで幸福にも気づくことのなかった彼に、孤独の意味を教えてしまったのは、快樂に墮したこの身体と、千佳の在り方そのものだったから。

(ああ……わたし、本当に……)

戻れないことを認識はしていた。知らない快樂を叩き込まれた身体は、きつともうそれなしではいられない事を。

折れたことを覚悟はしていた。底から快樂を望んでしまった心は、きつともうそれなくして踏ん張れない事を。

それでも、彼が強く千佳を責め立て、追い詰めるだけだったなら、千佳はその持ち前の精神力で、堕ちた身体を支え、折れた心を継ぎ直せただろう。他人を傷つけることも、他人に屈することもなかったと、今まで同様にそれを抛り所に、現実に立ち返ることが

出来ただろう。

だが、期せずして、その千佳の強がりこそが男を砕いてしまった。知らずのうちにいた孤独の辛さを、形はどうあれ千佳が男に与えてしまった。例え、それが未来に訪れるもので、相手はそれを与えられて然るべき者だとしても、それを是とすることは雨取千佳が許さない。

何よりも、

(わたし、この人を見捨てられないって、思っちゃってる……)

欲してしまっていたのだ。

千佳の身体も、心も、ただ男に与えられる快樂のみに屈したのだと思っていた。思いたかった。

だが、少なくとも、男はただまっすぐに千佳を求めていた。初めは身体を性的に欲したのだろう。だが、千佳と肌を重ねるたびに、彼は千佳を理解していった。理解されてしまっていた。

ストックホルム症候群に近いものではあるのだろう。だが、男の腕に抱きしめられることも、男のモノで女を目覚めさせられることも、当初にはあつたはずの嫌悪感はどこかに失せ、確かにそれに縋ったことは紛れもなく事実であり、また、何よりも純粹に求められたことも事実だった。

(うれし……かつたんだ……きつと、わたしも)

千佳のすべてを汚したくせに、千佳のすべてを肯定してのけた男に、千佳は否定を返すことができなかった。

そつと、千佳の手が伸びる。最早トリオン体との同調もほぼほぼ切れ、肉体は意思に沿う動きを見せた。それが向かう先は、男の両の頬。まっすぐ、確たる眼差しで千佳を見据えながらも、どこか怯えを感じる表情を浮かべたそれを、小さな掌が包み込む。

触れた瞬間に、びくりと、男が震えた。

その震えが、千佳にそれを確信させる。ああ、この人は今怯えているんだと。後悔をしているんだと。

同時に、それを察せるほどに、千佳もこの短時間で男を理解させられてしまったんだと。

それを理解した途端、千佳の中に残っていた快樂の疼きが一時的に吹き飛んだ。

「わたし、貴方を許しません」

千佳の口から言葉が出る。それは、字面で捉えれば、正しく千佳が内心で不可を下したはずの男への裁断。その判を受けて、男の顔が僅か歪んだ。

罪過への応としては当たり前だと思っていながらも、都合のいい未来が消えることへ

の絶望を必死に抑え込むその表情で、千佳は本当に最後の鍵を明け渡すことをけつした。

千佳自身の言葉を否定するように、内心を肯定するように、柔らかな両手が男の頬へと熱を送る。

許さない。けれども見捨てない。その決定を、伝える。

「でも、貴方を見捨てません。貴方のことは嫌いです。大嫌いです。だけど、このまま消えるなんて許さない。だって……」

言葉を紡ぐごとに、思い出す。先程まで千佳の身を支配していた熱を。

「わたしをこんなにして、中途半端に壊したままだなんて、許さない」

それに何より。

「わたし、もしかしたらもう、赤ちゃんできちゃってるかもしれないのに」

女としての、生物としての、根本的かつ当然の帰結として、その可能性が現実となる憂慮があり、またそうなった場合にそれを失わせることなど、少なくとも千佳にできるはずもなかったのだ。

男は思い知る。どこまでも自分は身勝手だった。ようやく自分以外に、千佳だけを見据えた彼では、そこに思い至れるだけの余裕も配慮も無かったその悪辣さに。

「わたしを自分のものにするって言ったのに、こんなことで怯えるのも許しません。身

勝手な貴方の何もかもを、わたしは許さない」

否定が重なる。しかし両の掌は頬に添えられたまま、言葉とは裏腹な暖かさを男に与え続ける。

「でも……でも……代わりに見捨てもしないから、だから、わたしはあなたのそばにいます。あなたのそばで、ずっと貴方を許さないでいてあげます」

そして告げられた。男の望むことばではなく、しかし男の望んだ帰結を。

「ち、チカ………?」

「……だ、だから……」

事態が飲み込めずに惚ける男から目を逸らすように千佳が顔を伏せる。

そこで気づいた。千佳は、いつの間にかまた耳まで赤くなり、未だ保っていた結合部の蠢きも再開していたというただの事実。

「あなた以外、見えないくらいに、して……そうじゃないと、わたしは『戻ろうとしちゃう』からあ……」

「~~~~~っ!」

言葉とともに再び交わされた視線で、男のモノが硬さを取り戻す。いつしかまた蕩けていた千佳の瞳が、掌からの温もりが、当初の男が望んでいた、今の男が最早望むべくもないと思っていたその言の葉が、互いの性欲に再びの火をくべる。

「チカあつー！」

「んきゆうっー！♡」

男の剛直が、一気に最硬度を更新した。ムクムクという膨張の勢いが膣壁を拡げる感覚が、千佳の火種を燃焼させるふいごのように襲いかかり、たまらず嬌声上がる。

あくまで互いに「忘れていただけ」の快楽は、再燃を自覚すれば瞬きの間に燃え広がる。

性器と性器が、己の役割をこれまで以上に認識し、ただ入れているだけだった男のモノの、硬直のギアを一息にトップに押し上げた。

ふに……

「んふあ……♡ おっぱい、きもちい♡ んみゆう♡」

「俺もだ。チカのおっぱい、こんなに可愛らしいのに柔らかい」

慎ましやかなふくらみを指先だけでやわやわと揉む。小さいながらも確かに女としての柔らかさを備えた千佳の双丘は、今や大きさに反比例する感度を備えるに至っている。頂点にあるさくらんぼを摘めば、それこそ容易に絶頂できるだろう。

だが、男はそれをしない。千佳の壊しておねだりに理性は吹き飛びかけたが、ここでケダモノに戻ることは最早男の矜持が許さない。

奇跡が起きたのだ。少なくとも男にとっては。あまりの都合の良さに、夢かとさえ思

う。そして夢ならば、夢だからこそ、男は全霊を賭して千佳へと奉仕することを決めた。受け入れられたなんて思わない。それでも、それでもだ。

「見捨てもしない」

その一言は、恐らくただ同情や好意を示されるより、よほど男の魂を震わせたのだ。その震えが、一歩間違えば両の瞳から溢れ出しそうなほどに。

だが、溢れさせはしない。溢れさせそうな思いならば、それはせめてもこの奇跡を与えてくれた相手に還元すべきであり、自己満足でしかない涙という形で消費することなど許されないし許せない。

猫が親愛の情を許した相手にそうするように、千佳の首筋に己の頬を這わせる。

「んい……♡ ふやあんっ♡」

髪が首筋をくすぐると共に、男の伸ばした背に連動する形で怒張が膕奥に僅か触れ、その甘い快感がかつての絶頂を千佳に思い起こさせる。

漏れ出た千佳の可愛らしい仄かな喘ぎ声が男の耳朵を間近で打ち抜き、辜丸が己の領分を十全以上に発揮し始める。収められた刀の反りがより深くなり、その鞘は即座にそれに適応する。

「チカっ……声、もつと……!」

「きやうう……聞かないれえ♡ こんにや声聞かないれえ……♡♡」

男の息遣いがこれまで以上に荒いものに変わっていく。そこに込められた熱もまた、それを耳元感じて、千佳の声がより甘く、蕩けた色を増していく。

おまんこはきゆうきゆうと男のモノを締め付け、その中に湛える愛液の熱も、男に感化されるように温かみを増す。

反して、注送は緩やかで、性器そのものへの刺激はそれほどでもない。
はむっ

「みやあつ?!♡♡♡ 耳たぶう……♡♡♡」

代わりというように、男が千佳の耳たぶを唇で優しく食んだ。鼻息が鼓膜を撫でるように耳奥へと入り込み、脳を直接くすぐるかの様な焦れつたさを覚える。

男の口づけは、正常位で行える至るところへと及ぶ。このメスは自分のものなのだと改めてマーキングするように。もう逃さないと所有権を刻むように。

「きゃうあ♡♡」

そのおでこに。

「んはあ……んっ♡♡♡」

その首筋に。

「ひあ……♡♡♡」

その鎖骨に。

「ん……♡♡」

その両の腕に。

「あ……♡」

その手の甲に。

「んやうつ!!? しよこわらめえ……♡♡♡」

そして腕を挙げさせてその脇に。

千佳の肌に伝う汗を上書きするように。

そして千佳の双丘に八の字を描くように舌を這わせていく。

「あつ♡ ふやつ♡ ぺろぺろお♡♡ きもち♡♡ ひゃあん♡♡」

舌先で緩急を加えつつ、男の舌の動きは次第に半径を狭めていく。思わず、千佳が期待を込めた眼差しを男に送るが、首をわずか持ち上げて見えるのは、男のつむじくらいのもの。表情が見えないことでそのタイミングが読めず、その焦れつたさが千佳のステージをまた少しづつ引き上げていく。

「んいつ……ふえつ? んみゆつ、あはあん♡」

そして、男の唇が丘の頂点のさくらんぼを捉えた。しかし、その捉え方は先程耳たぶへ与えられたそれ。千佳が覚えている吸い付き、齧るような刺激とはまた違う、彼女を緩やかに昂ぶらせる一変した動き。

「んっ♡ にゃんでっ♡♡♡ ちくっ、じゅばん、らめっ♡♡♡」

はみはみと、両の乳首を交互に含まれるたび、そのさくらんぼは男の逸物のようにコリコリとした固さを実に蓄えていく。

少しずつ少しずつ。男の愛撫が千佳の興奮のかさを増していく。

もどかしさから、おねだりするように千佳の膣肉が男を断続的に締め付けるが、男はそれをあえて無視する。

「んひっ!?! んむっ♡♡♡ ……んちゅ、にちゃっ、れるっ♡♡♡♡」

そうこうする内、男が千佳の乳首を唇で含んだまま軽く吸い上げ、陰圧を加えながら突然離れた。その感覚は燃えると言うよりは、まるで千佳というグラスへ快感の一滴を注ぐような瞬間かつ小さなもの。かと思えば、それを意識する間もなく今度は互いの唇が重ねられ、差し込まれた舌が、もう何度か繰り返し慣れた動きで千佳のそれを絡め取る。

これも、全く荒々しさとかけ離れた動きだった。千佳の舌を絡め取ってからは、むしろ千佳の舌が動くのに合わせてその動きを導くように。

「んちゅっ♡♡♡ れろっ♡♡♡」

夢中になってしてしまうような深いキスが続く、いつしかダンスの主導権は千佳に移っていく。

酸欠になりそうなほど、呼吸も最低限ながら、舌を舐り合うことだけは決して辞めないその動きは、千佳がチアノーゼになる寸前まで続く。

頭がぼうつとして、口から伝わる性感だけが互いの縁とでも言うように、ただただ続くだけの口内愛撫。

先だつての激しさなんてまるで無いのに、身体の熱はもう先刻同様のものまで高まりつつあった。

ぴちゃ……ぴちゃ……と連続する水音は、舌の動きであると同時に、確かに注がれていく快感の雫でもあった。

千佳を落とすための、燃え上がる炎をくべて快感を叩きつけるようなセックスを、最大限に開いた蛇口で水を注ぎ、息づく間もなく溢れさせるようなものと例えるならば、今行われている行為は、一滴々々注ぎ込むことで、一つ一つの快楽を自覚させながら溢れるまで待つようなもの。

絡み合う舌と舌がきもちいい。互いの境界が静かになくなっていくあの感覚が、より緩やかに、千佳の酸欠で覚束ない思考を埋め尽くしていく。

(溶ける……とけるう♡♡ 私とこの人がわからなくなつてくこれ……すきい♡♡)

強烈な快感で呼び起こされるそれより、今みたいな時間をかけたキスで蕩かされる感覚の方をお気に召した千佳の舌が、いまや男の舌を挿んでダンスのリードを始めている

ことに千佳自身は気づいていない。

翻弄されるではない、時に互いに主導権が入れ替わるセックスが、お互いに「共にある」ことを強調する。

そして千佳が思考を放棄しかけた時、男の舌が千佳の口腔から脱出した。

「んえう?♡……はあ♡はあ♡……なんね、はあ……にゆくのお?♡♡……ひあ……♡」
 いつかのように一瞬間を彷徨った舌を納めれば、酸欠の体が酸素を取り込もうと息を荒らげさせる。少し眉根を寄せて、不満そうに荒い呼吸を繰り返す千佳は、完全に女の色香を放っていて、男が生唾を飲み込む。

きちつ、きちつ、と音が幻聴できそうなほどに、二人の結合部はすでに密着の度合いを限度まで増していた。千佳のつるりとしたおまんこが、より太さと硬さを増した男のちんぼで貫かれている光景は、割とグロテスクとさえ言ってもいい。しかし男にとって、これ以上なく健気で興奮する光景に変わらない。

ここからは、男に再び主導権が委ねられる。それは、男が改めて千佳の体制を変えたことで示された。

繋がったまま、男は器用に身体を正常位から後背位へと入れ替える。

「やあんっ♡」

体勢の変化で、結合部に回転の刺激が加えられて上がる嬌声を敢えて無視した男は、

千佳を後ろから抱きしめるような形で横になり、まだ腰を動かすことなく今度は腹より下を愛撫し始める。

「やあ♡ くすぐつ……たい♡♡ んふつ♡♡ あは……ん♡♡」

名残惜しげに最後に乳房を人差し指と親指で軽くふにふにして柔らかさを楽しんでから、そことはまた違う柔らかさを持ちながらもすべすべとしたお腹の感触を掌で堪能する。くすぐったさに身じろぎすれば股間から仄かな刺激が与えられてしまい、まだややぼうつとした頭に電気のような気持ちよさがピリピリと走る。

「チカのことかも、いじつてあげないと……」

「んひゅつ♡ しょこらめつ♡♡ ふひつ♡♡ あんつ♡ くしゅぐつた♡ ああ♡ やら♡♡ うごいちゃう♡ うごいちゃうかりやあ♡♡」

そして次に狙いを定められたのは、千佳のお腹にあるちっちゃなクレーター。乳首とは逆のベクトルで可愛らしいその窪みに指を這わせ、おまんこの大陰唇を割り開いた時のように広げ、捏ね回せば、くすぐったさに身じろぎを止められない千佳から抗議の声が上がった。

抱きすくめられたこの体勢では、へそから指を逃がそうとすれば、胸上よりも腰になつてしまい、その動きがまたも千佳まんこにもどかしい刺激を与えていく。皮膚が必然的に薄く、下腹部に近いそこを弄り回されたことで、先端がその付近まで収まってい

る男のちんぽをより意識せざるを得ない。

すでにおまんこをじゅぼじゅぼされることの気持ちよさを知った千佳の身体は、刺激そのものは快楽として甘受するものの、それでは足りないとはかりにより腰をくねらそうとしてしまう。

「んひう!?!♡♡」

その動きを察した男が、おへそを解放して今度はその腰へと手を回す。腰からお尻へと手を這わし、一度撫で上げるようにして、体型の割にぷりんとしたその臀部のお肉を持ち上げてすぐに離すと、僅かに弾んだ尻肉が男の下腹に当たりペちりという小さな音を立てた。だがその音よりも、くちやりという水音の方が大きく響き、千佳の喘ぎ声がそれに続くように放たれた。

尻と男の体の隙間に手を入れて撫で回されたことで、おまんこからちんこがやや引き抜かれたのだ。それはあくまでも千佳が知る平均値より遥かに小さな動きではあったが、それでも今のセックスが始まってからは一番大きな動きであり、おまんこからぴつと漏れ出すように、ほんの少しの潮が吹かれる。

軽イキだ。まさかこんな弱い刺激で、と男は思うと同時に、千佳の確かな昂ぶりを感じて嬉しくなる。

千佳というグラスに快楽の雫が着実に貯まっていることを確信し、更に男は掌を千佳

の肌へ滑らせる。今度は体の前面へ。尻肉が動きに連れて撓み、菊門が仄かに外気に晒される。

「ひゃん♡」

とうにそれも十分な悦として受け取る千佳だが、今更男は嬌声ひとつで止まろうとはしない。

抱き込むような動きで掌を腰沿いに滑らせて、しかし肝心のおまんこには大陰唇にさえ触れずに、股関節の筋をなぞるように千佳の魅惑のふとももへと這いずりは進行する。

「んっ……なん、でえ♡」

身をくねらすほどのもどかしさが彼女を襲い、触れられなかった蜜壺から催促のような滴りがいや増す。

しかし男はそんなことは知らぬとばかりに、千佳のふとももを堪能していた。

すりっ……すりっ……

「んひゅい……♡ りやめえ♡♡ せちゆないよお♡」

もう、身を明け渡す準備が完了している肢体に与えられるじれつたい責めは、肝心な部分に到らないが故に辛さばかりが先に立つ。無駄な筋肉はつかず、さりとして千佳の身体の中で最も女性的な肉感を持つ素晴らしいふとももを男は堪能しきり、その掌が膝に

達する。

それが、合図だった。

雨取千佳の場合 その8

にちい

「ぴゃっ♡♡」

ふとももを撫で上げられていた手付きが、そこへ到達した途端に急変した。

向かう先は千佳の膝裏。撫で付ける動きから、抑える動きへと変じたそれが、千佳の右の膝裏を抱えて片脚を開かせる。

その弾みで、つながったままのちんぽの硬さに割り開かれた千佳のおまんこが水音を立てる。その音は期待の音。今から、先程さえも凌駕する激しい快楽を求める、千佳の破滅願望。残った矜持も男へ沸いた同情心も何もかも、性欲の虜に墮して欲しいという、あまりにも哀れな防衛本能。

そんなものを、最早男は肯んじない。

「んひゅっ♡……ふえ?♡」

勢いそのままに突きこまれるかと思われた剛直は、しかし急変ではありながらも性器自体には僅かな刺激程度で停止する。

ピチヨン、と。また千佳の脳の深いところに水滴が滴るような幻聴さえ聴こえるその

僅かな刺激に苛まれて、千佳の身じろぎ——というよりは悶えの震えが大きくなる。

膝裏を持ち上げる開脚に、先程のガツガツとした貪られるようなピストンを期待してしまつた千佳は、その自身のセックスにおけるややマゾヒズム的な気質に改めて気づいてしまい、赤面も強くなつた。

しかし、激しくないとはいえ、先とは逆の体位——右を上にした松葉崩しにて腹側の膣壁を柔く擦られるその動きは、散々焦らされたこともあつて

(き、きもち……よお♡)

そう、気持ちよかつた。叩きつけられる快樂とぶつかり合う身体の動きの結果として溶け合う、あの境目を強引に混ぜ合わせるような感覚とはまるで異なる、『蕩け合う』ような緩やかな境界の消失感。

あなたはわたし、わたしはあなた。快樂をはじめとしてあらゆる情念を共有するかの如く。その変化を、酸欠から脱し始めて鮮明さを取り戻した脳と、もどかしさから敏感さを増したおまんこが認識し始める。

じゅん……♡

(うああ……えつちなお汁、またわたしのおまんこから出ちやつてるよお♡♡)

とうとう内心でさえも女性器の俗語を躊躇いなく使えてしまつていることには、気づかない。

代わりに優秀な千佳の蜜壺は、酸素は取り戻したとて、失った水分はそうではないにも関わらず、再び潤沢に溢れ出す。

こひゅ……けほっ

えつつさへの自覚に息を呑んだ千佳の喉が掠れた音を立て、かつて自分が貪った行為のひとつである喉フェラを思い出すと同時に、僅かに咳き込んだ。

「あ、そうか。ごめんチカ、気づいてあげられなくて」

その音を耳聴く拾って、男が千佳の膝を持ち上げていない方の手を彼女の頭越しに虚空へと伸ばした。

すると、そこにトリオン兵が出現する時のような空間の揺らぎが発生する。

「あ、これ収納用のトリガーね。で、あとこれ。チカ、啜えて」

その揺らぎに手を突っ込んで、男が細長い、先に吸口の付いた棒状のものを取り出した。言われるがままに啜えれば、またもフェラチオのことを思い出しておまんこが少しだけきゅんとする。

「トリガー起動。チカ、それ吸えば水が出るから、水分補給して」

そのままストローのように吸口に陰圧を加えれば、口の中に、とても冷たいとは言えないものながらも水分が満たされた。コクコクと喉を鳴らして千佳がその水を飲む。

男が出したそれは、男の故郷では汎用的な生活用のトリガー。トリオンから水を生成

する機能を持つだけの単純なものだが、敵地に潜入する兵士などに持たせるには便利なもの。どうせ故郷に戻る気もなく、孤軍で動くつもりであった男がちよろまかしてきたものだった。こういうところに如才ないところも男が孤立していた一因なのだが、それは未だに本人が気づいていない。

ともあれ、先程までなら間違いなく気づかなかったか気づいてもスルーしたのであろう千佳の些細な息遣いの変化から、『激しすぎる運動』の結果、水分が足りないことに気づく辺り、本気で千佳を大事にすることに決めたという言葉は嘘ではないということがわかる。少なくとも千佳は、それを最早戯言という言葉で流すことはできなくなった。冷たくないとはいえ体温よりは低い温度で喉を潤すその流れにさえ、熱さを感じてしまう程度には。

「んく……んく……ぷはっ。あ、ありがとう……」

「どういたしまして。俺も飲む」

「……………」

「ぐくっ、ぐくっ……ぷはあっ！ ……ん、どしたの、チカ？」

「ふぁ♡……………！ なんな、なんでもないです！」

そして、男の何気ない行動でその熱さが頬にも伝播した。本気できよんとした男に慌てた様子で答える彼女の顔色は、快感に蕩け熱にうかされた桃から紅へとその色味を

強めていた。

正直、千佳自身でさえ意外だった。すでに直接どころか、男の性器にさえも行つた行為なのに、まさか『間接キス』という言葉に置き換わつただけで強烈な照れに襲われるだなんて。そしてそれを意識した途端にまたおまんこの奥がきゅんとしてしまったなんて。

ぷしゅー、と、湯気でも出そうなほどに千佳が真っ赤になっている理由に見当もつかない男は、ひよいっと水を生むトリガーを仕舞う。

「さて、と」

そして一息付いたのを確認すると、照れて固まったままの千佳の膝裏にある手の力を少しだけ強めた。

にちゅ……

「にゃ……♡♡」

そしてそれを皮切りにして、とうとう腰を動かす。

ゆつくりと、千佳の様子を探りながら、セックスが再開される。

「ふああ♡ んっ、んっ、んうう♡♡」

側位から与えられるまた異なる刺激に、喘ぎ声が漏れ出す。優しく抜き差しされるちんぽは、激しいそれと違ってカ리가齎すぞくぞくとした気持ちよさをしつかりと認識で

きてしまうもので、その快樂は電気信号として背筋を這い上がる感覚さえ把握できると錯覚してしまうほど。

男の動きは優しく、柔らかく、緩やかだ。それは逆説的に、激烈なそれとは明確に区別されてしまうということだ。

「んゆ♡ はああ♡♡ こしゅれ、わかりゆう♡」

カリの動きが、分かつてしまう。どう動けばどんな快樂が走るのか、分かつてしまう。理解してしまう。

「ふああ?!♡♡ らめらよお!♡♡ しよれに吸い付いちやらめらよお……♡♡
んやああ♡♡」

そして理解してしまえば、千佳のおまんこはその優秀さを主の建前を超えて發揮してしまうのだ。ちゆううう、と膺壁がちんぽに吸い付くように収斂する。男のフルボリユームに押し広げられていた膺壁が改めて密着し、その凶悪なカリ首の齎す刺激が増す。千佳のお望みどおりに、千佳のおまんこが主の代わりと言わんばかりに男のちんぽに恭順を示す。

とちゅつとちゅつ、と優しい出し入れに対して、ちゆうちゆうと吸い付く様は、撫でられた飼い主の腕に縋り付く子犬のよう。

「とちとちしやいれえ……♡♡ こしゅれ、りゅからあ♡ んふううう♡♡」

千佳の様子を探りながら、瞳がより蕩けるように、身体が更に火照りを増すようにと、男がこれまで以上に細やかに膣内を探りながら、緩やかにちんぽを動かす。

「ふみゆう♡♡♡ ちくびつ、こねたらあ♡♡♡」

もちろん、他の刺激だつて忘れない。

「んはあ♡♡♡ とちとちい♡♡♡ 優しいよお♡♡♡ んぴやつ♡♡♡ ら、らめ、しよこはあ♡

♡」

乳首を、クリトリスを、千佳のお気に入りの押し方で捏ねる。スローセックスの中に加えられる時折の強烈な刺激が、だからこそより際立つて千佳の身体を襲う。

千佳のために、望みまでも探りながら、確かに愛情を感じる今の交わりは、勢いこそ今までで一番大人しいのに、情感の昂ぶりという意味では果てがないような気さえしてくる。

高まり続ける身体の火照りが、いつまで経っても弾けてくれない。あのビクビクとなる一歩手前のまま、気をやることもなく、気持ちよさだけが駆け巡る。

それを与えてくれる男の懸命ささえ、擦り合う性器が伝えてくるのだ。これは千佳のためのセックスで、男はそのためにひたすらに千佳を慈しんでいるのだということ。

そして、それが――

(もどかし………の♡♡♡)

不満なのだ。

散々に快楽を叩き込まれた身体が、奥の方で叫ぶのだ。もつと、と。千佳を味わうのに、テーブルマナーなど必要ないのだと。

この実は、すでに食べごろに熟成されているから、手づかみでむしゃぶりついているのに、と。

(でも、なんで嬉しいのお……♡)

だが同時に、満足なのだ。

どこまでも千佳が気持ちよくなるようにと与えられる、謂わば奉仕が、気持ちいいのだ。不慣れな様子で千佳へのマナーを気にしながら、半ば遠慮がちにその実をつつくようなこの交わりが、嬉しい。

当初の完全に千佳を性の捌け口として捉えていたあの自分本位セックスではない。千佳のことを徹底的に気にして、包んでくれる。その「与えられるセックス」は、千佳が初めて認識する「えっち」の仕方。気持ちを伝えるために、そして受け取るために、「性を交わらず」本当の姿。

故に、嬉しい。自分のことを気遣いながら、この世で一番近い距離で快楽を与えてくれることが嬉しい。その瞳に自分だけを写すことが心地よい。優しく膣内を撫であげられるのが、もどかしくも気持ち良い。

おまんこに蓋をされることで、欠けたピースが埋まるような錯覚。先程までのが、千佳の理性も何もかも掻き混ぜて最終的に強引に色を揃えたキューブパズルとするならば、今のは二人で一つの絵を揃えるジグソーパズルだ。

(そっか……♡ いっしょ、なんだ……♡)

心が同じ方向を向くのではない、向き合うという結果としての一体感で、千佳が得心する。もうこの男には何もかもさらけ出し、さらけ出された。ならば、千佳のこのもどかしさの正体は――

「……しっ」

蚊の鳴くような声が千佳から漏れる。

聞き取れなかった男が、「ん？」と耳を近づけてリピートを要求する。それが恥ずかしくて、千佳の頬がまた染まる。

なにせ、今口に出した要求は、千佳がついぞ誰かに求めることのなかったものだからだ。

しかし、千佳には確信があった。目の前のこの最低男は、こと自分に対してはもう誠実なのだという、「惚れられた女」としての強みが。

そして、千佳は彼女にとっては何より勇気がいるはずだった一言を、絞り出す。

「顔、見せてえ♡ 見せながら、して、ください……♡ じゃなきや、やなお……♡」

それは、甘えの言葉。心だけでなく身体も向かい合いたいという、少女らしくも淫靡な欲求。もどかしさの正体である、身体と心の向きという些細な齟齬が、今の千佳には何よりノイズだった。

その、余りにも可愛らしいおねだりを背中越しに受けた男が、硬直する。体の動きもそうだが、何よりまだ硬くなれるのかというほどに、そのちんぽが千佳のおねだりを受け止めて。

緩やかな動きが突如として止まる代わりに、己の膣内で更に硬さを増したちんぽを感じ、千佳のもどかしさが頂点に達する。

下腹部にぞわぞわとした蟻走感さえ感じ、瞳が黒目の輪郭を危うくさせるほどに潤んだ。

首を最大限によじり、呆けた男の顔を捉える。

次いで潤んだ瞳が男の瞳と結ばれる。

そして、千佳の口から、今度ははつきりと、男にトドメを刺す爆弾が投下された。

「も、いぢわる、しないでえ……♡♡ えっち、してよお……♡♡」

起爆されたその破壊力は、凄まじかった。

「チ、チカ……っ……チカあっ！」

「んきゅううううー！♡♡」

男は千佳の足を解放すると、いつぞやそうしたように繋がったままで器用に千佳の身体を回転させる。

一際強い快感がちんぽの回転によつて擦られたおまんこから頭頂までを貫き、くぐもつた悲鳴じみた嬌声が上がつたが、そこに拒絶の色は一切無かつた。

ぢゅぷんと、男のものが一段深みへと誘われる。最早待ちに待つたと言つても過言ではないそこは、硬度も大きさも先程より幾分だけ増した男の剛直を、その僅かな差さえ敏感に感じ取りながら熱烈に歓迎する。

「これ、これえ♡ もつとお……♡♡」

しかし、待ち望んだピストンは来ず、もだもだと千佳は腰をくねらせる。幻視される水滴は勢いこそ増したが未だ滴の域を超えず、もう少しで届く膣内のお口がキスをせがむように収縮した。

「やあ……もう我慢れきないよお♡♡ してえ、どちゅどちゅう♡♡ もうあたし、全部きもちくなれましゅからあ♡♡」

蕩けきつた眼差しが男のそれと交錯し、甘えの言葉がより淫猥さを帯びる。

千佳のもどかしさをすべて理解し、しかし男は腰のグラインドは始めない。その前に、千佳のセックスの誤解を解かなければならない。男が与えてしまつた齟齬を修正して、初めてそこからセックス——千佳の望む「えっち」なのだと理解させることが、彼

の第一の贖罪だった。

「はやく……はやくう♡♡ いぢわんむっ!♡♡」

千佳のおねだりを中座させたのは、男の唇だった。千佳にしてみれば最早キスとも言えない仄かな触れ合い。続くはずの舌は無く、代わりに啄むように軽いキスが落とされる。

「んっ♡ みゅっ♡ む♡ んむっ♡♡ ぷあっ♡ んむあ♡ まっ♡ちゅっ♡♡
まっへ♡ むんう♡♡」

静止しようにも、柔らかい触れ合いなのに頻度が激しくてそれができない。

びちよ…びちよびちよびちよ

頻度のせい、幻視の滴が千佳の脳を浸し始めるほどに連続したものになっていく。ただし、未だ流れには至らず、千佳のもどかしさは治まりを見せる様子がない。それなのに。

(これえ……しゅきい♡♡ いっぱいのちゅー、やさしーちゅー♡♡ しゅきらよお♡)
脳裏の声さえ呂律が回らなくなるほどに、この優しいキスの乱れ打ちを、千佳はお気に召していた。

「んちゅ♡ちゅっ♡♡ちゅー♡ちゅっ、ちゅちゅっ♡♡」

啄みに対して、啄みを返すほどに。そうして、繰り返す都度に段々と、間隔が短くなっ

ていく。そして代わりに、触れ合いの時間が長くなっていく。

「ん……♡♡♡ ちゅう♡♡♡ ちゅ……♡♡♡ ちゅ……♡♡♡ ぷぁ♡」

やがて、千佳は男に纏り付くように両腕を男の身体に巻きつける。必死で自ら男のペニスを口内へと突きこんだあのときとは違い、純粹にただ、より近くへと自身を持っていきたいがためのその行為の名を、抱擁ということには思い至らぬまま、千佳は両親にさえ久しく顛にしていな「甘え」を言葉だけでなく行為としても表現する。

「たりない♡♡♡ たりないよお♡♡♡ もつろ、もつろいっばい近くにしていえ♡♡♡ んむう♡♡♡ れろ♡♡♡」

欲求を口に出し、次いで行為として男の唇をその可愛らしい小さな舌でノックする。それが求めているものは明快で、男にも、その女らしくもつつましい要求へ応じるに否やは無い。

啄みのために閉じられていた門戸は開き、我慢できないとばかりに千佳からその中に舌を踊らせる。迎えるのは同じ器官。擦れ合う性器とはまた違う近さでそれらが絡まり合う。

「れろ♡♡♡ れるれる♡♡♡ んむぁ♡♡♡ んちゅ♡♡♡ れろ♡♡♡ んにゃ♡♡♡ ちゅちゅ♡♡♡ びちゃ♡♡♡ くちや♡♡♡ にゆる♡♡♡ んちゅう♡♡♡」

唾液が混じり合う音が卑猥に響き、舌と舌が絡まるたびに、ろくに動かしてもいない

性器の交わりまでも深くなったように錯覚する。

愛液が量とともに熱さを増し、それを感じた剛直がぴくりぴくりと痙攣する。

それが嬉しくて、千佳は奉仕への見返りのように舌の動きを激しくした。交換される唾液さえ一滴も逃すまいと、男もそれに答え、最早直前までのバードキスの面影などここにもない、男女の欲を満たすためのフレンチキスが繰り返される。

互いが互いを求めて、心のすり合わせを身体で表現し合う。その渦中に身を置いて、千佳もようやく理解した。自分だけが気持ちいいのではなく、相手だけが気持ちいいのではない。自分だけが気持ちよくされるのではなく、相手が勝手に気持ちよくなるのではない。自分が気持ちよくなりたいたいだけでなく、相手が気持ちよくなりたいたいだけでもない。相手から気持ちよくされるだけでなく、自分も気持ちよくしてあげたい。

心の向きを、身体をつながりを以て、互いに揃え合ういまの行為こそ「セックス」であり、「えっち」なのだ。

「ぷあっ♡」

それを理解した瞬間、どちらともなく舌の交わりが停止した。極限まで近づいていた顔と顔は離れ、かつてもあった名残惜しさの証が再び糸を引くが、かつてのように心の距離は遠くない。

互いが互いに、その時を理解し、目線が交差する。

「……………」

「……………」

身体の火照りの意味など、とうに知っている。短い沈黙は放熱のためでなく、言葉にせずとも互いに想いが同じであることを確認するためのアイコンタクトのためのもの。

しかしてそれは

「チカ……」

男が女の名を呼び

「……………（くくり）」

女が領きを以て男へ返したことで破られた。

それ以上の言葉は必要なく、むしろ用を為さない。男が千佳の背へと腕を回し、その身を抱きしめる形で持ち上げる。千佳へと与えられる僅かな浮遊感を経て、正常位という体位が全く別のものへと変更される。

互いが互いを抱きしめ合いながら、女が男に跨るその体位の名は対面座位。千佳の潤んだ瞳と男の誠実になった瞳が、高度を変えて再び交わる。

そこからは、領きさえも要らなかつた。

ずちゆうつ

「はぎゆうゆううつ♡♡」

男が千佳を抱きしめた力を僅かに緩めると、千佳の身体が下へとほんの数センチ降下する。とすれば、変化が起こるのは繋がりあったままの結合部だ。男の剛直がその距離分、千佳のおまんこを掘削し、待ちかねた刺激に千佳の身が反る。

ぬちっ、ぬちっ、ぬちっ、ぬちっ、ぬちっ

「ひああ♡♡ これえ♡♡ まつてたの♡♡ あなたのおちんちん♡♡ わたしをきもちくしてくれるおちんちん♡♡」

「どうっ、チカっ。いいか？ こうか？」

「んはああ♡♡ とちゅとちゅしてる♡♡ おまんこきもちーよお♡♡ しょこお♡♡ あなたがおしえてくれたきもちーとこ、こしゅれるう♡♡」

「可愛い、俺のちんぽでよがるチカ、可愛いぞっ」

「みやああ♡♡ 誉めないれえ♡♡ いまあにやたにほめられりゆと、きゅんきゅんしゅるからあ♡♡」

「ダメだよ。可愛いものを可愛いって言って何が悪いっ」

はむっ

「んひい♡♡ ちくびい、くわええ♡♡」

善がる千佳が反らした背に従い、突き出されたおっぱいの蕾を男が啜えれば、ぴんと勃起したそこから脳天を貫く快感が彼女を襲う。

ぷしゅうつ

「ふああっ♡♡ おしるれちやらめっ♡♡ きもちーのばれちやうう♡♡ このかつこしゆきなわかれちやうよお♡♡」

「とつくにばれてるからっ、気にすんなっ」

その刺激で軽く絶頂を迎えた千佳のおまんこは、喜びの潮を吹き上げる。白濁した本気汗が男の下腹を濡らし、その熱が更なる熱を呼ぶ。

駄目と言いつつも最早白状に近い千佳の言葉。その素直さが嬉しくて、男の腰の動きが増す。

「きやふっ!?!♡♡ ひああん♡♡ おちんちっ、奥にキシユしてりゆ♡♡ とんとんきしゅ♡♡♡ わりやひのしゆきなやちゅう♡♡」

「それだけじゃないからなっ」

「んほおお♡♡ らめっ♡♡ とんとんとグリグリいっしょにしにやいれえ♡♡♡♡ まらくりゆ♡♡♡ きちやうう♡♡」

「いいよ。何度でもイって、辛くなったらやめるからっ、気持ちいいうちは好きさだけイっていいんだっ、チカっ」

「やらやらあ♡♡ わらひらけイクのやらあ♡♡♡ らってこれえっちらもん♡♡♡ わらひらけきもちーのはえっちりやにやいもん♡♡」

「くくくっ！ ……大、丈夫だチカっ、俺もっ、すげっ、気持ちいいからっ」

「ほんろっ？♡ あにやたもきもちーのほんろっ？♡♡」

「ああっ、チカのおまんこ気持ちいいぞっ」

「あは♡♡ ほんとらあ♡♡♡ おちんちんっ♡♡ わらひのにやかでびくびくしてう

♡♡ よろこんでりゆのわかりゆう♡♡」

「かわいすぎかよ、このっ」

いつしか二人の交わりの内に、千佳の両の脚までも男の身体をホールドするように回されていた。

四肢を余さず用いて全身を男に擦り付けるようにしがみつくその体勢は、俗に「だいしゆきホールド」と言われるもの。つい先程まで無垢であった千佳も、異界から来た男もそんな名称など知るはずもないが、両者ともにこの密着具合はクセになるものだと認識する。

鼻と鼻が触れ合うほどに密着しながら、どちらからともなくその唇を重ねる。それだけでは飽き足らず、貪り合うように唾液の音を立てながら、最早慣れ親しんだ味の舌を絡ませ合う。

じゅぞぞっ、ぴちや、くちゅ、れる、れる

「んむっ♡♡」

「むあつ、チカつ、チカつ、んむつ」

「んにゆ♡ こりえつ、いいよお♡♡ んんつ♡♡ んむ♡」

何もかもを絡ませ合いながら、奥を小突かれる。体位のせいかな、より近しさを感じ、昂ぶりは留まるところを知らない。

最早単純なピストンさえ、共同作業だと思えば甘露の極み。擦れ合う淫らな器官とは裏腹に、互いともに、そうすることで相手が気持ち良くなってくることが嬉しくてたまらない。

男が千佳の蕩けた顔を見つめる。ふにやりと仄かな笑みを浮かべたその表情が、一突き毎に変化する様を楽しむ。

「うあつ♡ きゆうう♡♡ ひああああ♡♡ んにゆつ、んにやあん♡♡ きもひ♡♡
とけりゆう♡♡」

先までの蹂躪とはまた別の征服感。この娘が自分の腕の中で、自分が与える快楽を受け入れながら乱れ悶える姿がとてつもなく愛おしい。何よりも、受け入れられているというその実感が、それまで男の知らなかった温かさでもって彼の胸中を満たしていた。

自分の肩に回された細い腕も、慎ましやかながらピストンのたびにふるふると存在を主張するおっぱいも、恍惚の息を漏らしては噤まれてを繰り返す触れれば柔らかな唇も、汗ばんだおでこに数条張り付いたさらさらの髪も、その全てが可愛らしくて仕方が

ない。

「チカ……かわいいいつ、かわいいよチカっ」

溢れた気持ちはそのまま言葉となってまろび出た。

それを与えられた千佳の頬が、さらに朱に染まる。

「らめ♡♡ ほめながらズンズンしゆるのりやめえ♡♡ しゅごいから♡ 大事にされてりゆのわかつちやうかりやああ♡♡」

対して、彼女もまた男の表情を蕩けた瞳で見つめる。

眉値を寄せて、しかし決して辛いわけではないとわかる強い眼を見る。その視線は常に千佳の反応を探っていて、本当に彼が自分に気持ちよくなつてほしいということが分かる。

初めて、女として男から与えられる無償の奉仕。いや、無償と言うには代償が大きすぎたというのが事実ではあるが、結果として彼を受け入れた、受け入れてしまった今となつては、ただ千佳だけに与えられるその快樂のなんと甘美なことか。

男のおちんぼは今も、時に奥を小突き、時に浅く擦り、更には千佳お気に入りGスポを責め立て、動きとしては体位的に不完全なはずなのに、先程までのがつつきセックスより余程昂ぶっていくのは、それが千佳の望むタイミングをほぼ外すことなく的確に責められているからだろう。

勿論、それは男のみの動きで叶うものではない。千佳からも、動きに調整を加えながら、可動域としては狭い体位でのセックスに耽る。千佳には、もうそうすることができていた。何故なら、既に男のちんぽをより良いところに導くのは、無意識ながらもしてしまつたことがあるから。

千佳の生来的な真面目さと、男の千佳にのみ注がれる奉仕心が、二人のまぐわいを「えっち」にしていくな。

とはいえ、最早互いに限界は近かつた。これまで数え切れないほどイカされた千佳は元より、既に特濃の性を吐き出した男とてそれは同じ。

「んっ♡あっ♡らめっ♡イクっ♡♡もうきちやうっ♡んああああー!♡♡」

千佳の甘イキが始まる。こうなつてしまえば、千佳の幼くもえろえろな身体は上り詰めていつてしまうということは、もう嫌というほど分かつている。

イクことで強く締め付ける癖を持つ千佳のおまんこが、きゆうきゆうと男のちんぽを甘噛みし始める。千佳の快感はいつしかの滴下の幻視などとうに過ぎ去り、その許容量はいつの間にか表面張力ギリギリといったところまで達していた。

知らなかつた。あれだけめちやくちやに快樂を叩きつけられた性交は元より、大事にされながらの性交はそれに勝る気持ち良さや齎すなんて。

知りたくなかつた。互いを絡め合い、互いに絡め取るセックスに、自分が耽溺してし

まうなんて。

見つけたくなかった。自分とまるで違う境遇の、自分とはまるで違う価値観の人間が、自分とはまるで違う孤独の中に、その辛さも知らずに佇んでいたことなんて。

(でも、もう戻れないよお……)

でも知ってしまった。見つけてしまった。そして見つけられてしまったのだ。

自分の孤独を見つけてくれた人。千佳が否定する千佳を必要としてくれる人を。そして、最早その与えられた快樂は、ただの性欲以上にその相手を離れ難くしてしまった。

故に求める。千佳自身の言葉として、この行為の終着を。

「んあっ♡♡ いってりゅ♡♡ イってましゅ♡♡ れも違うの♡♡ もつろおつきい

の♡♡ あのビックビックほしいよお♡♡」

「チ、チカ……」

「いっしょ♡♡ いっしょにいい♡♡ わらひのおまんこ、もうあにやたのものからあ♡♡

♡んあ♡♡ あなたのおちんちん♡♡ わらひにちよーらしい♡♡ さつきみたいにやの、

ちよーらしいよお!♡♡」

「くっ、締まる……っ」

「いぢわるしにやいれっ♡♡ んひいん♡♡ やらよお♡♡ もう独りはいやらよお!

♡♡」

それは、本音だった。とうとう、心の底から男を求める言葉が、口をついて出た。それは同時に、「あなたもでしょう？」という問いかけでもある。

その言外の問を、千佳限定で察しの良くなった男は過たず受け取る。千佳の求めと、己の求めの合一を得る。

「千カツ、行くぞっ！ お前はもう俺のだっ！ 俺の女だっ！」

「ふああっ!?♡♡ んきゆううう!♡♡」

途端、千佳の身体を支えていた男の腕が、保持していたそれを重力に半ば委ねる。しかし、忙しくも乱暴ではなく千佳を横たえ、待ちきれぬとばかりに一突きを与える。

一瞬の驚きと、その空白を即時に埋めた肉棒の熱さを最奥に叩き込まれて、千佳が悲鳴じみた嬌声を上げた。

そこからはもう止まらない。

「んあっ♡ おほっ♡♡ こりえ♡♡ しゅご♡♡ んおっ、んあっ、んきゆう、ああん♡♡」

「この、おまんこもっ、俺のだっ！ もう誰にも渡さないっ、渡さないからなっ！」

「ひゃいい♡♡ あにやたのれしゅ♡♡ わらひのおみゃんこっ♡♡ もうあにやたのかたちになやっつましゅ♡♡ んほっ♡♡ ひゃあん♡♡」

「このおっぱいもだからなっ！ かわいい乳首もっ、俺のっ、俺のだっ♡♡」

「きゅふうう♡♡♡ ちくびこねこねえ♡♡♡」

「唇もっ」

「んむう♡♡♡ れるっ♡♡♡ にゅあ♡♡♡ ぴちや♡♡♡ くちゅう♡♡♡ れるれる♡♡♡

ちゅうう♡♡♡」

「ぶはっ、このベロも、腕も足もおしりも、全部っ」

「んきやああああ♡♡♡ はげしっ♡♡♡ にげにやつ♡♡♡ わらひ、にげにやいかりや♡♡♡

あにやたのこと、れったいゆるしやないからっ♡♡♡ ゆるしゆまで、ぜったいはにや

れにやいかりやあっ♡♡♡」

「ああっ、チカっ、ごめんっ、こんな俺の物にしちやつてごめんっ」

「あやみやつても♡♡♡ ゆるしやない♡♡♡ じゅっと、じゅっとお♡♡♡」

「ありがとうっ、ごめんっ、ありがとうっ」

「んああああ♡♡♡ おれいにやんていりやないよお♡♡♡ んひい♡♡♡ やらっ、イクっ♡♡♡

まらイクっ♡♡♡」

「いくらでも、イつていいからっ！ 俺があげられるものなら、全部、お前につ」

「んほっ♡♡♡ んおっ♡♡♡ やらっ♡♡♡ みにやいれ♡♡♡ わらひっ、いま、きつとへん

にやかおしてりゅ♡♡♡ だりやしないかおしてるう♡♡♡ おんっ♡♡♡」

「どんなチカだつて、俺のだっ！」

男は千佳へと腰を叩きつけるようにピストンを繰り返しながら、支離滅裂ながらも包み隠さぬ本音をぶつける。腕の中の少女をがっしりと抱きしめ、その逸物を最奥へとぶちこみながら、少女の所有権を叫ぶ。

打ち込みの度に、少女のおまんこから歓喜の雫が迸る。男が所有権を叫ぶならば、無言の、しかし何より雄弁な女としての本能で、同じことを返すかのように。

ずんずんと、千佳の待ち望んだ激しいピストンが彼女を穿つ。穿たれる都度に彼女のおまんこがきゆうきゆうとちんぽを搾る。

その激しさの中に、しかし始めとは異なる確かな千佳への労りがあつて、それに気づけてしまう自分を知覚して、もうこの男から離れられないことを千佳は悟る。

だが、千佳だって離してやるつもりなど既になかった。この最低の男は、それでも千佳のひた隠した千佳を暴き立てたのだ。見つけられてしまったのだ。見つけてくれたのだ。例えその形が歪んでいたとしても、否、歪んでいたからこそ、こんな男を野放しにはしてはいけないのだ。自分につなぎ止めておかなくてはならないのだ。

そんな風に、脳内でさえハチャメチャな理屈を付けて現状を強引に肯定しようとする。そのことに気づいていながら、千佳はそれに任せた。そんなものにも任せなければ、眼の前の男に抱いている感情を認められないから。認めてはいけないから。自分を今も責め立てる凶悪なおちんぽは、他に向けさせてはいけないのだと。こんな、こんな

気持ちいいものは、自分専用にしなさいといけないのだと、そんなとんでもないことを考えそうになってしまいうから。

だって、もう身体は堕ちてしまっている。この男に理性を蕩かされて、淫猥なメスの部分をほじくられて、重厚な快楽を叩きつけられて、あまつさえそんなところから秘めた己を見つけ出された。

最後の一つだけ、それだけで、千佳の心は満たされてしまったのだ。本当は見つけてほしかったという、自分でさえ気づいていなかった本当の弱みを、この最低男が握ってしまったから。そんなものを握られては、もう離してなどやれない。離れてなどやらない。

許さないといったのは紛れもなく本心だ。いつまでも、どこまでいつても許してなどやらない。何故ならば――

「わらひつ、ひとりにしにやいから♡♡ あにやたをひとりにしにやいから♡♡
ずつと、ずうーつと許さないかりやあ!♡♡」

許さないという名目さえ保てる限りは、自分に最低なことをした男であっても、傍らに居続けていいのだから――

「わらひは、あにやたのらから♡♡ あにやたのものらからあ!♡♡」

だから、それを肯定しても、いいのだ。男の叫ぶ所有権は、叫ばずにいられないそれ

は――

「しょんなに、こわがりやなくても、そばにいりゆから♡♡　ゆるしやないで、いてあげりゆから♡♡」

自分が彼から掘り起こしてしまった、「失う怖さ」に他ならないから。

「――っ！」

一瞬だけ、男が千佳から目を逸らす。余りにも余りある男への言葉が衝撃的過ぎて、それを贈ってくれた少女を直視できない。

それは、男にとっては天啓に等しい。我知らず望んだ孤独からの解放を、指し示してくれた少女がまさに寄り添いを選んだというとてもない解放感と共に、去来する圧倒的な罪悪感。

よりにもよって、掘り起こしてしまった。自分という最低の人間が、偶々己の欲をぶつけた相手が、アマトリチカという形を伴った天の使いであるかと錯覚するほどに。

そして同時に、余りにも嬉しかった。彼女が知らしめた天啓を、彼女自身に怖れるなと言ってもらえたその荣誉が。

だからこそ、呆けてなどいられない。

きつと、この瞬間だった。男が、ただ一人の少女のために、完全に独りを捨て去ることに決心が着いたのは。

怖れるなど、彼女が言ったのだ。他ならぬ、自らが変えてしまった少女が、変わった自身を恐れるを超え、変えた男を畏れるを超え、どこるか男の怖れを包み込んだのだ。男の視線が戻される。そこにあるのは蕩けながらも、こちらを真つ直ぐに見つめてくれる千佳の瞳。

無言の交わしさえもう幾度目かを数え、二人がどちらからともなく抱擁の姿勢となっていた腕を解き、時置かずして掌が重なる。

指が絡まる。孤独の恐れを知った男と、孤独の恐れを知っていた少女の心が、それと共に繋がる。

そして以前より繋がりを得ている性器同士が互いともなく痙攣を得る。そこから齎されるのは、より深い合一による快樂の貪りだ。

「ああ……………」

千佳の瞳が期待でさらに潤む。対して、男は透明感さえ覚える眼差しで、出会ってから最も誠実な——最早忠実とさえ至った視線を送る。

「……………俺はもう、君のものだ」

「っー♡♡」

そうして、男が初めて自らを捧げる誓句を告げた。

きゆうんと、千佳の子宮がそれに疼きを得て、やがてどちらからともなくセックスが

再開する。

動き出しはゆっくりと、しかし、それは注送のタイミングを合わせるための助走のよ
うなもので、間を置かずしてその動きが先程同様の激しさを得る。

「んあつ♡♡ わらひのつ♡ これわらひのおちんちんつ♡♡ 当たるう♡♡ きもち
いいとこ全部あたってりゆよおつ♡♡ んあつ♡♡くひいつ♡♡」

ズンズンとピストンのペースが上がる。絡み合った指が握り合うのに合わせて、千佳
おまんこが男のおちんぼをきゆうきゆうと搾り上げる。

心は満ちた。あとはまぐわいの内に掻き出された子種を、再び膣内へ、子宮へ溢れる
ほどに満たしてほしいとばかりに。

「ああつ、最高だ！ 千佳、お前の、俺専用おまんこ、最高だつ！」

「んきゆう♡♡ もつとお♡♡ もつとろちゆるちゆして♡♡ おまんこのおきゆ♡♡

せちゆないのじえんぶつ♡♡ あにやたのつ♡♡ わらひせんようおひんひんで♡

♡♡ いっぱいにい！♡♡♡♡♡」

ぞくぞくう！と、男の背筋を性的なそれとは別種の快樂が駆け登る。当初、男は自分
の逸物を千佳のみに向けるものにするつもりなど毛頭なかった。実際、千佳に手を出し
始めた頃の男が今のセリフを言われたところで、その心までは届かず、そのセリフを肯
定することも無かつただろう。

だが今は――

「ああつ、俺のはチカ専用だつ！ 他の女なんて要らない、君がっ、いや、お前がいればそれだけでいいつ！」

「んほおおおお♡♡♡ おきゆきたよお！♡♡♡ おちんちんも、あにやたのことばもおつ！♡♡♡ しょんなこといわれたりやつ♡♡♡ きゆんきゆんとまんないよおつ♡♡♡」

肯定どころか、それ以上の奉納で返さねば気がすまなかつた。彼女が自分を専用と言つてくれたのだ。その天意に等しい宣言に、男が出来るのは彼女の膺奥を望みのおりにしながら、己の欲さえも捧げることのみ。

互いの性器はどうとう共有物へと成り果てた。千佳のでありながら男に征服されたおまんこと、男のでありながら千佳へと奉じられたおちんぼとが今まで以上に睦み合いを密にする。

「いいぞチカつ、もつときゆんきゆんしろつ！ その度にまんこもきゆうきゆうして最高だぞつ！」

「んおつ♡♡♡ んおつ♡♡♡ お、んっ♡♡♡ やら、へんにやこえでう♡♡♡ おげひんな声れてうう♡♡♡」

「下品でいいんだつ、俺のちんぽにおまんこいじめられてるときは下品でいいんだつ！」
「んおほおおおおお！♡♡♡ ぐりゆつてしたあ！♡♡♡ しきゅーのおくちぐりつてひ

たあ!♡♡」

「そこだけじゃないぞっ!」

「ひゅわあ!?!♡♡ これしゅきい!♡♡ ざりいつてしてからぐりゅうつてしゆるのら
いしゅきい!♡♡」

ストロークがより大きくなり、Gスポを掠めてからのポルチ才責めが始まると、与えられる快感に千佳の喘ぎが大きさを増す。

いつかの動きは、しかしいつかとは比較にならない快感をもたらし、千佳の膣口からはひっきりなしにぶしゅぶしゅと喜びの潮が吹き出される。

甘いキなんてとうに終え、今ではピストンの度に本イキしている。もう気をやらないのが不思議なほどなのに、まだまだ身体は貪欲に快楽を求め続けている。

「ひんっ♡♡ ひああ♡♡ うにゅっ♡♡」

「乳首ピン勃起ちさせておっぱいプルプルさせてっ! こんなにちっちゃいくせにつ、ちっちゃいくせにつ! じゅぞぞぞっ!」

「おおおおおん♡♡ 乳首吸っちゃらめえ!♡♡ おまんこがいいのお!♡♡ いまは
おまんこらけがいいのほおおおお♡♡♡♡」

「うあっ、締め付けてっ……」

「もっろ♡♡ もっろわけわかんなくしてえ!♡♡ あのしゅごいのもつかいほひい

いん！♡♡」

「だから乳首も責めちゃうんだよっ！　ほんとこれはこれ大好きだろっ、はむっ、れろれろれろおっ！」

「きゅふうううん♡♡♡　はひ♡そうれしゅ♡♡　ちかのはしたなくおつきしたちくび♡♡　いじめられりゆのらいしゅきれしゅ♡♡　いぢめてほしくて嘘ちゅきましたあ♡♡　にやああ♡♡　ちゅっちゅしにやがらろちゅろちゅう♡♡　きもひいよおお♡♡♡」

「俺も気持ちよすぎるぞっ、乳首いじめるとうねるチカのまんこ、最高に気持ちいいからなっ！」

「おんっ♡♡　おんっ♡♡　わらひもっ♡きもちーれしゅ♡♡　わらひのにやか♡♡　ぎっちり埋めてくれりゅおひんひん♡♡　しゃいこーにきもひーんれしゅうう♡♡♡」

言葉を交わすたび、次第に理性が溶けていく。千佳のは元より、男の瞳にも獣欲の炎が再度宿りだす。

目の前のオスに蹂躪されることを望むメスに、己の欲の丈をすべて注がんとすることのみに思考が支配されていく。

もし、ここで千佳が僅かでもそれを望んでいなければ、男はその腰の動きを即座に止

めただろう。だが、動きはより激しさを増す。最早単調なだけのピストンしか欲しない——というより、単調なだけで十二分に気持ち良い域に達した千佳おまんこは、その優秀さをここぞとばかりに発揮し、うねり、搾り、締め付け、専用おちんぼケースとして男のペニスと睦み合う。

子宮口は鈴口とのずんずんキスの度にちゅばちゅばと吸い合いを堪能し、ストロークが大きければ、膣口は話さないとばかりに、その締め付けを以て身体同様のだいしゅきホールドを摩羅へと極める。

そうなつてくると、満ち満ちている淫穴と対象的に、寂寥感を感じている穴があることに千佳が気がつく。

(ふああ、おちんちんいいよお、おまんこ喜んでるう♡ でもでもお、今度はお口が寂しいよお♡♡ 気づいてほしいよお♡♡)

最早素直さが振り切った感のある甘えた思考の中、それでもどこか一步引いた自分にも、同時に。

(い、いいんだよね？ はしたなくても、おねだりしていいんだよね？ だって、この人はもうわたしのもので、わたしはこの人のものなんだもん♡ さつき、お下品でいいって、言ってくれたもん♡♡)

気づいてしまえば、免罪符を見つけてるのは容易かった。なにせ交わり合っている当人

から与えられたのだ。そして、千佳も、ここまでくればもう彼がどんな自分でも受け入れてくれることに疑いの余地などなかった。

それは、師である木崎レイジに対して感じるようなそれとは別種の信頼感。見守られ背を押してくれるのではなく、向かい合い身を委ねることのできる手合い。

それを呼ぼう名前に、千佳がこの時点で思い至ることは出来なかったが、今も続く激しいピストンにあんあん喘がせられながら、その顎をクイツと男の方に傾けることは出来た。

(……わかってくれるよね?♡ だって、『わたし』に気づいてくれた人だもん♡)

期待を込めて、思惑を込めて、求める視線を送る。キスがしたい。舌を絡め合いたい。本当ははしたなくも直接言葉でお願いしたいけど、気持ちよすぎて声にならないから、だから気づいてと。

それはほんの僅かな動きだった。それこそ、普通であれば見落としてしまうくらい。だが、男はそれにきちんと気付き、そして応じる。

(ふわあ♡ 近づいてくるよお♡ やっぱり気づいてくれたあ♡)

こんな小さなおねだりに目敏く気づいてくれたという事実、千佳の心が温かくなる。近づいてくる唇を受け入れるべく、その数瞬でなんとか深い呼吸をして息を整える。舌が絡み合いだせば当然呼吸は鼻からしかできないが、今更ながらも千佳は相手に

鼻息が当たるといふのが恥ずかしいと思えたのだ。

しかし、そんな千佳の初心初心しい乙女心は、全く予想外の形で裏切られることになる。

ほんのりと開かれた唇が重なり合う。気づいてくれたお札にと、千佳から男へと舌を差し入れる。水音がなり、それが濃厚に絡まり出す——ハズだった。

(あれ?)

千佳の舌が男の舌に触れても、男のそれが微動だにしない。どころか、腰の動きまで止まってしまった。

(な、なんで?)

それに狼狽えた千佳が舌を己の口内に差し戻し、頭を引こうとした時である。

ガッ

千佳の両手が不意に自由を得たかと思うが早いか、後頭部を男の手で押さえつけられ、残った腕で強く抱きすくめられる。

!?!?!

唇は触れ合ったまま、強く抱きしめられて思わず呼気が上がった。それをすうーっ

キスしたままの男が吸う。千佳の吐いた呼気はそのまま男へと流れ込み、

ふうーっ

返す刀で、今度は千佳へと男の呼気が送り込まれた。

(!! これ、これえ!?)

すうー、ふうー、とお互いの肺の空気が共有される。相互に人工呼吸をしているような様。がっしりと力強く抱きしめられて離れることもできず、千佳は予想だにできなかったそのキスを甘受する。肺腑さえも互いで満たされることが、苦しくも狂おしいほどに心地よい。

(ひ、ひとつになつてるう♡♡ わたしたち、ひとつになつてるう♡♡♡)

呼吸という、生存のための行為さえも強引に共有物にさせられる感覚に、背筋が震える。それは恐怖などでは決してなく、ただただ喜びと快感故に。

酸素が薄くなり、次第に思考がぼやけていく。それでもふたりは、鼻で呼吸を補うことさえ忘れて、僅かの間、互いの息さえ貪り合っていく。

(しゅぐ……いよお……♡ なんてえ♡ なんてこの人、こんなにやことできるのお♡♡)

溶けていく。思考とともに、また二人の身体の境界線が溶け合っていくあの感覚。思いましなかった、思った以上のとんでもないキスをされて、千佳の奥底がきゅんきゅんと疼いた。

時間にすればほんの十数秒程度の、しかし永遠さえ感じた交感キスは、今度こそ千佳

をぐずぐずに蕩かした。

二人の唇がゆっくり離れる。それとは対象的に、酸欠の身体が大きく酸素を取り込もうとする。

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ、はあああ♡♡ しゅご、しゅご……かつたああ♡♡ ふわつて、したあ♡♡はあーつ、はあーつ♡♡」

せめてもの感想を男に伝えるが、帰ってくる言葉はない。ぼやけた視界に男の顔が映り、その眼を捉えた瞬間、千佳はその意味を理解した。

(あ……♡♡)

そこにいたのは、一匹のケダモノ。荒ぶる獣性を必死で抑え込んだギラつく視線。乱れている呼吸は、息を整えるためというには情欲の色が付きすぎていた。

留めようとしているのだろう。ともすれば本能のままに再び自分の淫欲を優先して千佳を貪ろうとする己を、必死に。かつての轍を踏むまいと、歯を食いしばって。

(かわいそうな、人……♡ でも、いいんだよ♡)

その姿を、自分がそうさせた姿を見て、憐憫さえ感じた。だから、千佳は——
きゆう……

つながったままの男のちんぽへ働きかけるように、己の意思でおまんこを締めた。

「っ!？」

ハツと男が千佳の顔を見る。千佳もまた同様に。男のひとつだけしている思い違いを直すために。

「……チカ、ごめん俺んむっ!？」

千佳は、謝罪を口にしようとした男の口を、自分の口で塞ぐ。それはキスではなく、ただ、この敏くなつたくせに肝心なところで鈍い男を誘うための口吸い。野暮な言葉を封じ、千佳の舌が男の唇をひと舐めして離れる。

呆然となつている男に、千佳は言った。

「……めしあがれ♡」

貪つていいのだと、むしろ雨取千佳も、貪られるようなセックスを所望しているのだと。

効果は、抜群だった。

「うおおおおおおおおお!」

「ふあっ?! んほおおおおおおお!♡♡」

両膝の裏から背に腕が差し込まれ、身体が一気に持ち上げられた。驚いて男の両肩に手を伸ばしてしがみついたと同時に、今度は落とされ、抜けかかったちゃんぽがおまんこの最奥に一息でぶち込まれ、自分のものとは思えないとんでもなく下品な声が迸った。

「ふんっ、ふんっ、ふんっ、ふんっ、ふんっ、ふんっ!」

「んおおお！♡♡ お、っ♡♡ お、っ♡♡ んああああ！♡♡ にやにこれ♡にやにこれええええ！♡♡」

バチュンツッ！バチュンツッ！と、尻肉が男の体に叩きつけられる度に激しい音が耳朶を打つ。対面座位などでは足りぬとばかりに、駆弁スタイルでの、一転して激しさを最大にした貪りファックが千佳に極まる。ポルチオ一突きごとに、メス声が彼女の意思とは無関係に漏れ出る。

「おひっ♡♡ おおおおんっ♡♡ はげしっ♡♡ れもこえしゆきっ♡♡ わらひのからだっ♡♡ しゆきにしていかりやあっ♡♡ もつろ♡♡ もつろしてえええええー！♡♡」

「おおおおおおおつ、チカっ！ チカまんこっ！ 俺のっ、俺だけの女！ おらっ、おらっ！ 俺のちんぼのことだけ考えろっ！ チカの全部ちんぼ潰けにしてやるっ！」

「んごおおおお！♡♡ しきゅーのおくちい！♡♡ らんぼーなきしゆもつとしてえー！♡♡ わらひを全部食べていいからあ！♡♡」

「言われなくてもっ！」

「んぶうっ♡♡ じゆるるっ♡♡ れろれろ♡♡ ぶあっ♡♡ んひいつ♡♡ んおっ♡♡ おおおおおおんっ♡♡」

獣の交尾とてもう少しは容赦があらうというほどの激烈なピストンを、千佳の身体は

快樂として受け入れる。なにせ、初めに教え込まれたセックスなのだ。千佳の優等生まんこがそれに順応しないはずがない。

男もまた、その贅の限りとも言える据え膳を、とうとうマナーなどかなぐり捨てて貪り倒す。もはやその腰の動きが緩む気配などまるでない。

「おごっ♡♡おおおんっ♡♡ イグッ♡♡ まらイグよお！♡♡♡♡ らんぼーえっちで♡ 食べられてりゅ♡♡わらひ食べられてりゅよほおおお♡♡♡♡」

「イけっ、チカのイキまんこっ、もつとイかせてやるっ！ 平らげてやるっ！」

千佳の身体をオナホのように激しく上下させ、その極上の蜜穴にひたすら杭打ちを続ける男。

望み以上の激しさに、翻弄されながらも順応して肉棒を味わう女。

「あぎゅっ♡ おふっ♡♡ お、お♡ くひいつ♡ いひひひひひ♡ おひんひん♡♡ ちゅよいよお♡♡ イってりゅ♡♡ イキながら♡ じゅぼじゅぼっ♡♡ しゃれたりやあ♡イクのとまんなひひひひひん♡♡」

「止まなくなくてやるっ！」

「ふああっ!?!♡ ごちゅん♡ちゅんつてえ!♡♡」

「ずろお!バチユンツ!ずろお!バチユンツ!」

ちんぽが亀頭付近までおまんこから抜かれ、抜けそうになるやいなや子宮口までブチ

込まれる。乱雑で、粗野で、単調な、しかし激しい駅弁セックスに、ぷしゅぷしゅといキ潮を撒き散らす千佳まんこ。

氣遣いなんていらぬ、緩急も強弱も、今となつては最早無粋な不純物だと言わんばかりに、ただただ激しいばかりの性交にも拘らず、突きこまれる度に男のモノに熱烈なポルチオキス。見た目に相応しく体温高め千佳をしてなお熱々に熟しきつたロリマッコに必要なのは、同じく焼けた鉄もかくやという熱さを得たオスチンポであり、それを得た今、その部位は女性器として最高の快樂を持ち主の脳へと叩き込み続けている。激しく肉打つ音さえ、二人にとっては快樂の山車に過ぎず、千佳はアへりながら男にしがみつき、男はそんな千佳を強く強く抱きしめて強く強く腰を打ち付ける。

メスとして、オスとして、求め求められることがこんなにも甘美なのかと、繋がりがから得られる快樂が許容値を突破した二人の脳髓には、その麻薬的な悦をひたすら貪ることしか浮かばなくなっていく。

「おひっ♡ んぎゅっ♡♡ あっ♡ あっ♡♡ くひいつ♡♡ きもひ♡ よひゅぎれしゅ♡
 んあ♡ ♡♡ わらひ♡♡ ぜんぶ♡♡ も♡ わけわかんなひ♡♡ まっしろらよ♡ん
 おっ♡ おほおお♡♡」

千佳の軽い身体が大きく上下に揺すられるたび、おまんこ全体がちんぽに擦られ、千佳の絶頂はもう数え切れないほど。

「おぎゅっ♡♡んぎっ♡♡おほおおおお♡♡ しゅご♡これきてりゅ♡♡さっきの♡
 「一番深いところ♡きてりゅうう!♡♡」

「うおお、おまんこうねるっ……でもっ」

「はむっ!?!♡♡ じゅぞぞ♡♡じゅるっ♡♡れろれろ♡ちゅぱっ♡♡んむあ♡♡んふう♡
 ♡じゅろ♡♡れるれる♡♡んぶう♡♡にちゃ♡♡ちゅぱっ、ちゅぱっ♡ぷあっ!♡♡こ
 れえ♡♡ このキシユらしいしゅきい♡♡おまんこも♡おくちも♡♡いっばいになりゅ
 ♡♡」

今度は千佳が望んだ通りの舌を絡ませ合うキスを交わし、唾液の橋が離れた唇に掛か
 る。

同時に男のちんぽに襲いかかる暴力的なまでの快感。千佳の膣内がざわざわと蠕き、
 さらにはその締め付けで男から搾精せんと官能的なおまんこハグを極める。腰が抜け
 そうなほどの射精感に襲われるが、あと少しだけ、あと少しだけはそこに至るわけには
 行かないと括約筋に全力を込めて放流をせき止める。

「チカっ、もう、いくぞ……一緒にっ」

「ふあああ♡♡ いっしょっ♡♡♡♡ いっしょがいいっ♡♡ わらひと いっしょにっ♡♡
 もうわらひ、いっばいイってりゅによ♡♡ れもお♡♡ いちばんおつきなビクビク
 ♡ とってありゅから♡♡ いっしょにい!♡♡」

そう、もう限界なのは男だけではない。時には頬の内側を噛んでまで、あのメチャクチャにされた時の最大絶頂を千佳がなんとか堪えていたことは、ベロチューの時に感じた鉄の味で気がついていた。

けだものファックによる暴力的な快楽絶頂を繰り返しながらも、男のモノが最高の満足を得るタイミングまで何とか気をやらずに耐えようとしてくれたいじらしさに、男のペニスが更に漲る。

「んひいいい！♡♡♡ ふといい♡♡♡ わらひのおまんこのなか♡ ミチミチつてえ！♡

♡ あにやたのぜんぶで満たされてりゆよお！♡ んおおお♡♡♡

「ふんっ、ぬあつ、ふんっ、ふんっ、ふんっ！ ぶちまけるぞチカあつ！ お前のおまん

こも、子宮も、全部俺ので埋め尽くすからなっ！」

「きてえー！♡ おちんちん♡♡♡ わらひのおまんこで♡ おしやせーしていいよお！♡♡♡

どぴゅどぴゅしゆるのきもちーからあ！♡♡♡ わらひできもちよくにやってえ！♡♡♡

「言われなくてもお！」

「んきやああああ！♡ きやんっ♡♡♡ きやひいつ♡♡♡ んほっ♡♡♡ んにやあつ♡ つかいとこ

♡♡♡ あたりゆ♡♡♡ んきゆっ♡♡♡ んきゆっ♡♡♡ も♡らめ♡ぎやみやんれきない♡♡♡ おま

んこくるっ♡♡♡ あのしゅごいのくりゆっ♡♡♡

バスンツバスンツバスンツ！と容赦のない種付けプレスが千佳を襲うが、その衝撃は

以前に経験済みで、なおかつ望むところ。

駅弁フアックほどの激烈な突き込みでないにせよ、千佳を孕ませんばかりに子宮口に熱烈なアタックを繰り返され、びくびくと震えだしたオスチンポの動きが、思う存分に精を吐き出すつもりだということを千佳に理解させる。

(あゝこれすごいくる♡ わたし、本当に赤ちゃんできちやうえつちしてるう♡)

千佳の脳裏に、「妊娠」のふた文字がちらつく。先程はそれを自ら仄めかしましたが、それへの怖れが無いというわけでは決してない。「子を成す」というそれは本来神聖なもので、女の子は元より、男とて決して軽々に踏み切つていい領域ではない。

男を受け入れたとはいえ、その子を授かることまでは流石に完全には受け入れてなどいない。ただ、「出来ちゃつてもいい」と口走つたあの瞬間の気持ちは、やけっぱち以外にも確かな願望があつたのだ。

勿論それは「妊娠願望」などでは決してない、ただただ「満たしてほしい」という千佳の孤独への忌避感が生んだ願望に過ぎない。しかし、満たされた結果として子が宿る可能性を微塵も考えていないほど、千佳は馬鹿でも愚かでもなかった。

ただ、覚悟だけは決まっていた。このどうしようもない男を、千佳は受け入れたのだ。ずつと許さないというそれは、翻れば男をずつと離さないということ。許さない為に、離れない、離れさせない、離さない。

男のすべてを許さない。千佳への性的ないたずらを許さない。強引に女として開花させられたことを許さない。さんざん快楽を叩き込まれたことを許さない。あらゆる初めてを奪い散らしたことを許さない。千佳の隠した千佳に気づいたことを許さない。それを強いと宣ったことを許さない。今更改心したことを許さない。千佳を大切にしようとするのを許さない。身体も心も男のものにされたなんて、ずっとずっと許してなんてやるものか。

ならば、繋ぎ止める楔はあるに越したことはない。孤独に気づかなかつたなんてことが、どれだけ幸福だったのか、この男に知らしめなければ気が済まない。

何より、もう誤魔化せなかつた。自分は、そんなふうにならなければ「離れない」理由を何とか探そうとしてしまうほど、墮とされてしまつていたのだ。それこそ、子を宿したならばきつとその子を愛せるだろうと覚悟するほどに。

だから、千佳は必死に腰を振りたくる男に手を伸ばす。ひっきりなしに口から出てくる喘ぎ声を何とか嘔み潰して、男に最後に言葉を送る。

「んあつ♡♡ んくう♡♡ んっ……いっしょ、いっしょにい♡」

「ああつ、一緒にイクつ、イクぞ、チカつ」

「いいつ、よ♡ なにしたって♡♡ ゆるしてあげにやいからっ♡」

「チカつ……?」

「らから♡♡ なにをしてもいいんらよ?♡♡」
 「……っ! ささっ! チカあ!」

きつとそれが、最後のトドメ。

ズパッツズパッツズパッツズパッツズパッツ

「んきゅっ♡ きゃふっ♡はげしっ♡♡ しゅごっ♡♡んひっ♡♡んほおっ♡♡ あ

はあんっ♡♡ おまんここわれりゅ♡♡ きもちよしゆぎて、こわれりゅう!♡♡」

「チカっ! チカっ! チカっ!チカっ!チカあっ!」

これまでで最速の腰の動きで、千佳まんこに侵攻する男のちんぽ。もう、何も考えない。ただ目の前の愛しい女のこと以外など、何も。

「んぎゅっ♡♡ おひんひん♡♡びくびくしてりゅ♡♡でりゅの?♡♡おせーし♡おま

んこにらしゅの?♡♡」

「ああつ、出すっ! 君のおまんこに、俺を刻みつけてやるっ! だからっ、だからずつと許さないでくれっ! 俺をつ、こんな俺をつ、ずつと!」

「いいよっ♡♡じゅつと♡じゅうつと♡♡やんっ♡♡ゆるしやないかりやつ♡♡ いまはっ♡♡ あにやたのしゆきにしてっ♡♡いいんらよっ♡♡わらひもっ♡♡ちやんときもちーかりゃ♡♡ぴゅっぴゅしよ?♡♡ わらひのおまんこ♡♡またいっばいにしていいかりゃ♡♡ んほおおおお♡♡」

「ああっ、出るっ！ チカ、出すぞっ！ イクっ……い！」

「わらひもっ♡♡ イクっ♡♡ しゅごいのきちやうっ♡♡ あふれりゅ♡♡ あっ♡♡♡♡あっ♡♡♡♡」

「ぐっ……い！ 受け止めてくれっ、チカあっ……い！」

そして――

ドビュルルルルルルルル！ ビュルルルルルルウ！

「んきやああああああああああああああん！♡♡♡♡♡」

男の魔羅から、千佳の子宮目掛けて凄まじい勢いで精が放たれる。直撃を受けたポルチオから与えられるえげつないまでの快樂が千佳の神経を焼き尽くすかのような強さで駆け上がり、あまりの衝撃に白目を剥きながら千佳が甲高い悲鳴を上げた。

背は海老反りになり、びくんびくんと身体全体がケイレンする。男の射精は長く、断続的に放たれるそれはあつという間に千佳の子宮内を埋め、どこるか膣内にさえ納まりきらずに、千佳のイキ潮と混じり合うように膣口から溢れ出る。

「~~~~っ♡♡♡~~~~♡♡♡~~~~っ♡♡♡~~~~」

もはや言葉にさえできず、いやいやをするように首だけが左右に激しく動く。

男はそんな千佳の尻を掴むと、最後の一滴まで注がんと腰を強く押し付ける。

「んいおっ!?!♡♡ んほおおおおおお!♡♡♡お、お、お、お、んっ♡♡♡」

それがダメ押しのパルチオ責めとなり、おまんことちんぼの最後のディープキスを受けて千佳は咆哮もかくやというアへ声を上げてイキ狂った。

男の射精が終わりを迎えるまで、千佳の脳にはとんでもない法悦が駆け巡りまくり、そのたびにうねり散らすおまんこひだは男のちんぼを搾りあげて、もう満パンとなった膣内へさらなる一滴を求めぬ。

やがて、その長くも短い時間が終わる。

男の放精が止み、それと同時に許容量を遥かに超えた千佳の意識がシャットダウンする。弛緩するおまんこから、すべてを出し切つて元の大きさへと回帰した男のちんこが抜け出ると、先程までのちんぼサイズに拡がったままの膣口から、どろりとかなりの量の精子が漏れ出た。

意識を失いながらも荒い呼吸が繰り返される。慎ましいおっぱいがそれに合わせて上下し、そのたびにこぼりこぼりとおまんこから溢れる己の精を見て、男に去来するのは冒流的な達成感と、暴力的なまでの罪悪感。

汗と精に塗れてなお、稚さと美しさを同居させるこんな少女を穢した。己が穢した少女こそが、己の醜さを浮き彫りにする。

だが、男に懺悔はあつても、後悔はなかつた。

許さないと、言つてくれた。ずっとずっと許さないと。

ならば、男は彼女のために生きられる。どうしようもないクズが、どうしようもない方法で、どうしようもなく得難い星に手を掛けたのだ。例え灼熱で焼かれようと、高圧に潰されようと、その手を放すことなど男にはもうできそうになかった。それを失う暗黒は、この世すべての恐怖であつても及ぶまい。

そつと千佳の手を取る。

小さな手だ。こんな小さな手で、彼女は自分を顧みずに戦つてきた。突き放される孤独という恐怖を知りながら、何かを救うためにその手を振り上げ続けてきた。

その光は、皮肉なことに男を照らし、そして男の闇を晴らしてしまった。よりにもよつて、色欲に塗れ、千佳を辱めた男を救つてしまった。

ならばと、男は握つた手に力を込める。

彼女のために生きようと、決意する。これは贖罪などではない。男の罪は、他ならぬ彼女が決して許さないのだから。

ただ、男は叶えるだけだ。彼女の願いを、己の全てで。彼女が救いたいのならば、その救いの手を届かせる。彼女が戦うならば、その身は必ず守り抜く。許さない彼女のそばに、許されない男が待る唯一の道。その道に敷かれたのが茨であろうと灼鉄であろうと、男が歩むのはこれよりその道しかあり得ない。

とりあえず、と、男は先程の水トリガーを起動し、同時に収納用のトリガーから清潔

な布を取り出すと、千佳の身を清め始める。

それが粗方終わるか終わらないかの頃になると、千佳に反応があった。

ピクリと、いつぞやのように身体が反応し、次いでその目に光が戻る。惚けた様子で身体を起こし、その身がある程度綺麗になっていることに気づくと、寝起きの表情に「？」を浮かべた。

「はれ……？ キレイにしてくれたんれすか……？」

「ああ、気分は……いいわけないよな。チカ、身体はどうだ？ どこか痛かったり、しないか？」

「ふふ……少し疲れてましゆけど、だいじょーぶです」

呂律こそ回っていないがはつきりとした受け答えに、男が安堵のため息をつく。

そしてそこから、男は千佳に、先程の決意と、少しのわがままを伝えた。

千佳の助けになること。誓ったとおりに、彼女の兄と親友を助けるために力を貸すこと。

許さないでほしいこと。千佳のいない孤独にはもう耐えられないという弱みの吐露。

大別すればその二つだけのことをしどろもどろになりながら伝える男に、苦笑する千佳。

何を今更と。そのすべてを彼女は受け入れる。

すべては、最後の「えっち」の中で交わしたことはないかと。あの瞬間だけは、紛れもなく本音と本音、本心と本心で重なり合っていたのだと。

それを伝えられて、呆けたあとに、男の顔がくしゃくしゃに歪んだ。嗚咽が漏れ、言葉にならない何事かを吐き出しながら、男が泣く。こんな涙の熱ささえ、男は初めて知った。そして、男の形にならない感情が収まるまで、千佳は男に寄り添っていた。

しばらく経って、男が落ち着き、涙に恥入り、千佳がそれを執成して、二人とも着衣して今後の方針を決め、さあこの空間から離脱しようとした時である。

千佳は、事ここに至って、千佳へは敏くなつたくせにひとつだけ大事なことを忘れている男に、意趣返しも兼ねて一つの嫌味を送ることにした。

「さて、トリオン体は多分まだ維持されてるんだろうから、俺のトリガーの効果を解けばチカとの同期が回復するはずだ。そうしたら……チカ？」

「……………」

離脱を直前にして何故か機嫌を損ねたらしい彼女の様子に、男が怪訝な顔を向ける。

千佳はあまりしないようなジトツとした目を男に向けるばかりで、その理由に思い至ることができない男はあたふたとすることしかできない。

本当に、この男ときたら、敏いのは千佳に起因する千佳に関することだけで、その因果が男自身にある場合は頓着できないらしい。

千佳はため息を一つ吐き、まあ、ある意味そういうところは似たもの同士かと内心で苦笑した。

そして表面上は不機嫌を取り繕ったまま、目の前の最低男に言ってる。

「わたし、貴方のお名前も、まだ知らないんですけど、強姦魔さんっ」

その瞬間、男の顔がとても面白くなった。そして、ひたすら謝りながら自分の名を告げてくる男の様子を見て、千佳は笑いながら、絶対に暫くは名前で呼んでやらないことを心に誓うのだった。